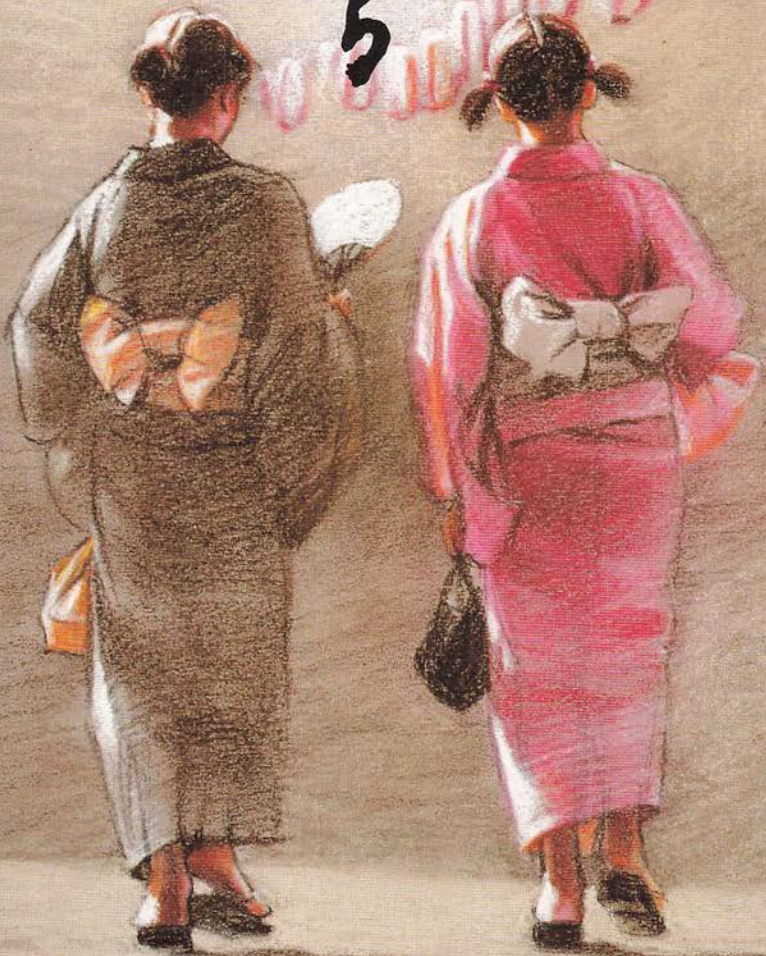


第50号 令和元年11月  
関東水上郷友会

# 山 姥 ち



Teppan. 9

# 三協運輸 株式会社

本店住所 埼玉県桶川市坂田字向990-1

創立30周年を迎え、お陰様でつつがなく発展しております。

東海道を中心に大型トラック約200輛

最新鋭設備を備えた物流センター及び倉庫約12,000坪  
を軸に毎日フル稼働の体制で活動して参ります。

[安全・安心・朗らかに]を旗印にご期待に応じて参ります。



本店 新社屋(敷地面積4,000坪、建物面積2,000坪) 平成23年10月1日完成



関東発一関西行の風景  
出発直前の大型トラック部隊

毎日200台の車輛群が東海道を  
中心に走っております。

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)  
キリンビール(株) 沖電気工業(株) 古河電工(株) ハウス食品(株) 帝人(株)  
新神戸電機(株) (株)東芝 キュービー(株) (株)ブリヂストン 江崎グリコ(株)

# 三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(水上町出身)

本 店 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (728) 9380  
E-mail : sankyounyu\_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (729) 0466

大阪支店 大阪府大東市新田中町3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

山  
ぎ  
ら

第50号

究極の辛口



# 山ざる 第50号 目次

〈表紙〉笹倉鉄平画「夏祭り」(技法・パステルペンシル)／〈扉〉写真Ⅱ徳田八郎衛

ご挨拶……岸本 勲 5

平成30年度「ふるさとの会」開催……6

金出武雄先生講演「観戦記」……8

平成30年度「ふるさとの会」出席者……11／会計報告書……12

懇親会スナップ……13／祝寿の方々ご紹介……18

特別企画 表紙絵に見る「山ざる」五十号史……28

渡邊名誉会長を悼む……35

## 《山ざると私》

私と「山ざる」……西川宣孝 38

懐かしい人々……小田晋作 41

私と「山ざる」……高見秀史 42

日日は好日……久呉道子 43

一日一日を大切に……伊藤富士子 46

私と山ざる……木呂子恵美子 48

## 《ふるさと随想》

われらの丹波市……稲岡俊一 51

柏原で過ごした十八年間……岡 吉明 53

故郷の秋祭……原 利充 57

私のふるさと感……原川美恵子 59

国語の佐藤先生……藤原 保 61

輝いていた懐かしい陸上選手時代……林 進 62

## 《インタビューコーナー》

金出武雄さん 苦しいときに生きた母の教え……編集部 66



《近況・エッセイ》

柏陵同窓会東京支部長を終えて……谷口浩章 73

戦時中の思い出……中松美年子 76

命拾いの記……大坪眞子 79

ザルツブルクへの想い……足立さつき 82

蘭学事始……山口敏之 85

究極の碁——郵便碁……足立 正 88

朝食後の歯磨きはダメ!? 正しい歯磨きの方法……形田恒夫 90

「東京オリンピック」「2020パラリンピック」に夢をかけた二人の女史……足立敏昭 92

東海道6日間自転車旅へその2 平成30年1月25日～1月30日……廣内喜彦 95

《私の職場》

万年筆の駆け込み寺……藤井栄蔵 101

《丹波から》

なぜ今丹波なのか 本当の自分が選んだ丹波暮らし……戸田晴菜 125

《丹波ブランド紹介》

〈その10・丹波かいばら雛めぐり〉女性手作りの「吊るし雛」……古西 純 131

《丹波人物伝》

洞穴探検家 越智研一郎君追想後日譚……野村節三 136

井上 秀 女子高等教育の先駆者 その4……徳田八郎衛 141

『芋銭泊雲来往書簡集』を読んで 泊雲さんのこと……芦尾芳司 147

《丹波通信》

丹波市は女子高校球児の聖地……荻野祐一 152

《山ざる研究》

丹波史研究 阪鶴鉄道唱歌を知っていますか……徳田八郎衛 156

《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇……104

ふるさとトピックス（丹波新聞から）井徳正吾……112

《MYギャラリー》芦田美代子／酒井典子／粕谷迪子／足立悦男……113

《簡単レシピ》松田けい子／山本喜則……117

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 119 BOOKS……160

会員だより……163 同窓会だより……168 インフォメーション……170

寄付者芳名……172 《協賛広告》……173 編集後記……186

おじやみ唄

おん さかさか あかさかどう

よつやのどう

よつや あかさか こうじまち

かいどう ずっといったなら

おかごで いくのは いくらでしよう

もちと まからんか まからんでしよ

てんから わくのは てんのみず

したから わくのは しみずという

ひいや ふうや みいや ようや……

ここのつ かえして おしろのさ

第27号所載「おじやみ唄」

佐藤(泉) 菊子さんリ氷上町リ稿より

## ご挨拶

会長 岸本 勲

初春の(令)月にして気淑く風(和)ぎ

梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫らす



令和という元号とともに新しい時代が始まりました。我々、日本の社会・経済はこれからどうなるのか、時の節目に誰しもが思うことでしょう。

令和新時代の新一万円札の顔、渋沢栄一は日本初の民間銀行や丹波に縁の深い東洋紡を始め、五百近い企業の設立に関り、近代日本経済の土台を作りました。金融から鉄道、港湾、海運、製造業、帝国ホテルまで。社会・経済の発展に欠かせないとの信念がありました。「日本の資本主義の父」と呼ばれる所以です。渋沢は、道徳と私企業の利益の両立を求める「論語と算盤」精神を唱え、利益至上主義と一線を画した人物でした。丹波の人々が深く関わった東洋紡の樽原社長は、「順理則裕」―「社会を豊かにして、企業を豊かにする。豊かになったお金で更に世の中を豊かにして企業を豊かにする。」自分の代で途絶えさせず、子や孫にどう存続させるかが大事で

ある、と説いています。「算盤だけで論語を忘れて稼いだ利益は長続きしない。」企業の社会的責任やコーポレートガバナンス（企業統治）は、令和の新時代こそ成熟させるべきであります。

明治二十九年に発足した「関東氷上郷友会」は、明治、大正、昭和、平成、令和の時代へと引き継がれました。嘗々百二十三年の歴史であります。その軌跡を大事にしながら、次の時代を見据えて今、何を成すべきか、皆様の英知を集めて実行していきたいと考えます。昨年の百二十二周年記念総会では、ロボット工学の世界的権威者、金出武雄博士（春日町出身）が、米国ピッツバーグから駆けつけて下さいました。今年は百二十三周年を記念して、丹波で誕生された丸川珠代代議士に記念講演をして頂きます。

丸川代議士は、環境大臣、東京オリピック・パラリンピック担当大臣を歴任された他、様々にご活躍中です。丹波に生まれ、東京で活躍されている皆様方が、所縁のある活躍中の丸川代議士をお迎える、これぞ東京へ出てきた証左であると存じます。

令和元年十一月二十四日（日）、学士会館での百二十三周年記念総会には、大勢の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。





## 平成30年度「ふるさとの会」開催

平成30年度の「ふるさとの会」は12月1日(土)11時より、東京都千代田区の学士会館で開催、藤田純常任理事の総合司会の進行で行われました。

総会に先立つセミナーは、金出武雄先生(米国のカーネギーメロン大学教授)に「自動運転車「Navlab 5」、やスーパーボールで採用された30台以上のロボットカメラで360度の視野の映像を撮影する「Eye Vision」システムなどの経過やその未来図などについて」熱く語って頂きました。(8頁参照)

総会では岸本勲会長の挨拶と報告、引き続き、谷口副会長(会計担当)よりの会計報告、監査報告、役員改選について新役員、退任役員の紹介があり、拍手で了承頂きました。

その後、満80才を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた皆さんのうち参加頂いた今田二三夫さん他6名の方々に岸本会長より祝辞と記念の似顔絵を贈りました。いつもながらお若く、とても年齢を感じさせない容姿に感心するばかりでした。(なお今年も似顔絵の制作は、ふるさとひょうご「道草」句会の宗匠住田道人氏にお願



いしました。)

懇親会は岸本会長の  
司会で開会、特別ゲス  
トの名誉碁聖大竹英雄  
先生にご祝辞を頂き、  
続いて柏陵同窓会会長  
竹内牧人様に柏陵同窓  
会の近況等の報告と乾  
杯の御発声を頂き宴会  
がスタート、大竹名誉  
碁聖よりの記念品の抽

選会もあり、金出武雄講師、大竹英雄碁聖との2ショット写真を撮られる参加者も多く、又過去に講演を頂いた織田家19代当主織田信孝さん、元NHKチーフディレクターの村上信夫さんにもご参加いただき、楽しく賑やかな会となりました。

今年も昨年好評だったパームアイランダーズによるハワイアン音楽の演奏、石原ひな子さんのフラダンスには昨年同様、飛び入り参加も加わってフラダンスのレッスンも頂き和やかな楽しい会となりました。又今

年も関西からのご参加もあり、より一層会を盛り上げて頂けました。

岡田昌子副会長「山ざる」編集委員長より今年の「山ざる」の発行に付き投稿のお礼と次号への投稿依頼の挨拶も熱く語って頂きました。

いつもながらあつという間に予定時間が終わってしまふという楽しいひとときを過ごし、恒例のお楽しみ抽選会は参加者全員にチャンスがあり、空くじ無しで「丹波やまいも」、「丹波黒豆」、「丹波産古代米赤米」、「丹波風土(やながわ)のお菓子」などがそれぞれ全員に渡るようされ、全員何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。

今年も西山酒造様より銘酒の差し入れを頂き、皆さん懐かしい味に酔いました。

総会の締めくくりは関西より参加いただいた吉見弘文さんの指揮で「故郷」の大合唱になり大いに盛り上がりを見せました。

和やかな会も来年又元気に会えることをお約束し閉会となりました。  
(岡 吉明)

## 金出武雄先生講演「観戦記」

ロボット工学者  
カーネギーメロン大学ワイタカー記念全学教授

### 金出武雄氏 講演会



プロフィール 1945年春日町柏野生まれ。大路西小学校1年の時に神戸市へ。県立兵庫高校から京都大学工学部電子工学科に入り、同大学院博士課程修了。助教を経て、80年にカーネギーメロン大学計算機科学科・ロボット研究所に招聘。その後、2001年まで同大学ロボティクス研究所長。人工知能、コンピュータビジョン、ロボット工学の世界的権威。2016年に京都賞を受賞するなど受賞多数。金出一郎元伊藤忠商事副社長は実兄。

### 「人工知能は必ず人間に勝つ」

人工知能（AI）やロボットの話題は毎日のようにニュースになる。その第一人者の講演会は「今日は大学の授業のような話をします。覚悟して聞いてくださいよ」と、笑いながらのジョークで始まった。

確かに最近のAIの肝である「ディープラーニング（深層学習）」のくだりは正直、私にとっては分かった

ようで分からない内容だった。ただ、この技術の発展で、コンピュータが人間の脳にグッと近づいたことがよくわかった。

最初の世界的な研究成果は京大大学院時代の45年前の研究。「世界で初めてコンピュータで顔を認識した研究でした」。デジタルカメラやスマホで写真を撮ると人の顔の部分を認識し、教えてくれる。その基本を確立したのが金出さんで、「ロボットの目」の発明者だ。

「ロボットの目」で車を運転する自動運転技術は最近になって注目されているが、金出さんは1984年から研究に着手。1995年にはアメリカ大陸を東海岸のピッツバーグから西海岸のサンディエゴまでの約5000<sup>キロ</sup>の98・2%を自動運転で走り抜いた。安全のために運転手はハンドルを握ったような姿勢で運転席に座った。「人が運転した方がはるかに楽と思えるようなものでした」と振り返り、当時のこんな出来事を紹介した。

自動運転でアメリカ大陸を横断したという新聞記事を読んだ有名なコメディアン、ジェイ・レノは「運転



中に新聞を読んだり、コーヒーを飲んだりできる車を世界初で開発したって言うが、ロサンゼルスでは昔からみんながやっているよな？」と言ったらしい、と金出さん。どつと笑いが起きた。

20年以上も前の開発物語だが全く色あせていないと思う。金出さんの研究はとても先進的なものだった。



2001年のアメリカン・フットボールの「スーパーボウル」で話題になった「アイビジョン」も金出さんの研究成果。「映画『マトリックス』のように決定的プレーを、時間を止めてグルッと回って見せる映像再

生システムがアイビジョンです。それをスーパーボウルで実現しました。スタジアムには多数のカメラが四方八方に設置され、そのカメラが捉えた映像を処理した「仮想化現実」が視聴者に披露された。

この時、スーパーボウルの中継放送に出演した金出さんは「スーパーボウルに出演した唯一の大学教授」となり、金出さんは「今もその記録は破られていない」と、また笑いを誘った。

AIは人間を超えていくのかも大きな関心事だ。金出さんは「私は、AIは必ず人間に勝つと思う。人間は計算機械に過ぎません」と言い切る。ドキッとする表現ではあるが、人間が光や音という物理的な信号を取り込み、脳で情報処理して、体を動かすという意味で、人間は「計算機械」なのだという。(66ページのインタビュー記事参照)。今のコンピューターの性能が高まれば計算機械に過ぎない人間を超えていくのは、金出さんにとっては自明なのだろう。

「1000人の顔写真を見せて、街角で顔写真の人が歩いていたら知らせなさい、と言ってもほぼ不可能です。人は知人なら見つけますが、写真で見た人を見

つげ出すのは無理です。でもコンピューターは見つけます」

いくつかの能力でAIがすでに人間に勝っているのは確かだ。でも「創造性は人間にしかないのでは？」と思いたくなる。金出さんは講演をこう締めくくった。

「人間は自分より強いものを受け入れたくはありません。自動車が誕生したとき、自動車と競争しようとした人がいました。でも今は自動車の勝とうと思う人はいません。今後、知能でも負けるのか？という問いかけは、つまり知能とは何か、創造性とは何か、人間とは何かという根本的な疑問を私たちに投げかけているのかもしれない。でもここにお集まりの方々のご安心ください。まだ人間とAIとの差がありますので、すぐには追い抜かれませんか」。最後も会場は笑いに包まれた。

(安井孝之)



撮影・岡 吉明

◎平成三〇年度「ふるさとの会」出席者

(順不同・敬称略)

来賓

入江武信 兵庫県東京事務所所長

井上千早彦 柏原高校校長

竹内牧人 柏陵同窓会会長

小田晋作 丹波新聞社会長

大竹英雄 日本棋院元理事長名譽碁聖・囲碁棋士

七瀬隆幸 大竹英雄先生秘書役

芦尾長司 元兵庫県副知事

川崎修 兵庫県人会顧問

東京兵庫県人会幹事

講師

金出武雄 米国 カーネギーメロン大学教授

演奏とダンス

パーム・アイランダンスと石原ひな子

祝 寿 昭和13年生まれ(一九三八年)

今田 二三夫 木寺昭三 木呂子惠美子

坂上登 谷口捷 徳田八郎衛 林孝男

会員

青垣町 蘆田斉 蘆田あつ子 足立悦雄 足立晴夫

足立吉数 飯田光雄 田村公平 安原三智子

市島町 荒木司郎 荒木輝雄 石橋順子 井出恭子

白井田鶴子 木寺昭三 高見秀史 藤田純

丸川宥次郎 山本喜則 吉見弘文 丸川寛子

柏原町 足立和子 稲岡俊一 植田茂樹 岡吉明

岡田昌子 織田信孝 河本幸子 瀬々妙子

竹内一郎 谷垣邦夫 徳田八郎衛 仁藤欽嗣

三觜洋子 山本明弦

山南町 植木十和子 形田恒夫 久保良雄

勢川武彦 仲一聰 中居篤子 林孝男 原谷洋美

廣瀬安伸 廣瀬庸世 藤井栄蔵 藤本和幸

藤原ひさ子 吉田惠美子

氷上町 足立和孝 足立明子 足立謙悟

足立ひろ子 足立義雄 安達健一郎 井上巖

上高子 上田道代 岸本敏子 岸本勲 小林正

酒井典子 坂上登 坂上勝朗 谷口捷 谷口浩章

徳榊雅孝 本城英明 安井孝之

春日町 足立忠司 今田二三夫 金出一郎

木呂子惠美子 近藤利春 原利充 村上信夫

柳川拓三

西脇市 笹倉強 笹倉郁子



# 会 計 報 告 書

(平成 30 年 7 月 1 日～令和 1 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会  
 会計担当副会長・谷口 浩章  
 理事・原谷 洋美

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,771,278	郵便貯金 971,278	出 版 費	854,200	『山ざる』49号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	193,855	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	792,210	総会関係支払
年 会 費	374,000	延187名	会 議 費	154,660	役員会等
総 会 費	669,000	84名	支払手数料	290	振替手数料
会 議 費	149,000	42名	消耗・備品費	92,210	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	243,000	延60名	繰 越 金	1,689,212	郵便貯金 889,212
広 告 料	555,000	延43名			定額貯金 800,000
冊 子 代	15,356				振替貯金 0
そ の 他	3	利子			
合 計	3,776,637		合 計	3,776,637	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

令和1年 8 月 8 日

会計監査 谷 敬三  
山本喜則



# 懇親会 スナック

撮影：岡 吉明













# 祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で80歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる25名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、8名の方から回答頂きましたのでご紹介いたします。また、浜田春子様からは、元気にしているとお返事をいただいています。(誕生日順)

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられて一言

生まれた年Ⅱ昭和14年(1939年)・己卯 国民精神総動員委員会設置。標語「建設へ 一人残らず 御奉公」。ゼロ戦の第1号機完成。69連勝中の横綱双葉山敗れる。NHKラジオで徳川夢声の「宮本武蔵」朗読始

まる。映画「純情二重奏」「新女性問答」「暖流」「清水港」。歌謡曲「大利根月夜」「熱海ブルース」「チャイナ・タンゴ」「一杯のコーヒーから」「父よあなたは強かった」。物価 卵1個5銭、もりそば10銭、サンドイッチ35銭、コーヒー15銭、アイスクリーム10銭。

生まれた年Ⅱ昭和15年(1940年)・庚辰 日本・ドイツ・イタリヤの間で三国同盟結成。皇紀2600年。日本中のダンスホール完全閉鎖。カタカナ芸名改名通達↓ディックミネは三



日置 孝彦様

根耕一に。流行語「ぜいたくは敵」「あのね〜おっさん、わしやかなわんよ」。映画「支那の夜」「小島の春」「燃ゆる大空」。歌謡曲「誰か故郷を想わさる」「月火水木金金」「湖畔の宿」「隣組」。物価 白米一升43銭、砂糖1kg47銭、ビール(大瓶)45銭、そば15銭。(編集担当 本城英明)

① 昭和13年(1938年) 5月21日  
② 氷上町御油

③ 昭和36年(1961年) 4月6日  
④ 大学入学  
⑤ 昭和43年(1968年) 神奈

## 祝寿の方々ご紹介

川県職員に採用され県立金澤文庫に配属。昭和63年（1988年）12月施設の老朽化に伴い新館の起工式に立ち会う。

平成2年（1990年）3月、新装金澤文庫完成。平成2年10月14日、県立金澤文庫新装開館落慶式。博物館の学芸員として旧館の解体から新装開館に至る重大な局面に従事出来た事は、我が誇りに思っている。

⑥ 知識情報の爆発社会の現状を打破するには自律分散の分担による協調社会がのぞまれる。

### 高田 守様

① 昭和13年（1938年）11月18日

② 柏原町

③ 1回目昭和51年（1976年）、2回目昭和61年（1986年）

④ 会社内の転勤です。

⑤ 平成23年（2011年）、東日本大震災から既に数ヶ月経っていましたが、宮城県南三陸町でバスを降りたとき、まわりには、駅もバス停もなく、家一軒もなく、ただ住居の土台だけが延々と露出している様子が絶句しました。これは本当なのかと、信じられない思いでした。

⑥ 幸いにこの年令まで元気に過ごせて感謝しています。大腸がん等に罹りましたが、いずれも経過に問題なく、幸運なことであったと思っています。既に、がん等で逝った友人も

少なくないのですから。

### 片岡 クミ子様

① 昭和14年（1939年）1月1日

② 市島町南

③ 昭和49年（1974年）12月

④ 主人の転勤

⑤ 大阪、奈良、和歌山と最後東京と転勤人生を送りましたがどこへ行ってもすてきな奥様に会いと別れの複雑な思い出です。

⑥ 少し長生きしすぎたかなあと思いながらも週五日程のボウリングで楽しんでいますがこれから先が心配です。



## 祝寿の方々ご紹介

### 細川 倫夫様

- ①昭和14年（1939年）3月28日
- ②山南町（旧上久下村）下滝
- ③昭和36年（1961年）3月25日
- ④日立系関連会社に就職。東京本社で1ヶ月研修後、横浜市磯子区の工場に配属
- ⑤1971年の夏、発電用ボイラー据付工事指導で訪れたブーゲンビル島のジャングルで、今でも飛び立てそうなゼロ戦の翼の日の丸と操縦席に「上ゲル」「下ゲル」の文字が鮮明に残っているのを見た時。
- ⑥葉の種類・粒数を減らす努力。

### 井本 京子様



- 84
- ①昭和14年（1939年）4月12日
- ②水上町油利1
- ③50年前くらい
- ④主人の転勤
- ⑤千葉、名古屋など主人の勤務で動き、もう転勤はないだろうと今のこの家を建てました。丹波の父はとても喜んで見に来てくれましたが3ヶ月後交通事故で亡くなり好きだった相撲やプロ野球を見せてあげられませんでした。主人も家を建てたらずぐ金沢、その次は仙台と転勤でした。10年後主人も帰ってきて、庭にた

くさんの草花を植えました。園芸の好きだった主人も昨年亡くなり私は主人の分まで草花を育てています。

- ⑥子どもが大好きなので保育士として60才まで自分が子ども一人のように楽しく元気に過ごしましたが最近足腰が弱くなり病院通いも多くなりました。料理が大好きなので（主人は私のことを台所の帝王と言っていました）いろいろ作っては近くに住む娘宅や御近所に食べてもらっています。いろいろなスポーツ観戦が何より楽しみです。

### 田村 紘三様

- ①昭和14年（1939年）4月

## 祝寿の方々ご紹介

17日  
②市島町酒梨

③昭和39年（1964年）3月  
④高島屋本社外国部に入社、勤務の為

⑤昭和47年（1972年）、高島屋本社外国部に勤務時代、「エーゲ海展」開催準備の為、羽田空港からギリシャのアテネに向かう途中、最後經由地ニューデリーからアテネに向って飛びたった30〜40分後に乗っていたルフトハンザ航空機がハイジャックされた。  
⑥一生現役でいたい。

### 五十嵐 寛子様



①昭和14年（1939年）6月27日  
②柏原町

③昭和39年（1964年）10月  
④結婚（主人の転勤）  
⑤40代50代の間、主人の（大学ゼミの仲間）友人夫婦3組で欧州米国アジア等々20国近く一緒に旅行して数限りない共通の思い出を作れた事、三人の娘達がそれぞれ志望大学↓希望職場を持ってそれぞれによりき伴侶を持って倅せに暮している事

⑥源氏物語を大学の先生方による原文講座で全巻読破を目差して25年間あと5／54巻で目

的達成へのトンネルの出口が見え、週2〜3回受講して生命のカウントダウンより目標へのカウントダウンが勝つ事を願って健康問題と闘いながらライフワークに打ち込んでいます。

### 足立 和子様

①昭和14年（1939年）9月28日

②柏原町

③昭和49年（1974年）9月  
④夫、足立勝の転勤。旭化成水島支社から東京本社勤務を命じられた為、厚生施設が充実している社宅（現住所に隣接）へ転居しました。当時は緑豊かでしたが住宅が密集してし

## 祝寿の方々ご紹介

まいりました。しかし、生活の  
便利さは抜群です。

⑤平成31年（2019年）4月  
21日「皇居吹上御苑自然観察  
会」に足立勝と参加し10ヘク  
タールの広大な地が東京のど  
まん中に昔のままの状態で保  
全されていること。丹波の里  
山の自然にも似た情景にめぐ  
りあえたことです。東京近郊  
に生活しているからこそ宮内  
庁申込みが出来た。1時間余  
の観察会でしたがすばらしい  
体験でした。

⑥日々健康で過ごせるよう努力  
する。出来るだけ「歩き」音  
楽や旅で感動とよろこび、旅  
は種々資料から自分旅を企画  
して一人旅を楽しみながら、  
その折々に出会った方との交  
遊を深めあう。そのような、

今の暮らし方が出来るだけ継  
続していけるよう願っています。

### 松原 久明様

①昭和14年（1939年）9月  
30日生れ

②山南町下滝

③昭和45年（1970年）10月

④昭和42年（1967年）9月

大阪の食油製油会社に入社。  
昭和45年10月食品加工用新素  
材原料を東日本地区の食品会  
社の得意先に拡販の為に東京  
に転勤。

⑤平成7年（1995年）1月  
17日に発生した阪神淡路大震  
災に伴ない神戸市内にある新  
素材原料生産工場が、水道用

水供給ストップに伴ない約1  
ヶ月以上工場閉鎖。当初得意  
先の反響は大変同情的でした  
が、一週間以上納入ストップ  
が続くと、同情から苦情に変  
わり、大苦戦、急遽対応策と  
して関東地区同業他社に委託  
生産をお願いし、何とか乗り  
切れたことが、最も印象に残  
る出来事の一つと思います。

⑥巷に「高齢社会悲観論」が溢  
れています、多世代共生交  
流コミュニティの創造。安心  
安全、つながり、生きがい、  
尊厳、健康をモットーに、お  
互いに認め合うシニアが街の  
宝になる社会に参画し、今後  
期待したい。また、施設に入  
らず、家で、綺麗に老い、い  
つも好奇心を持つことが、理  
想です。

## 祝寿の方々ご紹介

### 山口 泰男様



①昭和14年（1939年）10月  
②氷上町  
③昭和41年（1966年）7月

④上京と言っても、私の場合は東京を通り過ぎて、仙台までやってきました。東北大に就職したためです。最初は5年くらいで関西に帰るつもりでやってきたのですが、居心地が良く50年以上の長逗留になっています。

⑤やはり東日本大震災でしょうね。前に「山ざる」にも書きました。出張の帰りに北茨城を通っているとところで地震に遭遇し、避難所とタクシー

のおかげでなんとか仙台まで帰ってきました。それにしても、沿岸部の津波の痕はすさまじいものでした。あれから8年たち、沿岸部もようやく形が少しずつ整いつつあるようです。

⑥これまで、結構好きに生きさせていたように思います。我儘を許していただいた周りの人達に感謝しています。これからどれだけ生きられるかわからないですが、世の中がどのように変わっていくか見ていきたいと思えます。

### 西川 宣孝様

①昭和14年（1939年）10月13日

②青垣町田井縄

③昭和33年（1958年）4月

④大学進学のため

⑤貧乏学生で、下宿代が支払えず追い出され友人の東京外語大学日進寮に半年間潜り込む居候生活や男二人で三畳一間のアパートの共同生活をして

凌いだ昭和30年代の貧乏が懐かしいです。学生時代の「清く貧しい」4年間の生活の教訓は、社会人の40年を落伍せずに無事に務めあげる糧になったようです。

⑥現役時代は、マラソンランナーのように絶えず走り続けましたが、右肩上がりの好景気に恵まれ、子ども時代の貧乏を跳ね返すような生活となり、戦争もない平和な良き時代がありました。これからは、元

## 祝寿の方々ご紹介

気で、戦争のない平和な国づくりを期待して過ごしたいと思えます。

### 原田 紀子様

①昭和14年（1939年）12月

6日

②氷上町成松

③昭和39年（1964年）10月

④結婚を機に。折しも東京ではオリンピックが開催されており、それに合わせて、この月開通したばかりの新幹線の上京でした。

⑤昭和45年（1970年）代初

頭、まだアパルトヘイト体制下にあった南アフリカで、初めて「白人」「非白人」の区別がある郵便局の入り口を前

にした時のこと、どうしても入って行く決心がつかず、そのまま帰って来てしまいました。知ってはいても現実はこの標識に直面した時の衝撃、「名誉白人」という微妙な立場へのとまどい、今も心に残っています。

⑥この先の人生に与えられた時間には限りがあることを思い、その時々を大切に過ごしていきたいと思えます。

### 山本 述子（紀子）様

①昭和15年（1940年）1月

5日

②山南町

③昭和39年（1964年）

④就職の為（親戚の医院を手伝

う為）

⑤市内の「小網代の森」の保全活動を30年以上続けられ保全が叶ったことです。その間には資金集めのバザーや観察会、他団体との交流、公共機関への働きかけ等々行ってきましたが、いずれも苦にならず、あつという間でした。自然の素晴らしさや、仲間の協力に恵まれ幸せな経験でした。

⑥親兄弟は関西在住ですが、両親の親戚に関東在住者が多くて、何かといえ相談し、遊びに行きと淋しいなどということはなく暮らせ、感謝の気持ちで一杯です。また丹波で丈夫に生まれ、自然の中で遊び、手伝い、体力をつけてきたことも有難いことだと思っています。今後も無理をせず



## 祝寿の方々ご紹介

自然体で出来ることは、自分の力で行っていければと思います。

### 仲 一 聰様

① 昭和15年（1940年）1月20日

② 山南町

③ 昭和33年（1958年）2月中旬

④ 大学受験のため2月中旬に上京。3月の高等学校の卒業式は欠席。卒業証書は受け取れず。一浪して、大学には8年間在籍。その後、秋田に工場がある製紙会社に入社。32年間、仕事を定年。

⑤ 「山ざる」は50号を発行することのこと。永くよく続いたと

思います。昭和40年度の関東氷上郷友会の総会が、東洋経済新報社の会議室で行われ（出席者20名位）、石橋会長が、雑誌の発行を決意され、翌年、「山ざる」第1号が発行されました。内容は、住所録であったと、聞いております。第2号以降は、母校へ寄贈しました。

⑥ 人は年を重ねたら老いるのではない。理想を失ったときに老いるのである。サムエル・ウルマン

### 大木 健次様

① 昭和15年（1940年）1月22日

② 山南町谷川

③ 昭和53年（1978年）1月10日

④ 久保田鉄工（K・K）〔現：クボタ〕堺事業所より千葉県市川事業所に転勤の為。

⑤ 時雨時になり、各地で水害のニュースを聞く度に、笹山川も毎年の様に溢れ橋が流され、通学に遠廻りをした事、その川の兩岸の竹藪ではホタルが飛び交っていましたが、今では、川中も広くなりコンクリートの白い川に変わってしまいました。

⑥ 後期高齢者と云われ又、戦争を知っている数少ない人間の部類になって来た。「健康寿命」でもう少し人生の終りを楽しみ送りたいと思っている。

# 祝寿の方々ご紹介

## 大塚 秀式様

①昭和15年（1940年）1月28日

②氷上町（旧生鄉村 市辺）

③昭和33年（1958年）2月  
高校卒業式の前

④柏原高校1年の7月に母が、9月に父が病死し、年内、隣の小森さん方でお世話になり、3学期に大阪府立豊中高校に転入し、卒業まで箕面市の義兄の家に世話になりましたが、甥や姪が4人もいて、そこから逃げたく東京を目指しました。

⑤中学時代、野球部に入り、畑中先生の指導といい先輩に恵まれ郡大会優勝したこと、早稲田で一文の自治会役員にな

り、連日、安保闘争のデモや各種集会に参加したこと、埼玉で臨時教員になり、その後、7年中学校、最後の2年を小学校の校長として、児童生徒と楽しい生活を送れたことなどでしょうか。

⑥氷上で15年。東京で7年半（浪人、早稲田大学、民間企業）埼玉で教員となり定年まで勤めました。住まいは30歳から館林になりました。人間の運命とは不思議なものだと思います。それでも、二人の娘と3人の孫に恵まれ、幸せな人生だったかなと、関わった多くの人々に感謝しています。

## 長尾 幸男様

①昭和15年（1940年）2月1日



②成松

③昭和37年（1962年）3月

④大阪にある大学を昭和37年3月卒業、同年4月1日（株）

東芝入社、川崎市の工場に配属。42歳の時、工場勤務から本社勤務にかわった。川崎市立川市、大和市と住居は変えたが、入社以来65歳で会社役員を退任するまで、そして、現在までを含めて、関東、京浜地区以外に住居を移したことがない。

⑤昭和46年（1971年）2月10日夜7時過ぎ、長女誕生。

## 祝寿の方々ご紹介

東京都立川市の病院、別室で待機している時、産室でかわいいうちちゃんの声が聞こえ、控室から飛び出し廊下を一気に駆けて、ガラス張りの壁で仕切られたベビー・ルーム前に着いた。その部屋の中で看護師さんに抱きかかえられている小さな我が娘を見た、そのことを昨日のことのように覚えている。

⑥ 80歳の実感は何と問われると、答えに窮する。80歳だと自分に言い聞かせないと、その長い年月の重みを実感できないのが本音である。さらに、何をなし、何を残したかと自問する時、70歳まで悩まされたあの、無念だ……、もつとやれたはず……、もう一度人生を……と、思う気持ちはかな

り薄れ、今は、すべてをありのまま受け入れ、いい意味で無の境地になれる時間が多くなった。

### 小山 孝雄様

① 昭和15年（1940年）2月4日

② 春日町黒井芝町

③ 昭和61年（1986年）11月4日

まず単身で上京

④ 社会勤務。子供達が学生・生徒であった為、翌年の3月末まで単身で上京。

その後、家族も上京した。約10年間で都内の各地を社宅住まいをし、その後現在地に住まう。

⑤ 「思い続けると実現する」と云います。私の中で振り返る

とその通りであったことが多々あるのです。この年になると、その事がマイナスに働かない様気をつけています。もう55年以上前のこと、信州の雲ノ平に遊んだことがあります。その天空の風景は至福の一刻を与えてくれました。その記憶を時々思い出すのです。今、雲ノ平をテーマとした紀行文や小説を読まない様になっています。再び訪れることになって、私の雲ノ平のイメージが壊れることを恐れるからです。

⑥ 現在も仕事をしています。仕事をすると多くのことが学べる面があるからです。「朝に道を聞かば」の如く、あと5年程仕事をして6年目にあわよくば去っていきたいと我儘にも思っているこのごろです。

# 特別企画 表紙絵に見る「山ざる」五十号史

昭和四十年十一月二十日、東洋経済クラブ会議室において開催された関東水上郷友会総会の席上、時の会長石橋治郎八氏から、会員親睦のツールとして「機関誌」を発行したいという提案がされました。それを受けて、翌年昭和四十一年十一月に「山ざる」第一号が発行されることとなります。残念ながら、この創刊号は事務局には保管されておらず、伝手を頼って調べてみましたが見つかりませんでしたので、ここに掲載することができません。

立派な表紙絵を戴くようになったのは、昭和四十五年十一月に発行された第二号からで、当時東京芸術大学名誉教授であられた常岡文亀画伯にお願いしたのでした。十号までが生存中の「山ざる」のためのオリジナル作品で、十六号までは遺作の中から、ご子息の幹彦画伯が選んで提供いただきました。

十七号から三十六号までは、その幹彦画伯が提供してくださいました。日常の創作作業中も「山ざる」のことが脳裏を離れず、そのことで、よく二玄社社長の渡邊隆男氏と話し合ったものと述べられていました。

三十七号から四十三号までは陶彫作家の可部美智子師。陶彫とは「土を焼いて作る感性豊かな面白い彫刻」(日本陶彫刻会)。

四十四号から五十号までは、笹倉鉄平画伯。今後も能う限り笹倉画伯にお願いしてゆきたいと存じます。

これらの作品は「山ざる」のために、すべて無償で提供して頂いているもので、感謝してあまりあるものがございます。

では「山ざる」五十号史表紙絵展覧会をごゆっくりお楽しみあれ。

(文責 坂上勝朗)

※表紙撮影と構成は岡吉明さんをお願いしました。



き 文 亀  
お 常  
つ ね

柏原町出身

明治三十一年(1898)生、昭和五十五年(1979)没

東京美術学校(現東京藝術大学)主席卒業。昭和三年母校助教のち教授。昭和四年「鶏頭花」同八年「棕櫚」で帝展特選。日本画に洋風のリアリズムを加味した花鳥画を得意とした。



第4号「燕子花」



第3号「松茸」



第2号「栗」



第7号「露の塔」



第6号「南天」



第5号



第10号「茄子」



第9号「水仙」



第8号「菊の花」





第13号「桔梗」



第12号「菊」



第11号「花菖蒲」



第16号「柘榴」



第15号「鉄線・江戸紫」



第14号「花菖蒲」



第17号「漂霧」

柏原町出身（文亀長男）  
昭和五年（1930）生く平成二十七年（2015）没  
東京芸術大学日本画科卒業。日展に十四回入選、昭和五十四年からは主として個展を中心に制作活動。父の存在を常に意識しながら次第に山水画・風景画へと傾斜。「彩と玄のあいだ」を極めようとした。



つねおかみきひこ  
常岡幹彦



第20号「おぼろ」



第19号「高源寺」



第18号「老櫻」



第23号「丹波の秋」



第22号「平福春雨」



第21号「田園」



第26号「麗暉」(山南町)



第25号「朝露の塔」  
(高源寺)

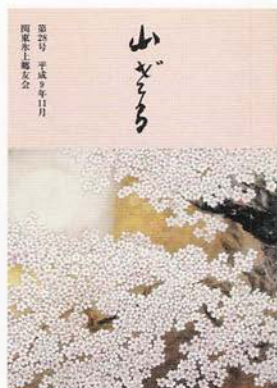


第24号「霧はるか」





第29号「月響」  
(スイス・アイガー)



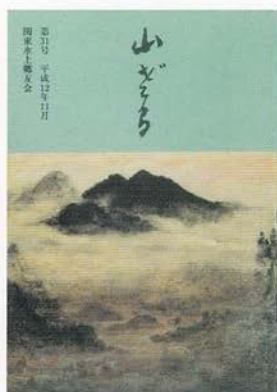
第28号「朝日に匂う」



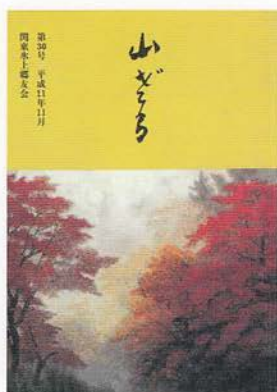
第27号「朝霧の里」



第32号「川代の秋」  
(山南町川代溪谷)



第31号「霽山ゆく」



第30号「錦秋白日」  
(高源寺)



第35号「霧湧く」  
(川代溪谷)



第34号「晨雪」  
(高源寺)



第33号「絶寥」  
(四曲屏・部分)

神戸市出身  
昭和七年（1932）  
昭和二十年柏原町の中井書店（伯母宅）に疎開、柏原高女に転入学。これが丹波との長い縁となる。甲南女子大学英文科卒業。二十二歳で結婚、夫の転勤先の名古屋市で、陶芸と出会う。東京・東久留米市に移住後窯を開いて陶芸教室をはじめ。京都府知事賞、東京都知事賞、文部大臣奨励賞など受賞多数。



かべみち子  
可部美智子



第36号「秀峰」



第39号「茜雲」



第38号「けんかのあと」



第37号「おまつりだ！」



第42号「聖徳太子」



第41号「光明皇后」



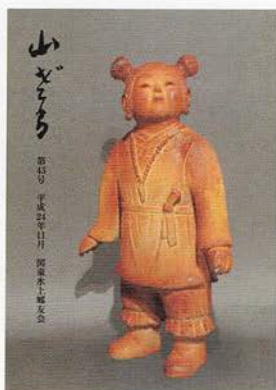
第40号「不動心」



山南町出身  
昭和二十九年（1954）  
武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。  
広告会社イラストレーターを経てフリーランス。十年間にわたり森永製菓株式会社のパッケージイラスト（小枝など二百以上）。平成二年初個展を機に画家としての制作活動開始。旅情と優しい光あふれる情景画は多くのファン  
の心を魅了する。



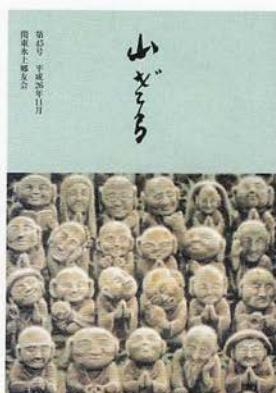
べい  
てっ くら ざさ  
平 鉄 倉 笹



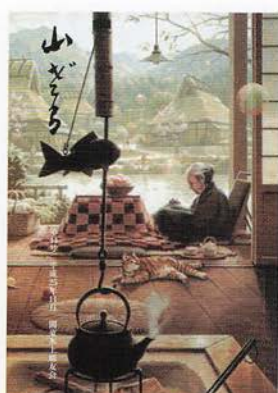
第43号「和楽童子」



第46号「わらべ地蔵」



第45号「微笑みの石仏」



第44号「フロムザパスト」



第49号「静かなる気配」



第48号「障子の葉陰」



第47号「水の奥の世界」



# 渡邊名誉会長を悼む

坂上 勝朗



令和元年六月十六日午前五時、渡邊隆男名誉会長が逝去されました。享年九十二。通夜・葬儀告別式は六月十九、二十日

に杉並区の日蓮宗慈宏寺にて家族葬を以て行われました。

九月三十日「お別れ会」が青山葬儀所において執り行われました。

法号 久遠院青蓮日隆信士

\*

## \*入木道

思い出すだけに遠い昔のことになりますが、私が郷友会の事務方を仰せつかったころ（会長は第七代伴仲信次氏）のある日、二玄社からお声がかかり、おそるおそる社長室へ伺ったのが、渡邊名誉会長とのはじめての

出会いでした。（以下渡邊さんと記させていただきませぬ）お話は、郷友会の来歴や事歴、現状と今後の問題点など事務方として心得ておくべきことがらのすべてを、丁寧に解説していただいたことでした。お話の終わりに「ところで、坂上さんはジュボクドウという言葉をご存知か」と聞かれました。恥ずかしながら存じませんと答えるしかなかったのですが、渡邊さんは柔らかな笑顔で、次のような解説をくださいました。

「これはね、中国では誰でも知っている、書道の精神を表す言葉で漢字では入木道と書く。王羲之の逸話から生まれたものです。ある儀式のため帝の命で板に祝言ⅡのりとⅡを王羲之が書きました。後になって、大工が削り取ろうとしましたが、削っても削っても消えなかつた。それほど気が入っていた。書の世界のみならず、ものごとをなすに当たっては、すべからく氣を込め相手につたえるか、また相手の氣を読み取るかという教訓なのです。」

以来、私のものごとをなすについての、基本的姿勢となつて、今日に至るまでこの言葉に支配されることになりました。

## \*二玄社への道

以下はもっぱら渡邊さんの執筆・編集になる、社史「二玄社の五十年」からの要約記述となることを、お許しください。

昭和三年九月六日兵庫県氷上郡沼貫村生まれ。七人兄妹の三番目。幼少期には「渡邊さんちの七福神」とご近所さんから目出度がられたと。

柏原中学（旧制）の図書室で、篠山町の出身の下中弥三郎さんが創業された平凡社からの二百冊に余る新刊本の寄贈書列に遭い呆然と立ち尽くし、はじめての別世界を垣間見た。この印象が生涯を賭ける出版企業との最初の出会いとなる。

昭和二十年三月、柏原中学卒業。旧制中学は五年生で卒業ですが、渡邊さん達のクラスは、一年繰り上げの卒業でとなっています。上級学校への進学は、後に東海大学となる、東京中野にあった電波科学専門学校へ。ここでの教授や学生との交わりが、将来、企業を興す大きな原動力となります。

昭和二十七年六月、四年間出版見習いで務めた白水社を退社、会社設立の模索を始める。さて、どんな

ジャンルの出版物を扱うかを考えていた時、ふと先輩の言葉が脳裏をかすめます。「出版を始めるなら、一番出ているジャンルでやるか、さもなければ誰も手を出していない分野でやるか」。調べてみるといま一番出されているのは英語。出ていないのは書道の本とわかりました。書に関しては旧師（電波科学専門学校時代）栗田直躬先生（当時早稲田大学教授）が権威。早速相談に赴くと、それは良い考えだと賛同されるともに社名も「二玄社」と命名。さらに執筆者の紹介などさまざまな恩恵にあずかります。

こうして昭和二十八年渡邊さんの二玄社はスタートします。ときに二十四歳。二玄社の社名の由来は、老子の道徳経のなかの一節「玄之又玄 衆妙之門」。玄は中国では黒を表す字。黒はすべてを含む色、宇宙における万物の生れ出るところという意味。

処女出版は「今日の書道」次には「書道講座」が望外の売れ行きで、順風満帆のスタートを切ったのでした。この間渡邊さんは企画、渉外、営業と八面六臂の活躍で、社業を盛んにされて行きました。

二玄社の数多ある出版物、制作物にはそれぞれの特

有の価値がありますが、とりわけ渡邊さんが心血を注ぎ、社運と己の人生を賭けた「故宮書画複製」事業には、深い感動を覚えずにはいられません。この仕事は渡邊さんの持ち込み企画で、故宮の文物は中国の宝と同時に、世界の宝でもあるとの信念のもと、頑なに拒否する台湾故宮博物院長を説得し、ついに院長も本物と見紛うばかりのレプリカの制作に成功したのでした。これにより、経年劣化が甚だしく、展示に耐えられない多くの名画名筆を、関心ある世界の多くの人々が鑑賞できるようになったのです。ほかに、雑誌CG（カー・グラフィック）その他の雑誌のこともありますが、紙幅の都合上割愛させていただきます。

### \*山ざるへの道

山ざるへの渡邊さんの関りは、第三号からで、以後毎年の発行が続けられるようになりました。金が無い悩みには、広告掲載社（者）を募り、原稿依頼から製版監理、印刷製本まで、一手に引き受けて、難なくそれを成し遂げるといふ、まことに超人的な寄与をしていただきました。二玄社を立ち上げて二十年。超繁忙もものかは、「山ざる」を立派な出版物にそだてあげ

て下さった功績は、讀えて余りあるものがございます。昭和四十七年といえば、先述した故宮博物院書画の複製事業に取り掛かれたところで、台北と東京の間を間断なく往復されていたころです。山ざるの校正は行き還りの機中や、ホテルのベッドルームが当てられました。このことは、その後池田忍さんが編集、製版、校正などを分担してくださるまで、継続されたのでした。

平成九年関東水郷友会会長に就任。以後十一年の長きにわたり会長を務めていただき、多くの示唆を戴きました。退任後の山ざるは現編集委員がすべての業務を承り、負託に応えるべく懸命の努力を重ねているところです。

令和元年二月十二日、巢鴨の二玄社本社にお邪魔して、一月十九日におこなった「山ざる」五十号発行のための第一回編集会議の報告と、諸事項に関するアドバイスを拝聴したのが、今生の最後の出会いとなつてしまいました。生者必滅会者定離とはいえ、大きな拠りどころを失った今は、わたくしにはまことに虚ろな日々が続いています。

合掌

# 山ざると私

## 私と「山ざる」

西川 宣孝（大田区）

### 1 はじめに



創刊五十号おめでとうございます。  
「関東氷上郷友会」の運営や「山ざる」誌の発刊・編集にご尽力いただいた皆様様に心から感謝申し上げます。

「山ざる」誌の愛読者の一人として、既刊の20冊を改めて紐解いてみました。

毎号の表紙を飾る「画・陶彫・俳句・写真」は郷土誌としての重みを感じますし、本文を読み砕くうちに、80年の生涯が走馬灯のように駆けめぐり、とてつもなく深い感慨に浸りました。

### 2 丹波と東京

「花の東京」に夢をみて丹波を旅立ち、貧乏学生・社会人を経て、隠居生活となる60年間を大田区に住まい、「狭いながらも楽しい我が家」を築いてきました。

晩年になって振り返ると、居住地域に「根っ子」が張れず「よそ者」感が強く、一方で、18年の生活歴しかない丹波に、今もなお強烈な郷愁に駆られています。この郷愁は学友以外に丹波出身者との交流も少ない私にとって、郷土史により知識をもらい、随想・エッセイにより故郷のいろんな人の生き様を知ること、勇氣や活力をいただきました。これは、故郷満載の「山ざる」に強く導かれたからだと思っています。

### 3 随想・エッセイ

随想・エッセイは、「人に歴史あり」と言われますが、執筆者の「丹波に寄せる強い思い」が滲み出ており、先輩・後輩問わず近い友人と手紙を交換しているような親近感がありました。

「幼少の記」(23)「懐郷の弁」(25)や100周年記念特集「銀座と田舎娘」(26)等の随想は、先輩の厳しい生き様を著わしており、その人生に驚愕し、尊敬もいたしました。

ふるさとの古刹―高源寺(32)、丹波の晩秋・写生日記は、丹波の自然を細やかに観察し、探求をされた一文に潤いを感じました。

上京した頃、初対面の方々との出会いでは「関西人・兵庫県人・丹波出身」であることを自己紹介する機会が多々ありました。「丹波柏原へのこだわり」(23)では「丹波篠山↓山奥↓山家の猿↓田舎者」と連想される自己紹介の随想に触れ、自分も「ポタン鍋・松茸・栗・黒豆」等の名物を加え、同じ思いで話していたことが懐かしく蘇りました。

また、「丹波Uターン生活」(41)の特集は、帰郷を模索している時期と重なり、身近な事例として参考にしました。故郷に帰省する不安から脱却し、成功して悠々自適の生活をうらやましくもありましたが、成功された報告に拍手を送りました。

「東日本震災の衝撃」(42・43)の特集と「被災地からのお便り」と併せて、当時強い関心を持って拝読いたしました。タイムリーな特集で、多くの方を勇気づけることが出来ました。未だ、福島原発事故災害等も復興道半ばの現状であり、応援の続報を期待します。

### 4 郷土史

郷土史の文献に縁遠く、知識は皆無でありましたので、毎号の特集を読み学習させてもらいました。先輩

の丹波史に対する造詣の深さに驚愕致しました。「丹波の足立氏・芦田氏」「方言調査」(22)、「丹波氷上の地名と歴史」(24) ふるさと研究(25)で「青垣町誌を読む」「丹波黒井城の姫君たち」「日本の分水界と水分け」や「福知山線複線化と丹波」は文献として役に立っています。

「丹波まつり」(45〜48)では、神社の歴史・伝統など由来を知ることが出来ました。各神社への参拝を楽しみにしています。

丹波通信・丹波ブランド・郷土史、写真「丹波を撮る」等の特集は、浦島太郎にならないために満載の情報を生かし、自転車通学時代に出来なかつた丹波全域の観光に活用していきます。

#### 4 丹波人物記

新たな出会いにおいて、ルーツやライフワークの情報交換は、お互いを理解しあい、存在を認めあう基となります。丹波出身の名士の寄稿や人物記から日本に貢献された高名な人の存在を知り、故郷に誇りを持つる絶好の話題として自慢げに語り尽くしたものです。

#### 5 「Shingo」誌を蔵書に

「山ざる」発刊、編集(企画・執筆依頼・原稿整理。リライト・校正・印刷・製本・発送等)に携わる大勢のボランティアの皆様ご尽力に改めて感謝いたします。時世時節の状況を踏まえ、会員のニーズを掌握し、企画・編集をされていますので、年齢を重ねた今でも郷土誌として大切な蔵書となっています。

「故郷丹波」の良さを「子・孫」の世代に引継ぐための資料として活用していきたいと思っています。

(一九三九年生・青垣町田井縄出身/元地方公務員)



撮影・岡田昌子



## 懐かしい人々

小田 晋 作（丹波市）



手元に平成7年（1995年）に発行された「関東氷上郷友会一〇〇周年記念」の「山ざる」第26号がある。阪神大震災の年、また私が日本経済新聞社を退社して丹波に帰る1

年前。佐々木盛雄さん、常岡幹彦さん、上野重喜さんから、すでに鬼籍に入られた方々が、大勢寄稿されていて、懐かしい。

これらの方々とは個人的にも親しくして頂き、色々とお世話になったが、中でも90歳を過ぎてからも新宿の事務所に毎日電車で通っておられた佐々木さん（池田内閣で内閣官房副長官）を訪ねた時の記憶は、いまでも強く残っている。

新聞記者をしていた戦時中、泥沼に入っていた対中政策を近衛首相から聞かされたため、湘南の別荘を襲い、海水

浴中をねらって自分も沖まで泳いで行つて特ダネをとったなどの武勇伝を初め、2時間にわたって滔々と話して下さった。感心したのは、昔の話だけでなく、直近の人の固有名詞が淀みなく出て来る頭の冴えだった。彼は戦後も教育勅語を推奨するなど右翼と見られていたが、考えを聴いていると必ずしもそうとは断定できない柔らかさを持っておられ、「わしはずっと同じ。世の中が左になってきただけや」と話しておられた。

この佐々木さんが、左翼の論客として知られた、多少し後輩の小谷崇さんと、郷友会の総会でよく顔を合わせ、口角泡を飛ばして議論されていたことも、郷友会ならではの光景としてほほえましく思い返される。

画家の常岡さんには丹波新聞社で厄除祭に再三個展を開いて頂いた。中学の講師をされていた40歳過ぎの頃に、アトリエに使っていた埼玉の農家の土蔵を訪れたのが最初だったかと思う。何度も入選された日展を振り切つて、「玄」という宇宙空間を望む黒の境地を追求して独自の道を切り開こうというストイックな姿勢に感銘を受けた。

またNHKのディレクターをされた上野さんには7年前、ラジオ深夜便への出演を頼まれ、「米寿を迎えた丹波新聞」のテーマで話をさせて頂いたが、丹波の人だけでなく全国の見知らぬ人から便りをもらうなど、貴重な体験となった。急逝されたのはそれから間もなくのことで、まことに残念極まりない。

山ざるの創刊は1966年というから、私が大学に入学した年である。多士済々の方々が揃っておられるうえ、編集スタッフも大勢おられて綿密に会議を重ねているからこそ、ここまで高いレベルを保持しながら続いてきたのだと思う。私も関西丹波市郷友会で会報「たんば」の編集委員を務め、今年ようやく第4号の準備を進めているところだ。山ざるの足元にも及ばないが、よき手本として、後を追っかけていきたいものである。

丹波新聞社会長。柏原町出身。1944年生まれ。1996年に日本経済新聞社を退職し、丹波新聞社社長に。2010年より現職。

## 私と「山ざる」

高見 秀史（船橋市）



老いが進行する目下、断捨離中の書庫に、会誌「山ざる」のナンバーがそろっている。仕事に関係したもののや、ベストセラーになった名作などは、とつくに姿を消した中で、なぜか治外法権のようだ。

と言っても、最も古いのは24号。そこに記載の平成4年度の「集い」の参加者に名を連ね、同号の「ふるさと随想」に寄稿をしているので、郷友会を認識し、入会したのは、五十代半ばを過ぎてからだだったようだ。想えば、仕事にかまけていた私を郷友会に誘ってくれたのは、同期の上野重喜さんと「山ざる」編集の池田忍さん。そして幼馴染の鶴田ゆき子さんら。

お陰で、それ以来、郷友会のお陰で、遠かった丹波がぐっと身近になり、丹波アクセントも気兼ねなく、

心許せる楽しい世界が広がった。高校1年の半ばで神戸へ転向した金出一郎さんとの再会、岡吉明さん主催のゴルフ会でも渡邊元会長ご夫妻をはじめ、フレッシュな同郷のメンバーとも親しくなる機会となった。

40号が目に残る。「山ぎる」40号に至る歩みの座談会です。今は亡きお二方、渡邊隆男元会長と、親子で表紙を長きにわたり飾られた常岡幹彦画伯、及び、それを支えてこられた坂上勝朗前会長が交わされた「山ぎる」初期での述懐や秘話など、それぞれの皆様のご苦労が今日につながっていることを改めて知る。

その中で、故渡辺会長は「山ぎる」の役割を、「紙面と郷里とのメッセージの発受信の場」と語られている。それは、今の誌面でも確たる方針として受け継がれ、篤い気持ちの交流を感じる記事で満ちている。

私の故郷情報の入手は、丹波新聞で、郵便で1〜2日遅れて届けられるが、現況が解る。サイトもある。

先年来スタートしている「コミュニティFM・805たんば」は、スマホのアイコンをタッチすれば、いつでもどこでも、故郷の「今」が聴け、出演者の丹波弁に和む。これからも故郷を繋ぐ軽快な情報手段が増

えていくだろう。

その中で、「山ぎる」は年一回ではあるが、どんな構えた重みのある大型艦のような役割を任じて欲しいと思う。

それとは関係ないが、私のニックネームを求められた場合、「山ぎる」で通している。

(昭和十一年生・市島町出身/元マスコミ勤務)

## 日日は好日

久 呉 道 子 (熱海市)

関東水上郷友会『山ぎる』編集部様より「会誌『山ぎる』50号へのご寄稿のお願い」と切手もゆかしい便り二月上旬に戴きました。最初に43号お送り下さいました。丹波から熱海へ移住した年の秋でやうやく落付いた頃で頁を繰る度名士の方々の記事ばかり。坂上勝朗会長様の時で安本義正氏講演概要、案内等挟み眼前にございます。上高子女史のオリソピック雑感にみ心

お高い文芸頁もございます44号45号46号47号には井本蝶山氏和と洋のユニット演奏会心打たれ「丸山健三郎と丹波」ご令室様の手紀写真、そこで私は東京芸大教授、大谷康子女子、お父様の大谷南海男先生のご恩を想い出します。富士山が世界遺産に登録されその祝賀大会があり、大谷康子教授が楽団を率いて参加され久し振りに高博もお逢いさして戴き懐ふかった由泰子女史の「デナーショー」や演奏会は大阪でもよく在り夫婦で再々拝聴致しました。今名古屋から康子女史ご夫妻様の近くのマンションに越され、ご令室様とよくお電話でお話さしていただきました。九十五才でご令室様逝かれ、私より年長と承り驚きでした。「一度熱海へ案内して呉れ」と先生の意でお嬢様と来静下さりお二人共お変わりなくお若くて驚きつつ恐縮。先生にも大谷女子先生にもエッセイや色紙を贈わり後菜園で食事。従業員の人たちは「よく演奏会や宴会にご利用下さいます」とご存知でした。ホテルの最上階総ガラスから観る湯の町熱海の全景。高博が「先生この景色ナポリと似てみませんか？」先生も「僕も今それを思っていたんだヨ」と。

「東洋のナポリてう町風涼し 道」

それから6年大谷先生100才の筈。

「山ざる誌」を存じあげるきつかけは前号に感謝の念一杯で丹波新聞社会長様の小田晋作氏に記さして頂いてみます。莫大な賀状でありましようのに恐縮しつつ老いは日増しです故大きな心身の支柱になつて在り、在丹中にはビルの三階か？ にカルチャー用に和洋大小会議室有り、日舞、源氏物語りを読む会、茶、花、短歌、俳句、皆入会したいのばかり、俳句に飛びつきお世話になりました。カルチャー教室合同祝賀会には、小田会長ご令室様の日舞も拝見さしていただき友人知人にも40年間の大阪暮らしを纏めて懐かしい出合いで感謝一杯でございます。私57才で「大動脈弓石灰化で手遅れ、打つ手無し」不安な私は保健所を訪ね症状を訴えました。合併後で職員の数も多く奥のテーブルから「ツカツカ」と出て来て雑布を締め長い廊下を四つん這いになつて走られ「これを毎日食堂や廊下等やりなさいこれがせめてもの治療法です」と一階から出る時、「所長先生ですヨめつたになさいませんのに、久呉さん好運ですヨ」これも驚きと感謝。東大阪新築家

の廊下は光りました。又高博夫婦富士宮へは再々年に十回は行っていました。就職しまして十年経た頃でしたから、「カテーテルの研究中で昼夜の無い様な勤務の高博には知らせいで」と主人に固く口止めしていました。「お母一寸おかしいよ水美味とて」隠れる様にしてお水を吞んでいますのに主人が総て話して仕舞い、帰丹後「明日工場からトラック二台で医療機器積んで大阪へ行くので大阪支店に行く運転手に何も渡し、支店長にTELも入れてあるので明日八時半に循環器病センター正面玄関に立ってヨ、テルモのバッチつけた社員が行くからそして国枝先生の初診室へ案内してくれる由故、必ず薬全部持参だヨ行ってよ」強いTELに、また私高博に心配かけてしまったあの子倒れて仕舞わないか? と案じつつ行きました。「今までの薬全部止めてコントロール錠0・5ミリ(小児量)一日三錠服用一週間後、必ず主人に従いて貰って再診の事。」それから延々伊勢病院長、熱海病院まで四十年間続いて主人も一緒に診察して頂き「早期受診と心穏やか」でご指導受け、大動脈弓石灰化は一層白色濃くレントゲンに写り乍らこの年齢相應以上の充実した日

を送りつつ大感謝。NHK俳句春秋、青木月斗師の「うぐいす」七代主宰池田琴線女先生、前編集長鈴木龍王編集長師、現鴻野真知子編集長先生、恩人枚挙に暇なく、上阪のあと生活安定まで苦勞させた高博熱海の生活費全快養して呉れ、今も声かけ下さった会社へ勤務、夏の箱根ホテル一泊避暑は昨年で十年間、高博招待で墓参九名、机上にズラりと写真列べ感謝です。

(柏原町出身/大正12年生)



撮影・足立義雄

## 一日一日を大切に

伊藤 富士子（仙台市）

春夏秋冬と自然はそれぞれの趣きをみせながら巡ってくる。人も自然とともに年を重ね私も八十路に入り四年の歳月が過ぎようとしている。少し前のことと過ぎし日の出来ごとを思い返すが八十路を歩き出した今とてつもなく遠い遠い日のことだと、しかし数々の事が昨日の様に浮かんでくる。昭和九年静かな山村葛野村（氷上町）に生まれ高校卒業までの十八年間を過ごす。国民学校時代は戦時中のこと雨の日は薄っぺらい教科書を手に授業、晴天の日は野山を開墾し芋を作りと子供ながらに頑張った。そんな生活の中でも自然は変らずおおらかであった。朝夕背戸からながめていた高倉山は今も忘れることのない懐かしい山である。国民学校五年生の時終戦、新しい時代戦後がはじまる。衣食の不足は続いた。今は飽食の時代「食品のロス」と云われ大量の食べものが廃棄されているとのこと

「もったいない」の一言である。生活の総ても便利になりその発展ぶりは目を見張るばかり、しかし物質的に満たされながらも日々報じられる悲しい事件には胸が痛む。このような時代を経験し思い返えせば速いもの丹波を離れて六十年余りにもなる。東京での学生生活、社会人として夫の転勤で大阪、博多、仙台と各都市の環境の中の暮しを経験し現在は転勤地だった仙台に住みその生活も久しく緑豊かな街で穏やかに暮らしている。丹波は遠くになってしまったが「山ざる」を手をさせて頂くことで丹波の様子も身近かに誌のページも素通りすることなく一字一句、写真の数々も丹波で暮した当時のことを懐かしく思い出させてくれる。これからも誌を傍らに故郷の温もりと共に日々を過ごしたいと思う。八年前のあの東日本大震災では仙台の被害も大きく自然の脅威をみせつけられた。今はあの恐怖から少し距離をおけるようになったが恐しい体験であった。戦争や自然災害を体験する中で少しばかり遅しくなったが寄る年波も感じるようになった。健康そのものと自負していたのはかつてのこと。今は腰やあちこちの痛みが老化の現象もこんな形で訴えて





くる。これも生涯の友としていかねばと自己流であるが予防策を講じつつ通院も生活の一部となつている。人生という道中は計り知ることの出来ない旅であるが健康で旅を続けたいがこの年になれば体力も衰え、みんなと一緒に様にはゆかず仕方がないと諦めつつも気持がゆるぐこともある。人生百歳時代の今、もう少し頑張らねばと思う今日この頃である。平凡な日々の中でも多忙を極めた若い頃よりも何事も控え目になりそこで思いついたのが今耳にする断捨離と心得えてその必要性も感じ長い間の積み重ねているものがあり様を整理することにした。先ず本棚の整理と思い手付

かずの本も多くありその時変色した一冊の本「スイス日記」が棚の奥に昭和三十二年に求むと記している。何故「スイス日記」なのかと今にして思えばその当時の日本の国情もあつたかもしれないがあの美しいスイスにとの思いで求めたのでは。まだ若き二十二歳の頃である。幸いにも六十歳を過ぎてスイスを訪ねる機会を得た。新緑の美しい六月、山裾に若草がひろがり牛の群が草を食む様子が丹波の風景を見る思いだつた。思いがけず手にした本も確かな現実の風景や空気を肌で感じた旅によって再びスイスの旅をさせてくれた。本は未知の世界やスイス日記のように一度訪ねたことの懐かしさと居心地のよい楽しい時間をつくってくれる。本棚もすっきりと整い、どの本も捨て難きものである。旅行には写真も本と思いは同じ時には「机上の旅」と称して旅の思い出に時間を過ごすこともある。物の整理はまだまだ時間がかかる。しかし科学の発達には私達の生活のあり様を変えてゆくネットだラインだと指一本の操作で事が運ばれてゆく。自動より手動がいいと臆病にもみえる自分が少々恥しいが友人との交流も手紙が多く時には電話での会話も楽しむ。そんな

友人の一人から昨年の夏、ひまわりと花火を描いた絵手紙を頂いた。暑い最中のこと猛暑もふつとぶような元気をもらった。絵手紙から四方山々に囲まれた故郷を想い、子供の頃庭に咲かせたひまわりを思い出したり、成松町の花火大会の空いっぱいに広がりをもせた光景がありありとした感触で昔々のことなのに風化せずによみがえってくる。

遠き日の夜空にひろがる大輪の

驚きながめたあの日の花火

照りつける陽に咲く花のひまわりの

すこやかあれと 友が思ひを

拙い歌を詠み元気で昔々の事を楽しい思いにさせてくれる。こうした数々の思い出は感動や喜びをもつてバラ色の時間をあたえてくれる。またつらいことも時間とともに乗り越えてきた。八十四年という人生をふり返れば色々なことが去来し短かいようで長い道のりだった。これから先のことを思うと心もとないが今までと変らず無器用にしか生きられないが、そうした暮らしの中での思いを綴ってみようと数年前から自分だけのノートとして書き続けている。思い立つ程のことで

もないが書くことで今まで気付かなかったことも気付くという面白い発見もあり身の廻りのことも少し広がりを見せてくれる思いである。これからはどんな事に気づかされるか楽しみである。これからはまわりの温かい人達に囲まれた暮しに感謝しながら一日一日を大切に過ごしたいと念じている。

(昭和9年氷上町上新庄生まれ、主婦)

## 私と山ざる

木呂子 恵美子(清瀬市)

今私の手元にあるのは、昭和47年第3号64頁、香港生活四年を除いて49号まで有る。

最初に投稿したのは、当初から山ざる発行に係かわつていらした足立源治さんから「何か書いて」と再度声をかけられたからだった。

編集のお手伝い(といっても鶴田センパイに教えてもらいながら少しだけ)をするようになったのは、平

成元年に主人がなくなってから。会長は伴中さん、村上さん、渡邊さん、坂上さんの27年までだった。

渡邊前会長の書かれるもの大好きで（失礼）いつも一番先に読み共感したり、世界の事を色々教えて頂いたりした。「故宮書画複製への挑戦」45号を拝見。30年も前、故宮博物院の見学他京劇きやうげきを見せてもらった内容有る台湾旅行（上山さん、須原夫妻、足立謙悟夫妻、西崎祥さんも一緒の一行）大きな丸テーブルの食事の時、向かいに白い上衣でゆったり座っていらした渡邊さんにオーラを感じ、隣の紳士に品の良い内面深いものを感じたがこんな大仕事をなしとげている方々と改めて感じ入っている。歴代の会長さん、そして坂上さん、皆さん大変なお仕事をかかえた上でのボランティア作業何気なく、事もなげに続けておられること、すごいと思う。村上会長の頃、百年記念会に向って役員一同も準備に大わらわ。坂上さんの会社に鶴田さんと出張して二百箇以上の袋づめ（記念品やあちこちからの景品寄贈されたもの）結構大変だったが、今は楽しい想い出だ。

心に残る記事は沢山有るが、上野重喜さん私の職場、

非常に興味深くNHKでのお仕事やJICAでのインドネシアやトルコでの大きな人助けのお仕事、ラジオ深夜便の時は、私は肺炎で入院中、たまたま朝四時からあの穏やかな暖かい声にとてもいやされた。

何年も前、吉住さん主催の植生の宿の小旅行で矢切りの渡しの舟で村上久夫さんと隣り合せて、言葉をかわしその穏やかな語り口にお人柄を思った。

その後御子息村上信夫さんのお書きになった「父が教えた春夏秋冬の心」を読み納得しその後の「アゲハチョウ」のこと感銘を受けた。

六年前から原谷さんのお誘いを受け、初心者ながら「山ざる文芸」に短歌を投稿している。

小学五年の時、教科書で森田たまさんの「馬を洗う」という随筆を読み、「私女流随筆家になりたい」と思ったが、81才7ヶ月、三田文学会40年来の会員だが、何の足せきもない。「山ざる」池田忍さんの発行された「さすが&されど」吉住重達さん主催の「植生の宿通信」に時々書く場を頂き感謝して居る。

亡き丸川健三郎さんの書かれたものも毎回拝見していた。43号の「父の出征」で健三郎さん生後六ヶ月で

お父上出征の前の晩、お風呂に入れていた様子を母上  
が話して居られる言葉に、思わずほろつとして、「あゝ、  
私も」と思った。父が丁度私の六ヶ月目で出征し、そ  
れを河内かわちの祖母が父への戦地に当てた手紙に書してい  
る。父はその手紙の束を和紙にとじ離さず持ち続け戦  
後持ち帰った。「遙に慈光を仰ぐ」と書いた表紙に、  
マーキュロらしき染みがある。

徳田八郎衛さんの「丹波を撮る」の写真の数々そし  
て今までに書かれたもの、藤原岩市氏の事や井上秀さ  
んの事など、激動の時代を一本芯の通った、しっかりと  
と生きた方に感銘を受けた。マイギャラリーの多才な  
方々の作品、岡さんのカット写真も素敵。

表紙も豪華だった。常岡さんのファンを自称する私  
は、昭和四十年代から香港生活四年を除いて殆どの展  
覧会を拝見、香港に送って頂いた、柏原八幡山のハガ  
キ絵は私の宝物だ。女流陶芸家可部美智子さんの陶彫  
人形は何とも云えぬ表情と雰囲気にも心ひかれた。

笹倉鉄平氏の詩情あふれる絵、以前から好きだった  
絵が表紙になって嬉しく思っている。展覧会で求めた  
画帳は今、私の「マイ・絵本」だ。時々見て、暖かく

幸せな余韻にひたる。

この何年かの「山ざる」を読み返して、とても充実  
した内容や初めの頃の3倍以上もある頁数に編集委員  
の皆様のお苦勞をあらためて思った。どうも長い間有  
難うございました。

(昭和13年東京生まれ。春日町多利に25〜31年まで在住。  
父の診療所勤務で。旧姓河内)



撮影・岡 吉明



撮影：徳田八郎衛

## われらの丹波市

稲岡俊一（練馬区）



できます。

作詞をやっている稲岡俊一です。  
今回、50周年記念を機にふるさと丹波市を想いだし歌詞を書いてみましたのでご参考までに寄稿させていただきます。

今日も大地を うるおす川が

水分れを経て 流れゆく

みどり豊かな 自然の恵み

よろこび励んで 守り継ぎ

しあわせ築く 愛のまち

われら丹波市 笑顔で暮らす

四季の彩り 香りをのせて

風がそよ吹く 野に里に



徳島県知事から最優秀賞表彰状授与中



2018年徳島県シルバー大学・大学院校  
歌歌詞公募最優秀賞表彰式記念写真

刻む歴史と あやなす文化

恐竜の化石 先人の

史跡に学び 進むまち

われら丹波市 希望あふれる

山をかくした 朝霧はれて

広くかがやく あおい空

明日に未来に 咲かせる夢を

語って描いて 育て合い

まごころ常に かようまち

われら丹波市 栄え伸びゆく

若いころより作詞が好きで、作詞界の大御所故吉川

静夫先生に師事していました。吉川静夫先生のお宅で、

「星影のワルツ」を作詞した白鳥園枝さんや「帰って

こいよ」を作詞した平山忠夫さんなど同人仲間たちと

一緒に食事をご馳走になり 楽しく談笑した頃がなつ

かしく思い出されます。

しかしながら、10年以上の海外駐在があつたりして

本格的に取り組んだのは、総合商社を定年退職した後

からになります。

歌謡曲系も書いてはいるのですが、大した実績はあ  
りません。因みに作詞作品を列挙しておきます。

兵庫県朝来市の歌（小椋佳作曲）

東洋大学応援歌

徳島県シルバー大学校大学院校歌

国立山梨大学学生歌

神奈川県立秦野総合高校校歌

鳥取県八頭町立八頭中学校校歌

栃木県市貝町立小貝小学校校歌



沖縄県豊見城市立ゆたか小学校校歌

鳥取県湯梨浜町とうごうこども園園歌

兵庫県丹波市あいくの丘こども園園歌

勝浦ブルース（大谷慎作曲）、など

これからも頑張ります。

（柏原町出身、伊藤忠商事（株）退職、日本詩人連盟元

会員、故吉川静夫主宰「詩鬼」元同人）



撮影・足立義雄

## 柏原で過ごした十八年間

岡 吉 明（朝霞市）

現在の住まいの近所では、子供達の殆どがスマホだゲーム機だと、外での遊びを見なくなったような気がします。現在の故郷ではどうなっておるのか不明ですが、似たような事ではないかと思っています。

私の小学校時代（昭和30年頃）の遊びを思い出し、残しておきたいと記しておこうと思いい記憶を頼りに書きだしてみました。

柏原町の端、石生に接した南多田、丁度石生との境で福知山線の線路が一番山に近い所、そこに線路に沿って直径が5m位の小さな池が遊び場で、魚を釣るのが多いのですが、時にザリガニ釣りをやったものです。線路の向こう側から水田が開け、そこで蛙を捕まえてきて、足をもって投げ付け、死んでしまった蛙の皮を剥ぎ、足に糸を結んで、魚釣りよろしく池に投げ

入れ、待っているとザリガニが大きな手で蛙を捕まえる、その段階で竿を持ち上げててもザリガニは決して蛙を放そうとせず吊り上がってくるわけです。そのザリガニを手で無理に放し、また蛙を池に投入、この繰り返して何匹もザリガニをゲットする、こんな事をしながら今度は池の側の線路に列車妨害にならない程度の厚みのない1円玉とかを置いて、汽車が踏んずけた後、煎餅のようになった1円玉の形状に自慢のしっこを見る。線路のすぐ脇の池ですから、汽車の機関士から見たら危険この上ないのでしよう、大声で怒鳴られ、時には石炭か小さなものを投げつけられたり、今なら警察モノです。

他にゲームとして遊んでいた遊びは以下のようなものがあります。

### 三角釘（釘刺しゲーム）

最初に10 cm程度の三角を描く。使うのは主に3寸〜5寸（10〜15 cm）の釘

順番を決めたら、地面に描いた



三角の中に釘を打ち刺し、そしてそれを囲う様に刺していきます。刺さったところから、次に刺さった所へ直線を引いていきます。失敗して刺さらなかったら交替。次の者は線の間を縫うようにして刺していき、相手の行き先をじゃまをするように狙って刺します。線は必ず直線でなければならぬので、釘が刺さっても引いた線が他の線と交差するのはアウト。勝敗は互いに相手の行く手を塞ぎ、どんどん囲ってしまつてギブアップさせれば勝ちとなります。

### べったん（メンコ）

① 地面に置かれた相手の札を裏返せば勝ちで裏返せた相手の札は貰える。自分の札を地面に叩き付ける時に、地面と相手の札の隙間に風を送り、相手の札を裏返す。これを交互に繰り返します。



② テーブルの端に皆の札を各2枚〜3枚位を重ねて積み上げ、同様に風圧でテーブルから落とし、裏返った札を落とした者が貰い、裏返らなかつた札は元

の位置に再度積み上げ、次の者が同様にして落としていく。風圧でなく、札の山の端を狙って縦に打ち込み一気に叩き落す方法もある。

### ラムネ(ビー玉)

地面にラムネを転がし、自分のラムネの位置に立ち、そこから、

相手のラムネに照準を合わせ自分のラムネを当て、当たれば当てられたほうが負け、交互にこれを繰り返す、但し投げるラムネは自分の肩の位置より下がってはいけない。



### 缶(かん)けり

空き缶を置き、誰かが缶をけり、それを鬼が目をつぶって一定数の数を数えた後、蹴られた缶を取りに行く、その間にほかの者はかくれ、隠

れた者を鬼が見つけると捕まえ、空き缶のエリアに繋がれ、全員がつかまれば終了ですが、その前に誰かが缶を蹴れば、捕まった者は再度逃げて隠れました。



タイヤの「リム」を棒で押して回すだけですがバランスを上手く取れないと倒れてしまったりします。速く長く走れた者が勝ちで倒したらそこで負けです。

### パチンコでの合戦

Y字の枝を見つけてきて、先にゴムをつけて作り、飛ばす弾は、チリ紙をぬらし丸めた物とか折り紙位の紙を幾重にも折り畳んだ物とかを使いました。単純に親指と人差し指の間に輪ゴムを張って折り畳んだ紙を二つ折りにしてゴムに挟んで飛ばすこともあります。弾に当てられたら戦列から離れ、最後まで残ったほうが勝ち。

### 紙鉄砲

細身の竹か篠竹を加工して。

水鉄砲のような形状の鉄砲を作り、筒に濡らした紙を丸めたものや丸い形状の何の種だったか



空気が圧縮され球が飛び出す



竹・篠竹を適当な長さでカットして筒の一端に穴を開け、紙の丸を筒に挿入する。筒の先端に紙を挿入し、筒の先端を押し込む。筒の先端を押し込む。

忘れましたが木の実の種を詰め、鉄砲の打ち合い宜しく敵味方に分かれ、パチンコ同様に合戦をしていました。

### エスケン

AのグループとBのグループに分かれ、お互い相手の陣地を攻略する遊び。



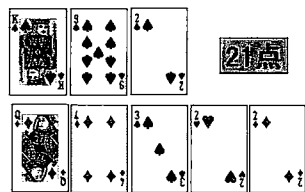
Sの字の▲から出入りし、どの方向でもいいが、外を回って相手の入り口▲から中へ入り、相手の陣地を取ってしまうと勝ち。\*ただし、自分の陣地とS字の外の場合はケンケンで走らなければならず、両足を着くとその場でアウト。\*また、S字の外でも、お互い攻撃に出てきた相手との攻防戦があり、相手を追い掛けて押し倒す、又は両足を着かせ、できるだけ敵の人数を少なくしてから陣地を攻略するのが上手いやり方でした。

### ブラックジャック (21合わせ)

これは柏原でも南多田だけだったかも分かりません

が、お正月は近所の誰かの家に集まり、カルタなどは一切せず、いわゆるブラックジャックばかりやっていました。

(トランプのエースは1か11と数え絵札はすべて10と数える、上限は21でそれに近い数字になったほうが勝ち) 親1に子が数人で対戦。



当時1円で1個か2個買った紙に包んだ四角い飴を掛け、親(ディーラー)は順に交代して競ってました。(手札の合計数字が12〜15位だと欲を出して、ついもう1枚と追加カードを貰うと大概は22以上になり即座に負け、バレたと、その回は負けとなります) 成人後ラスベガスのカジノでブラックジャックを見て、全く同じルールに驚いたものです。ただカジノの親は手札の数の合計が16以下だと必ずもう一枚引かなければならず、17以上だとその手札のままです。我々のルールは、その縛りが無いやり方でした。同年同士位だとそんなに差は出ないのですが、兄たちの

年上の仲間に入れてもらってやると、大概大負けで泣いてしまい兄に飴を幾つか貰い場を抜けたものでした。

独楽回しも大いにやって遊びましたが、いわゆるベーゴマは全然やることがなく、独楽が回っている時間の競争は勿論、独楽を回しながらその独楽を手に乗せた皿状の何かの蓋に乗せ、鬼ごっこをしたり、サーカスと言って、独楽を回した紐を素早く肩にかけ、その紐の上に駒を走らせるようなことをやっています。

他にも裏山に登り、土が露出した20m位の赤土の傾斜面に手作りのソリで滑ったり、木や竹で弓矢を作った的当てしたり、楽しい時代でした。

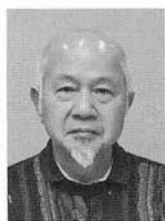
\*文中の挿絵の一部に以下の書籍の挿絵を参考にさせて頂きました。

「東京出版・坂本卓雄著・昔遊びの図鑑」



## 故郷の秋祭

原 利 充 (清瀬市)



丹波市春日町黒井の秋祭に小生が参加していた五十数年前には、兵主神社を主祭神とする秋祭が举行され、毎年10月9日と10日の二

日間に亘り、各字が山車を出し、黒井中を練り歩いていた。まず9日の宵宮は、夕方提灯に点灯して、各字から巡回路に応じて山車が出発し、徐々に合流し、最終的には全ての山車が集結して兵主神社に奉納し、10日の本祭は、昼頃から全ての山車が揃って兵主神社を出発し、黒井中を練り歩いて兵主神社に宮入し、奉納していた。この山車には、各字の小学低学年生がバチを手に稚児姿で4名乗り込み、柱に括りつけられ、この稚児が「両手で」ズーン・ズーン・「片手で交互に」ズンデンドウ・「振り上げて」アー・「片手で交互に」ヨイヤーナ・「振り上げて」ソウリヤ・「片手で交互に」ヨイサッセ・ヨイサッセ」との囃子言葉を繰り返

しながら、大太鼓を叩いて進行の拍子をとり、大人が浴衣着で合の手を掛けながら4本の棒を肩に担いで練り歩いていった。

山車が練り歩く途中には、字毎に休憩所が設けられ、酒食の接待があり、全住民が融合する仕組が考慮されていた。

ここで言う山車行列とは、一般的に神輿と称される神様の社の部分の中央に大太鼓を据え、4本の柱に其々括り付けられた稚児が、大太鼓を叩き、各字の総代が夫々先導し、1本に10人程度の住民が肩で担いで進行する状況を指す。

この祭りには、数々の珍事が興じていた。その一つが、字毎の休憩所で知人同士が興に乗って、山車が出発したにも拘らず、酒盛りとなり、大慌てに山車を追い駆けたり、果てには1本の棒に1人しかいない状況も生じたのである。因みにこの1人とは、山車に乗り太鼓を叩いている稚児の父親であったとのこと。小生の親は、飲酒により遅れたらしい。

その他にも似たような話であるが、自らの山車から離れ、知人の山車を担ぐ者もいた。

小生も年少の頃、稚児として山車に乗ったが、最も困ったことは、この山車は、兵主神社の第一鳥居を越え宮入となるとそれまでの囃子から担ぎ手はお伊勢参りの謡にかわり、囃子言葉を維持することが難しかった記憶がある。また、担ぎ手の多少により山車が左右に揺れ、時には、一方が地面に着くような状態も生じ、その上、神社の奉納では胴上げのように上に3回放り上げられ、しかも囃子言葉はどのような事態でも唱えなければならず、乗り手としては、戦々恐々と言った状況であった。

その後成長してからは、小生も山車の担ぎ手と成ったが、20歳ごろには、各字の担ぎ手が減ったこともあり、車輪を付けて運行するようになった。山車を担ぐのが、祭りの花であるにも拘らず、山車を引き摺る行為に憤りを感じ、弟と計画を巡らし、小生が前の棒鼻（担ぎ棒の先端の意）を弟が後ろの棒鼻を担当し、前後でガッタン・ガッタンと上下に揺すったことがある。この行為には、字の総代から山車が傷むので止めるとの注意を受けた。これを原因として、その後の秋祭には、帰省しなくなった。



最近帰省した時に、近頃は最後の休憩所から神社の宮入までの間を肩に担ぐようになったと聞いた。まず喝采！

この祭りで重要な兵主神社代々の宮司が、辞任したようでは近年は船城の宮司を祭事に応じて招聘しているようである。元住民としては、淋しい限りである。

秋祭とは異なり、同じ祭事でも元旦は、子供が字の井戸水を汲みに出かけ（若水汲み）、男親が雑煮を作り、家族で祝う習慣があった。近年では、出前や、通販などで賄っており、今では考えられない行事があったことを記しておく。

この稿を擱筆するに際し、過ぎし五十数年を改めて振り返る機会を得たことは幸甚な事であった。以上

（春日町出身）



撮影・井上 巖

## 私のふるさと感

原 川 美恵子（品川区）

私は春日町野上野（このこ）の出身で、柏原高校を卒業して看護師を志し、京都大学附属の看護学校へ入学しました。

全寮制で全国から集まってきた新しい友人と楽しい学生生活を送りました。

勉強以外にも多くの事を学び、中でもアルバイトで経験した実践医学がより実り多いものであったと思います。産婦人科医院の夜のバイトや整形外科の夜のバイト等は知らない事、出来ない事ばかりでとても実り多かったと思います。バイト代も一般の仕事の3倍はあったように思います。

看護師、保健師、養護教諭等の免許を取り小田原市立足柄小学校に養護教諭として7年間勤務しました。

私の人生にとってこの時代は激動の時代でした。結婚をし、出産し、家を購入しました。

それが今の我が家で神奈川県秦野市にあります。

そんなこんなで20年、30年、40年と経ち、ふるさと離れて、今数えてみればなんと50年以上が経ってしまいました。

10年くらい前までは、年に1〜2回は帰省していましたが、今は両親なきふる里へ帰る事もなくなりすっかり忘れ去っていました。

ところが、最近こんなことがあり、ふたたび故郷を思い出し懐かしく、是非故郷へ行ってみたいと恋しく思っています。

それは、私の大の友人で同じく野上野出身で柏原高校の同級生でもある、寺崎弘子さんの弟さん（柳川拓三社長 柏原高校出身）が昨年9月に東京都文京区本郷に丹波で作った和洋菓子、農産物の御店を出店されたと聞き、早速行ってきました。

その土地は 春日町の名前の言われと同じく、春日の局にゆかりのある土地で、近くには春日の局の菩提寺・麟祥院があり、春日の局がその墓地で眠っています。

お店の前は春日通りといい、最寄りの信号は春日町

と書いてあります。東京メトロの最寄りの駅は、後楽園駅、春日駅です。

そのお店は、東京の一等地にあり、大きな店構えで、丹波風土という名前でした。

丹波産のお米、丹波栗、丹波の黒大豆で作った和洋菓子は100%丹波産という事で、故郷の美しい山々や澄んだ空気、清い小川等、すべてが思いおこされました。

丹波のお米、味噌、卵、ヨーグルト、ジャム、お茶等々の特産農産物なども販売してあります。珍しい丹波のお店として、近所のお客や旅行中のお客で賑わっていました。



この店に来て、一気に郷愁に浸ってしまいました。

そのうえ丹波フードで販売している黒豆入りのおにぎりの美味しいこと。お米が輝いて一粒一粒が美味しい味をだしています。そのお米を作っている農家さんの写真が壁に貼ってありま

したが、その人が私の実家の近くの人で、年の差はありますがよく知っている人であり懐かしい限りでした。お店のすべての品物を口にしたいわけではないのですが、何種類か購入しました。

お世辞抜きで美味しかった。中でも 個包装したバームヘン丹波まるごと、ケーキードーナツジャムミルク味は私の好物です。

本当に美味しい。是非お勧めします。

ふるさとは遠くにありて思うもの。

私にとってふるさとは実際に帰るところではなく、異郷にて想い出し、心の糧となるべき所だと思っています。生まれたふるさとは私を育ててくれました。四季折々に変わる景色の中で、新鮮な丹波の野菜を食べ、野山でもよく遊びました。両親、兄弟、友人、恩師、地域の人々に支えられた沢山の思い出や景色がよみがえります。

齢を重ねた今、私の心の中には温かいふるさとが一杯に広がっています。

いつでも心の中で帰省することができます。そんな私の故郷に感謝します。

## 国語の佐藤先生

藤原 保（府中市）



話は古くなりますが、中学三年の時妙齢の国語の佐藤先生が、いきなり俳句を作ってくることを宿題にされました。

何せ生まれて初めてのこと、五七五と語数を揃え意味が通るようにはなかなか出来ません。仕方なく図書館の本の中から盗作することを思い付いたのです。まあ「大根はきうりなすより大きいな」。この程度のものなら出来なくはなかったのですが、何だかこれでははずかしいように思われたのです。それというのも、私が思春期の入口で、佐藤先生に初めて異性を意識し、少しでも良く思われたいという心持ちがあったからでしょう。

さて盗作用の俳句ですが、ありました、ありました。「われを見てやがて鳴きけり春の猫」。自作の「大根

は……」よりはましだと思いました。その作者は平仮名で、「きよし」と書いてありました。あつ世間のことにもあるきよしさんの作なのだと思って、気には留めませんでした。

後日の佐藤先生の、宿題に対する感想ですが、俳句は最初からそんなに良いものは出来ないということを、何だか私の方を見つめて話されたのです。私はその時、それは私に対して言われたのだと確信したのです。

後日判明したことです。作者は高浜虚子であったのです。私は先生に全人格を否定されたような気持ちになり、抱いた淡い慕情は粉々になって消え去ったのであります。

(山南町出身)



撮影・岡田昌子

## 輝いていた懐かしい陸上選手時代

林 進 (川越市)

平成31年2月23日、柏原町の「喜作」で柏原高校陸上部のOB会があり、久方ぶりに参加しました。



陸上部OB会にはかなり会員がい

るようですが、この日の出席は男性ばかり14名でした。ちなみに兵庫県の陸上部でOB会のあるのは柏原だけだそうです。これまで深田迪良先生が会長を務められ、今回から前校長の大西伸弘先生に変わりました。

今回の参加は僕の世代は1年上の芦田昭義先輩と二人で、あとは10年ほど上の世代、10年ほど下の世代でしたが、陸上部で競技した体験は同じで非常に盛り上がりました。

柏高には昭和41年に入学して、すぐ陸上部に入部しました。柏原中学時代はバスケット部でしたが、2年生頃からマラソン大会や運動会で上位に入るような

り、陸上大会など駆り出されてきました。そして、3年生の秋、みんな部活は夏で終わって受験で青い顔している中、ほぼ毎日、駅伝チームの一員として放課後は練習に明け暮れていました。

その中学駅伝は氷上郡大会、丹有地区大会をぎりぎり勝ち抜けて、県大会に出場。僕は郡大会はアンカー、地区大会は1区でそれぞれ区間2位。県大会も1区を任されましたが、県レベルの大会は初めてで何も判らないまま走ったら、なんと区間2位。この時、記憶は定かではありませんが、確か丹有から丹南中2位、明徳中4位、氷上中も10位以内で柏原は10何位かで神戸新聞に丹有勢の活躍が載っていました。それで高校に入ると、すぐ陸上部となりました。

当時は柏陵会館の奥にあった中央グラウンドが陸上部の練習場で、女子ソフトボール部と共有していました。入部して、びつくりしたのは練習量！ウォーミングアップも2〜3kmかなりのスピードで走らされ、それだけで十分と思うほどでした。でも、それから本練習。例えば2000m全力疾走してジョグでつなぐインターバル40本とか、20km走、或いは八幡さんの石段を

駆け上るとか、本当にヘトヘトになるまで、しばらくしました。家に帰って、風呂浴して御飯したら、もう寝るだけという毎日でした。

でも、しつかり鍛えられたお陰で、夏頃には記録も伸びはじめ、福知山の石原高校で開催された三丹陸上（丹波、丹後、但馬）の5000mで3位に入賞しました（ちなみに1位は自衛隊、2位は京都銀行の選手でした）。

また、夏の滅茶苦茶きつい合宿の後、その当時は秋にインターハイとは別に近畿総合陸上競技という大会があり、1年生の部3000mで兵庫県の予選を勝ち抜け、柏原から足立典子先輩と二人出場。丹波新聞にも載りました。大会は大阪の長居競技場であり、400mの競技場も初めて、スパイクも初めて履いて走ったら、なんと途中から独走となって優勝。2年生の部女子走り幅跳びでは典子先輩が2位に入賞しました。また、秋の新人戦では1500mと5000mで優勝。あれよあれよという間に県のトップレベルになっていました。

そして、駅伝シーズンとなり、まずは丹有地区大会。



兵庫県では、今でも同じですが、数地区の予選を勝ち抜けなければ県大会に出られず、各地区の枠も前年の成績で決められていました。その年は、丹有地区は前年の成績がよくなかったらしく2校か3校ということようで、それが突破できるどうか、かなり危機感があったように記憶しています。丹有地区では篠山産高は県でも入賞の常連校でしたが、あとは柏原と氷上農高、篠山鳳鳴、有馬など、どこが強いかわからない状態でした。

大会は氷上農高から石生までの折り返しコース。その時の柏原は1区10000m林進1年、2区3000m二森保博1年、3区8100m門脇利広3年、4区8095m小山尚志3年、5区3000m亀井忠司2

年、6区5000m芦田昭義2年、7区5000m足立伸夫3年というオーダーでした。レースは1区の僕

は途中からトップになり、2区も区間賞、3区で篠山産高に抜かれましたが、4区で抜き返し、5区も踏ん張り、6区、7区も区間賞で思いもかけぬ優勝。陸上人生でも最高の瞬間でした。

陸上の長距離ではトラックやロードの個人競技より、なんとといっても、みんなでタスキを繋ぐ駅伝が盛り上がりがあります。

その後の県大会は淡路島であり、当時は神戸の葺合高校が全国でも入賞常連校の強豪で、この年も圧倒的に優勝。2位が明石南、3位が生野、4位が飾磨工で、柏原は僕が1区で5位の後は抜きつ抜かれつして結局5位に入賞しました。確か柏原では伝説のランナーで、のちに早稲田大学競争部の主将も務めた里勝安先輩を擁した時以来の入賞ということでした。県で入賞できましたので、近畿大会にも出場。その頃は聖徳太子駅伝として、高校の部の他、実業団なども一緒に走る大会で、奈良の法隆寺から富雄川沿いの折り返しコースでした。この時は1区で4位、その後、強豪葺合に先行する区間もありましたが、結局9位でした。でも泊りがけの参加で、プチ修学旅行気分の大変いい思い出

です。

この1年の時が練習は非常にしんどかったですが、チームも個人も成績が伸びて充実した年でした。

2年、3年の時も大会は勝ったり負けたりしましたが、県の駅伝では優勝候補にあげられたにもかかわらず、2年の時は1区の僕が腹痛で大ブレーキ、3年の時は1区で何とか区間賞と取りましたが、後が続かず不本意な成績に終わりました。

ちなみに中長距離の記録は秋の新人戦が最も調子よく、1500mが1年の時4分20秒、2年の時4分12秒、5000mが1年の時15分47秒、2年の時15分26秒でした。3年の時は不調ながら1500mと5000mで県、近畿大会で入賞して広島での全国大会に出場しましたが、1500mは予選落ち、5000mは決勝14位に終わりました。

丹波柏原での中高時代、陸上一筋の思い出深い青春でした。

(柏原町出身)



撮影・岡 吉明



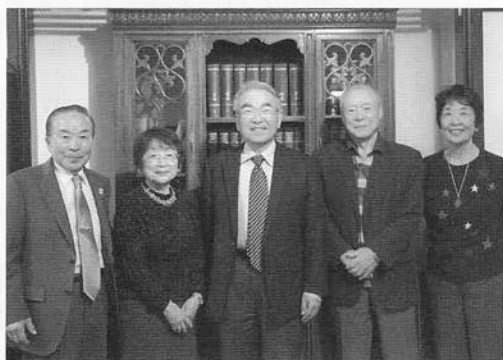


# 苦しいときに生きた母の教え

カーネギメロン大学ワイタカー記念全学教授

## 金出武雄さん

●インタビュー  
安井孝之 (兼撮影)  
岡田昌子



《研究業績とプロフィール》 略歴は8ページの講演記事参照。コンピュータビジョンの基礎理論に根源的な貢献をし、自動運転などのロボティクスへの革新的な応用技術を相次いで世に出した。丹波に生まれ、6歳で神戸に移り、京都大学から1980年に米國カーネギメロン大学に招聘。それ以来米國を拠点に研究してきたが、2014年に丹波篠山市に居を移す。「素人のように考え、玄人として実行する」が研究信条。

——「ふるさとの会」のセミナーで「人工知能(AI)は必ず人間を超える」と明言されましたが、人間にはAIにない能力があるのではないのでしょうか。

金出 AIが人間を超えるというと、一般にはあまり評判はよくないところがありますね。たぶん、超えてほしくないという希望があるからでしょうか。今日現在のAI技術では無理ですが将来は必ず超えるというのが私の技術者としての考えです。理論的に言って、人間は「計算機械」といべきものです。こう言うと「計算」「機械」という言葉にドキッとされるかもしれませんが、それらは技術的用語です。計算とはいわゆる数値を扱う四則演算ではなく、情報処理という意味です。機械とはギヤなどからなる冷たい決まった動き

をする装置ではなく、情報処理をするプロセス・仕組みという意味です。実際、ひとの行動は光や音といった物理的な信号を目や耳から入力し、神経回路網という物理的仕組みの脳で記憶を参照しながら処理したうえで、電気的信号として筋肉に指令して体を動かしています。魔訶不思議な仕組みと力をもつてやっているわけではありません。今のところロボットにはできない判断や動きを人間ができることも多くあるのは事実ですが、それは人同士にも能力の差があるように、現在のAIと人との能力の差に過ぎません。単なる速さ、大きさではなく、知識の蓄え方といった能力を含め、コンピュータの能力は今後もどんどん向上します。一方、人間は物理的制限から、ある一定以上の大きさ、スピード、容量、通信速度、さらに重要なことには一生のあいだの経験の量に上限があります。とすれば、近い将来とは言いませんが、AIはいずれ人間を超えます。

——しかし、人間にはAIにはない創造性があるとい  
くわれますが

金出 これも怪しい。

——なぜですか。

金出 もともと「創造性」の意味が明快ではないとい  
うことに加えて、こういう言説は「そもそも創造性とは、人間がすることである」という定義の意味合いが強いと  
ころがあります。そうは言  
つても議論は始まらないので、ひとまず創造(性)と  
はもつとも簡単に「これまで誰も考えたことのない、  
かつ良いアイデアを思いつき(発見して)実行する」  
ということくらいにして、碁の例で考えましょう。碁  
のプロ、名人はこれまでの知識、経験から「より良い  
手」をあまり間違わずに打っているようです。たしか



に、われわれ素人はまっ  
たく歯が立ちません。し  
かし、必ずしも現在のプ  
ロの答えがベストの答え  
かは誰にもわかりません  
実際、歴史的にもそして  
今も次々と新手が現れて  
います。現在、AI碁の  
打った手(考え方)のい

くつかが、碁の歴史（常識）を変えたとまで言われ流  
行っています。もし、そういう先生に叱られるような  
常識外れの、しかし良い手を提出したのが人間なら多  
分、「囲碁の常識を破る『創造的』新手的棋士」と表  
現されているでしょう。さらに、AI新手は必ずしも  
過去の棋譜を重視せずに強化学習と呼ばれる学習方法  
で生み出されました。これを、「大胆にも過去の知識  
を無視し」と表現するか、「それは『単に』力づくで  
やみくもに調べたに過ぎない」と表現するかはAIと  
人とを同じ土俵で評価するかどうかに関係しそうです  
ね。

——いつ頃AIは人間を超えますか。

**金出** 20から30ワットくらい「電力」で動いている  
人間の脳の生（なま）の計算能力は、何ギガワットも  
電気消費するスーパーコンピュータの能力と比べて  
もまだ上回っています。それに、知識の良い表現方法  
もまだ十分にはわかっていません。今しばらくは安心  
してもいいでしょう（笑）。

——小学1年生まで丹波で育ち、その後神戸で高校ま  
で学ばれ、京都大学工学部に進学されました。ずっと



優等生だったようですが、  
大学院で悩まれたと聞いて  
おります。どんなご苦労が  
あったのですか。

**金出** 博士号を取得しよう  
とする人の多くは小さい頃  
からいわゆる成績優秀タイ  
プの人です。他人には言わ  
なくても自分は勉強ができ  
ると思っっているの、大学  
院の博士課程で早く成果を

あげなくてはと思います。  
研究室で博士課程に入ってから2年ほどの間、数学的に  
格好の良さそうな論文を読んでは、「ここをこうすれ  
ば」などと考え、次々ととりかかったのですが、どれ  
もすぐに行き詰りました。鬱とまではいかないまでも  
焦りが出始めていました。

**助教授のアドバイザーに助けられた大学院時代**

——その時どうなさったのですか。

**金出** 研究室の助教授で後に京都大学総長になられた



長尾眞先生のアドバイスに助けられました。「金出君、もう少し具体的なことをやったら」と勧められたのです。長尾先生は1970年の大阪万博の時の来場者10000人のデジタル画像データがあることを教えてくださって、「その画像データを正しく処理できるプログラムができれば立派なものだ」と。当時はデジタル画像データそのものがほとんどなく、世界を見回しても10000人分もの顔画像データは皆無で貴重な宝の山でした。

具体的な目標でしたから研究は進みました。顔の認識を画像入力から特徴抽出、判定まで一貫してコンピュータで自動的に処理するシステムを作りました。今なら100万単位の画像データを実験しなければだめですが、当時は10枚でも「大規模な実験」と言われるほどでその時代に10000枚もの画像でテストしたわけです。で、博士論文は顔画像の処理と認識の世界で最初の本格的な研究という評価を得ました。これが私のその後のコンピュータービジョン、つまり「ロボッ

トの目」の研究へとつながっていきました。

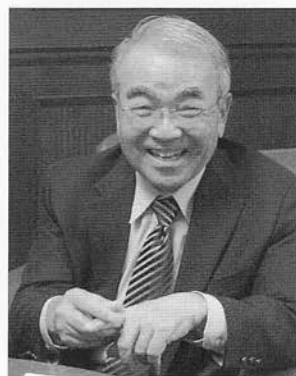
——長尾先生のアドバイスがなければ今の金出先生はないかもしれませんね。

**金出** その通りです。「頑張り」というのはアドバイスにはなりません。アドバイスは具体的なアクションにつながるものでなければなりません。長尾先生のアドバイスはまさにそれでした。

米国に渡ってわかったことは、どんな研究も世の中に役立たないといけない、世の中に貢献するという意思とプランを示しながら研究すべきということでした。米国の研究者は自分たちが研究したことが世の中で使われていくところまで責任を持ち、そこまでの筋道をつきたいと考える人が多い。そういう視点が日本の大学には時に欠けているように思います。大学は10000人単位で博士号を持っている人たちが集まる大知能センターです。その人たちが大学に籠って世の中で起きていることとずれた研究をするのではなく、もっと世の中に関心を寄せるべきです。

**6歳の時の釣り針づくりが「イノベーシジョンの原点」**

——丹波でお生まれになり、6歳までお育ちになった



ことがその後の研究に役立ちましたか。

**金出** 終戦直後の1

945年10月に大路村栢野（現春日町）

で、姉二人と兄二人

の5人兄弟の末っ子

として生まれました。疎開のような形で家族は母の実家近くに神戸から移り住んでいました。田んぼの中の小さな家で、その前には井戸と小さな庭がありました。最近そこに行ったことがあるのですが、家はないものの覚えていた通りの井戸の石組みが残っており驚きました。

何でも自分で作る子供でした。6歳のころ、かまどに火をつける火吹き竹を鎌で竹を削って作る時に指を深く切る大けがをしました。その傷あとは今も残るほどですが、病院にはいかず、メンソレータムだけで治した記憶があります。

釣り道具も作りました。針金をペンチでJの字に曲げて糸に結び、ミミズの餌をつけて川に垂らしました

が、餌は取られるばかりで魚は釣れません。釣り針には「戻り」という逆向きの尖りが要ることに思いつかなかったからです。そんな戻りを考えた人は本当にすごいなと思ったことが、私にとってはイノベーションの原点です。

——小学校1年の夏に一家で神戸に引っ越しされますが、どんな少年時代だったのですか。

**金出** 神戸の小学校に2学期から移り、3学期にはもう学級委員長になるようなことで、学校では優等生という感じでしたが、青っぱなを鼻から垂らしたままの当時の「田舎の子」でした。近所の子供たちと空き地で木の棒をバット替わりに野球というのが日課でした。  
**母に学んだ人生哲学**

——5人のお子さんを一人で育てられたお母さんは大変だったでしょうね。

**金出** 母は高等小学校を卒業しただけでしたが、とても賢い人だったと思います。昔話や諺、人生訓をずいぶん教えてくれました。「人の悪口は言うてはいけなく、人が試されるのは、うまくいっている時ではなく、困難に会い、調子が悪い時。その時に人の本当の

価値や能力が分かる」などと教えられました。様々な人生哲学はすべて母から教わったと言ってもいいと思います。

母は裁縫がうまく、神戸・三宮の呉服店の縫子として生計をたてていました。高級な着物の縫製は母に任されるといっただけでした。朝早くから夜遅くまで家で着物を縫っているのですが、私も小学校の低学年ころから着物の生地のアイロンがけを手伝っていました。

家は貧乏で苦労はしましたが、はじめという思いはありませんでした。それに、上の姉や兄は中学校を出てすぐに働き、下の私たちを支えてくれましたから、もつと大変だったと思います。実際、高校に進んだ兄の一郎（後に伊藤忠商事副社長に）は、新聞配達をしながら高校を出ました。そんな一郎は私に「苦労したといつてもおまえは自分に比べれば王子様のような生活だ」と苦労自慢をいまでもします。

少年時代の経験はその後の人生に生きたいと思います。少々の苦労は何のことはないと考えることができましたし、我慢もできました。研究はだいたいうまくいかないものです。そんな時、母親が話していたことなど

を思い出しながら、何とか研究を続けることができたのだと思っています。

——今は丹波にお住いとお聞きしていますが、いかがですか。

金出 カーネギメロン大学にはまだ籍はありますが、「勤務地は自宅（笑）で知的活動をする」、という契約になっており、2014年から居を丹波に移しました。

最初は神戸のマンションを探したのですが、米国生活に慣れた身にはどれも狭く感じました。篠山城跡の近くに土地があるというので、そこに自宅を建てて住んでいます。山南町出身の妻も田舎が近くなり、喜んでいきます。

日本では常勤の仕事にはつかず、京都大学の招聘特別教授とか、





理化学研究所や企業の顧問などを務めています。顧問といっても大所高所からの意見を言うというスタイルではなく、研究スタッフの発表を聞き、「もつと別のデータが必要なのは」「その式は間違っていないか」といった具体的なアドバイスをしています。その方がお役に立てると考えており、今後も知的活動を通じて、世の中に貢献したいものです。



撮影・岡田昌子

## インタビューひと言

安井孝之

幼少期からずっと優等生だった金出さんも博士課程では壁にぶつかり、恩師のアドバイスで乗り越えられた。人との出会いが人生には大切な所以だ。社会に役立つ具体的な技術を次々と創造されてきたバイタリティーは今も全く衰えていない様子。

坂上勝朗

講演をいただき、懇親会を挟んでの急ごしらえの座談の場でしたが、とても愉快にお話を伺えました。ご母堂のことに触られるとき、先生の瞳が、ころなしに潤むのを見て取ったのは、私ひとりだったでしょうか。

(氷上町出身)

岡田昌子

素人の発想から玄人の実践へと研究された結果、一番いろんなことをやったロボット研究家といわれる金出さん。「玄人の偉大な息子に賢者の母あり」を実感。苦しくて辛い筈の丹波貧乏話を笑いに変えて和ませて下さる心のゆとりは流石大物！ 感動に感謝。

(柏原町出身)



## 柏陵同窓会東京支部長を終えて

谷 口 浩 章（横浜市）



岡田編集長より寄稿依頼がありまして、軽く引受けたものの、近年「山ざる」の充実振りは目を見張るものがあり、50号記念号に相応しいものを書けるか甚だ心許無い状況です。

振り返ってみると10年前にサラリーマンを卒業して以来、実業を離れたボランティアの世界と実家に1人住まいの母親を訪ねて毎月丹波に帰省する生活でした。関わったボランティア活動は柏陵同窓会・関東氷上郷友会等の郷里関係以外に卒業大学の同窓会、勤務した会社のOB会、家庭裁判所の家事調停員、高校同期上高子さんが立ち上げたNPO法人「アジアの新しい風」の手伝い、官民合同の異業種交流会の手伝い等です。何故こんなに多くのボランティアを引受けたのかは、37年前に設立され1期生として会員になり現在運

営を手伝っている官民合同の異業種交流会「浩志会（会員数約1700名）」のモットーが「頼まれたら断らない」で、入会后このモットーに大きな影響を受けたからです。若い頃は世話役など引受けない男と思われていました。「頼まれる」ということは人の役に立つということ、生きがいも感じる事が出来ます。

岡田さんの示唆もあり、柏陵同窓会東京支部長時代を振り返って、同窓会と丹波について述べてみたいと思います。

柏陵同窓会東京支部支部長は2010年6月に就任（その前4年間副支部長）、2018年7月まで8年間支部長を務めました。

支部長就任に際して次の3点を述べました。

①他支部との交流、②「関東氷上郷友会」との共存・共栄、③東京支部会員の増加です。

①他支部との交流は本部・他支部役員に加えて当番学年同期生を中心に総会参加者増に繋がりました。②「関東氷上郷友会」と柏陵東京支部はメンバーが殆ど同じで、年1回の総会も講演会プラス懇親会で差がありません。そこで講演会を同窓会は当番学年から講師

を選定、一方郷友会は講師を娯楽系にして両方に参加してもらえようにしました。③東京支部会員は静岡、長野、新潟以東北海道までの在住者ですが少子化による卒業生減（最近の卒業生数は昔の半分以下）に伴い会員数の減少は免れず、丹波で毎年開催される卒業30周年同窓会から関東在住者の情報を提供してもらう等の努力はしたものの会員数は支部長就任時1243人だったのが退任時は1187人となりました。

毎年の総会出席人数は幸い増加傾向で支部長在任8



年のうち前半4年間の平均出席者数（総会参加者名簿ベース）は131人、後半4年間の平均は158名でした。会員数減にもかかわらず総会出席者が増した要因は東日本大震災により「絆」が脚光を浴び「同窓会の絆」が再認識されたことに



加え、高見秀史前支部長時代に改革された①総会を立食から着席へ、②東京支部便りの充実・ホームページ開設等、③当番学年制の定着・充実により東京支部のみならず他支部会員の参加が増えたことです。

在任中のトピックと

しては①2011年3月の東日本大震災発生です。千葉県から北海道在住の皆様143名の方に関東氷上郷友会坂上勝朗会長と連名で安否確認を兼ねたお見舞い状を発状いたしました。亡くなられた方がおられなかったのは幸いでした。②本部への寄付を2回実施しました。2012年の「くすのき基金」への寄付20万円と2017年の母校創立120周年記念寄附30万円です。いずれも会員の皆様に寄付をお願いしてご協力頂きました、有難うございました。③苦労したのは総



会会場です。震災で長らく利用していた「九段会館」が閉鎖となり新たな会場探しに苦労しました。やっと見つけた「八重洲富士屋ホテル」も3年で閉鎖になり、次に見つけたのが現在も利用している「学士会館」です。

8年に亘って無事支

部長が務められたのは副支部長・役員の皆様始め本部長・各支部長及び会員の皆様のご指導、ご支援、応援のお陰です。この場を借りまして厚く御礼申し上げますとともに、後任の谷敬三支部長始め役員の皆様のご努力により東京支部が益々発展することを祈っております。

丹波を離れて55年になり、横浜市在住が圧倒的に長くなりました。親がずっと丹波で存命のこともあり、折に触れて帰省していますが、丹波は何時帰っても何

日いても退屈することはありません。街並みは結構変わりましたが、変わらない山、川、田園風景に癒されます。近年関東に来られる人が減っているようです。

情報がネットでもどこにいても手に入る時代になったとはいえ東京の一極集中は続いています。地方創成のためにも丹波と東京の相互交流がもつとあればと思います。そんな昨年（株）やながわ（代表取締役柳川拓三丹波市観光協会会長）が「春日局」の縁で東京文京区春日に「丹波風土 東京春日店」をオープンされました。同店の成功をお祈りするとともに会員の皆様の応援をよろしく願います。

（水上町旧幸世村出身 昭和20年生）



撮影・岡 吉明

## 戦時中の思い出

中 松 美年子（旧姓上田・墨田区）



何年か前のことですが、「高齢者の戦争体験の証言を共有」するという趣旨で「戦争証言プロジェクト」が原稿を募集していることを知りました。私は女学校時代の同級生が書いた文章に共鳴していたので、あの時代のことを書こうと思いました。ところが、私の子どもたちが言いました。

「あの戦争では空襲で被災した人たちや戦争孤児になった人がたくさんいる。それに比べてお母さん達の戦争経験はインパクトに欠ける」と。何となく気おくれがして原稿を書くことを中断してしまいました。

しかし、「精神的には不具の時代」を送った田舎の女学生がいたことは紛れもない事実です。私はそのことを自分史として書いておきたいと思うようになりました。



布が服た  
色あー貫つ  
国防セーラー  
後染めて作る  
戦をの春  
16才の

私が卒業した兵庫県立柏原高等女学校には、戦時中、こんな替え歌がありました。

命一つかけがえに 百本、千本切つてやる  
ガンドとナタの切れ味を今こそ知れと  
山中深く今日も行くゆく柏女生

昭和20年8月15日までは、替え歌のような思いを抱いていた戦時の皇国女学生でした。ところがこの日を境に一切が否定され、教科書は先生の指示で墨で塗りつぶされました。

先生がどのような気持でそれを指示されたのか、今となつては知る由もありません。

私たち女学生の戦争中の生活はどんなだったでしょうか。

私が共鳴した同級生山内壽美（旧姓小谷）さんのお許しを得て記載させてもらいます。



「戦争も急を告げる頃とは言つても一年生時代は先輩と後輩の親しい交わりを通して女学校の楽しさを知り始めた。だのに二年に進級した時、学徒動員が下され、或る日先輩の全部がぶつくり本校から姿を消しておしまいになりました。いきなり私共が本校での最上級生と激励されて、それから例の山行が始まります。軍需用薪炭増産の一翼を担つたのです。苦しかったのは夥しい原木を山から校庭へ運搬する労働でした。肩に綿入れの布を当て、原木を二人で担ぎ、或る時は鐘ヶ坂から歩きました。威勢のいいおしゃべりや歌も始めだけで、しみいには誰も口をききませんでした。めり込む肩の痛さに耐えていたのです。友たちと一緒にまだ救われませんが、炭俵を



峻しい谷間を背負って降りる時は自分の力が頼りです。みんなにどんどん追い越されて人影が全くなくなった折の心細さは、ヒュルヒュルと渡る風を聞きながら情けなくて涙になってしまいました。

地元の柏原の生徒は朝早くから炭俵を山から下ろしていましたが、私たちはどうかすると予定通りに進まない時がありました。そんな時は、教官の雷のような怒声が山奥や校庭に響き渡りました。が、もう怖いという反応を示す気力もありません。わずかに戦地における一兵卒の心境もさこそ、と思われました。当時、辛さを訴える相手が一体どこにおりましたでしようか。人間同士の惨めな素顔がそこにあるだけで、教官も生徒も空しく己と闘っていたにすぎないのです。

ある時、講堂に皆で作り上げた薪の束が運び込まれたことがあります。たちまち講堂を埋めつくしたその上に立つと、指先にあの天井が触れるではありませんせんか。とっさに装飾用のとんがった壁をもぎとって「記念になる」と皆でわけあい家に持ち帰りました。講堂から駅までバケツリレーのように、私たちが並んで運んだことが強い印象となっています。

雨の降る日は全員一教室で授業が行われました。教官は工場と私たちの間を往復なので大変でしたが、多くの友達を識る上で、その雰囲気を楽しんでいました。各地から疎開してきた人達で、脹れ上がった教室は、その地方の特色を紹介しあうなど、お互いが良い意味で刺戟されあいました。」



あとがき

自分史を書きたいと思ったのは十年ほど前からでした。本もあまり読む習慣もなく、ましてや書くことなど、苦手意識だけが先に立ち、半ば諦めていました。

二〇一三年墨田区の「自分史を作ろう」のセミナーに参加して自己表現の難しさを知り、私にはとても無理だと思われましたが先生のアドバイスを参考に、戦

前の写真を年代順にまとめ順序だてて画用紙に貼るところから始めたところ、写真を手がかりに記憶が蘇りはじめ、書きたいことが次々浮んで何とか書くことができました。

「山ぎざる」に投稿した内容は、十七歳で終わっている自分史の一部ですが、戦時中の苦労話を皆様にお伝えしておきたいと思ったのでした。

同級生の山内（小谷）さん、浅田（永井）ふくゑさん、高見（藤原）三千代さん、私の自分史にお世話下さり本当にありがとうございます。感謝しております。

（神戸市兵庫区、昭和六年生まれ 柏原在住は小学四年から女学校卒業までの八年間ですが思い出多い丹波です）



撮影・井上 巖

## 命拾いの記

大坪 眞子（町田市）

昨年十一月十四日、病魔は突然私に襲い掛かった。

体力には自信があった。長年、早朝のラジオ体操、一日に一万歩以上のウォーキング、週に四回のプール通いをほとんど欠かしたことがなかったからだ。プールでは、二千メートル泳いだあと四十五分のアクアビクスを軽々とこなした。どうだ、御年八十歳にしてこの体力！ 私は鼻高々であった。年に一度の健康診断でも、問題を指摘されたことはない。

ところがその日、いつものようにプールに行ったものの、体が重く、どうも気乗りがしない。認めたくはないが年も年、たまにはこんなこともあるかと、予定を早めに切り上げた。

何とも言えない不快感に見舞われたのは、シャワーを浴び始めたときだった。激痛が走ったわけでも、失神しそうになったわけでもなかったが、ただ事ではな

いと直感した。

体を拭き、かろうじて外観を整えて、受付に急ぎ、しばらく休ませてほしいと頼んだ。

この時点ではまだ、少し休めば自分で病院に行けるとタカをくくっていたのだ。だがスタップの行動は迅速だった。直ちに救急車を呼び、携帯で夫に連絡してくれた。この時宜を得た適格な対応が私の生死を分けたのは間違いない。

ジムから田園都市線の線路を隔てた対面に、昭和大学病院の救急センターがあったのも幸いだった。私は歩いて十分足らずの距離を救急車で運ばれ、ここで急性大動脈乖離スタンフォードA型と診断された。一刻を争う病気だったのだ。

さらに幸運は続く。この救急センターは日本でも有数の実績を誇る大動脈専門病院と提携関係にあった。すぐさま連絡がつき、私は迎えに来たドクターカーで搬送されて、望みうる最高の条件で緊急手術を受けることができた。

手術後は非常に危険な状態だったらしい。後で知ったが、この時夫は、近親者を呼ぶようにと言われ、覚

悟を決めたという。

生死の境をさまよいながらも、神経の一部は妙に鋭敏で、周囲のひそひそ話がはっきり聞こえた。どうやらこのまま死ぬらしい、そう思ったのを覚えている。進歩した緩和治療のおかげか、喉元からへその上までざっくりと切り裂かれている割に、痛みはほとんどない。このまま死ぬのなら何という幸せ、まさに大往生！ 本当に楽しい人生だった、バンザイ！

うつらうつらとそんなことを考えているとき、ふいに夫の顔が脳裏をよぎった。終活をしないまま私が消えたら、彼はさぞ困るだろう。伝えておくべきことは山ほどある。このまま死ぬわけにはいかない。生きよう！ 生きなければ！ 生きたい！

何時間もの格闘を経て、ようやく危機を脱した。私のためだけに深夜まで残業を強いられた医療スタップにはお礼の言葉もない。普段は四十五キロそこそこの私が、何本もの点滴液を注ぎ込まれ、七十キロ近くまで膨らんだ。最後のチューブから解放されたときは、本当に嬉しかった。

それから二週間後、私は退院を許され、大量の処方

薬とともに帰宅した。

現代の医学は、何本もの点滴チューブに繋がれた状態でも、リハビリを強行させる。帰宅後も、自己流のリハビリメニューを組み立て、徐々に強化しながら、体力回復に努めた。そして術後四カ月の今、薬をいっさい服用することなく血圧、食欲、体調など、すべて正常に推移している。

先日、退院後三か月目の検診に行った。検査結果は申し分なかった。とはいえ、人工大動脈の置換は一部にとどまり、乖離の大部分は今なお私の体内に残存していて、定期的な検診は欠かせない。だが今、私は生きていく。それで十分だ。風に散る梅の花びら、鶯の初音、我が家の小さな庭に芽吹く雑草、すべてがいと美しい。

思うに、私が死の淵から生還できたのは、幸運の連鎖と、医学の進歩、日ごろ培った体力のおかげだった。夫をはじめとする周囲の人々の支えも忘れてはなるまい。

誰しもいつかは経験しなければならぬ死。だが、普段の生活が平穏であればあるほど、時期の予測は不

可能だ。私はそれに直面し、生還した。そして、生きることの意味をしっかりと胸に刻むことができた。それこそこの体験の最大の収穫だったかもしれない。

これからは、小さなことに一喜一憂することなく、一日一日を大切に生きていきたいと思う。そうすれば今日の一日は、のほほんと生きたかつての私の一年にも相当する意味を持つことだろう。

【追記】退院後六ヶ月目の検診でも、検査値はすべて正常範囲内に収まっていた。術後八ヶ月の今、食欲は旺盛で料理が楽しく、体力も以前に戻った気がする。この分ではピンピンコロリの理想達成も夢ではなさそうだ。

(成松町出身)



撮影・岡田昌子

# ザルツブルクへの想い

足立 さつき (世田谷区)



「ドはドーナツのド! レはレモンのレ!」でお馴染みの映画「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台となった街、ザルツブルク。1959年ブロードウェイで初演、1965年映画化され、世界的なヒットとなった。私の大好きなミュージカル映画!

今から263年前にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが生まれた街としても有名である。オーストリアの中央西側、ドイツとの国境も近い。ザルツアツハ川の南側の旧市街は、歩いて回るほどの小さな街。ザルツ川、塩、ブルク城。塩の採掘で歴代の



ザルツブルク市内「サウンド・オブ・ミュージック博物館」



ミラベリエンザルツブルク庭園とザルツブルク城

めて訪れてから、すでに4〜5回足を運んでいる。

その街で毎年夏に催される「ザルツブルク音楽祭」は、世界中の音楽ファンたちの憧れの祭典だ。3つの祝祭劇場を中心として、街のあちこちで繰り広げられる演奏の数々は、その演奏の質の高さ、そして集まってくる観客のレベルの高さの点でも、世界の音楽ファンを魅了し続けている。

今回、私が指導者として関わっているクラブーツーリズムの合唱団(Citi Chor)クラブーツーリズムインターナショナルコア)が、「ザルツブルク音楽祭・オープニング公演」に招待され、大聖堂(モーツァルトが洗礼を受けた洗礼盤も当時のまま)で演奏することとなった。日本オーストリア修好150年を記念しての招聘だが、3年前の同地でのモーツァルト「レクイエム」の演奏を評価された上でのことで、たいへん

大司教たちが富を築いてきた街でもある。学生時代に初



「レクイエム」最終リハーサル（大聖堂）

榮譽なことだ。3年前、そして翌年の公演時と同じように、現地の大聖堂オーケストラ、合唱団にジョイントさせていただく形での演奏。日本（東京、名古屋、大阪の3グループ）さらに現地でマエストロ（大聖堂音楽監督ヤーノシュ・ツイフラ氏）のレッスンを重ね、7月20日午後4時、モーツアルト「戴冠ミサ」を演奏した。

今年3月からの東京での練習会では、マエストロ・ツイフラの愛弟子、テノールで指揮者の牧野成史氏（ザルツブルク在住約20年、大聖堂テノール歌手&指揮者。帰国後も宗教曲を中心に演奏及び指揮活動）が音楽稽古、私は音取りや声のレッスンという役割分担で、二人三脚で行った。6年ほど前から活動しているCTI合唱団は、演目ごとの募集での練習だが、合唱経験を持つリピーターさんも多く参加され、回を重ね

るごとにブラッシュアップしていった。とはいっても、大聖堂の7秒の残響（コンサートホールは通常1・6〜2・1秒）は特別な空間なため、歌唱方法にも工夫を要する。例えば、「Kyrie=キーリエ」と歌う箇所は「Kyrie=キーリエ」のように歌わなければ音が濁るのだ。もちろん、大聖堂での演奏経験豊富な牧野氏の指導で、東京での練習でも想像力たくましく練習するのだが、初参加の方は最初戸惑いつつ、しかし現地では徐々にその残響の心地良さを実感しながら歌えるようになってくる。私も合唱のソプラノに加わり、大聖堂での「音楽祭参加」の榮譽を賜り、改めてモーツアルトの偉大さ、音楽の奥深さを感じる幸せを得ることができた。



マエストロ・ツイフラ氏と音楽祭参加証明書を持って

今回は2演目の参加で、7月23日「大聖堂・オープンング公演」（CTI合唱団はこれまで2回経験）の





ザルツカンマーグートの景色

一人。午前中降っていた雨が上がり、ザルツカンマーグートの美しい景色を愛でながらの観光となった。

7月23日の「レクイエム」公演も、「戴冠ミサ」の公演と同じように、約700席のチケットは完売と

モーツアルト「レクイエム」を演奏。20日の「戴冠ミサ」公演後、さらにツイフラ氏のレッスンも重ねつつ、中日では、しばしの観光タイム。近郊のハルシュタットを訪れた。ハル＝塩（ケルト語）、シュタット＝地・場所。約7000年前に作られた岩塩坑があり、現在は900人の住民が住む美しい街。つい最近のNHKドイツ語講座でも取り上げられ、素敵な街の様子が紹介された。ハルシュタット湖から30kmほど戻り、ヴォルフガング湖畔のホテル「白馬亭」でランチ。ここは、オーストリアで活躍したベナツキー作曲のオペレッタ「白馬亭にて」の舞台となった場所。ベナツキーはオペレッタ黄金期の次に到来した、銀の時代の立役者の

なり、多くのお客様に演奏をお聴きいただいた。23歳の若きモーツアルトが、まだザルツブルクの大司教のもとで活動していた頃の「戴冠ミサ」。その後、故郷を飛び出してウィーンの都でフリーの作曲家として活躍し、35歳の若さで亡くなる直前に作曲した「レクイエム」。この二つの作品を、実際にモーツアルトが歩いたであろうその場所です、その空間で演奏し、音楽の喜びを深く味わえたことは、まさに音楽の神様からの贈り物。

この企画を立てたクラブツーリズムの海外テーマの旅スタッフ、現地コーディネータースタッフ、日本からの添乗員スタッフ、二人のマエストロ、音楽スタッフ、そして、ご参加いただいた皆さまに感謝しつつ、この旅の思い出を大切にしていきたい。

※来年のCTI合唱団は、5月にドイツ・ボンでのベートヴェン「第九」（2020年はベートヴェン生誕250年）、10月にドイツ・ライプツィヒのトーマス教会でのバッハ「口短調ミサ」（2020年はバッハ没後270年）。

## 蘭学事始

山口 敏 之（オランダ、マーストリヒト）



2011年の年末、仕事を終えて帰ろうとすると専務が、ちよつと話が……と。

『実は、今度オランダに赴任してもらいたいんだけど……』『エッツ……、一晩考えさせてください』と私。その夜、

『実はかくかくしかじか……どうする？』『エッツ、一晩考えさせて……』と家内。

翌朝、笑顔で『一人で行って！』『……』という事で、私の『蘭学事始』が始まりました。

学生時代を神戸で過ごし、機械部品メーカーに入り、海外出張も多かったのですが、57歳で初めての海外暮らしをする事になりました。欧州には、フランス、ドイツ、オランダ、ハンガリーに子会社があり、ホールディングの所在地はオランダの南の端マーストリヒト、

そこで暮らすことになりました。

### 一、『蘭学事始』

オランダ語など全くでき

ませんが、昔、国語の時間に『ターヘルアナトミア』



マーストリヒト条約締結時、各国首脳が集まったお城

の翻訳に杉田玄白さんが苦勞して『鼻』は『うずたかきはフルヘツヘンドと云ふことなるべし』と習ったのを幸い覚えておりました。そこで、オランダ人への挨拶で、初めて習ったオランダ語はこれだと話すと、皆??です。『そんなオランダ語聞いたこと無い！』『……』思わず心の中で『杉田さん』と叫んでいました。

### 二、『勤続12・5年』

こちらでは誕生日などの記念日には、お祝いをされる側がケーキなどをオフィスに持ち込んで皆で食べてもらいます。ある日、人事部長が、『今日は私の勤続12・5年記念日なので』とケーキを持って来ました。



世界一美しい書店



教会を改造したレストラン

日本では勤続祝いは大体10年区切りなのでピンときません。帰って、同ジアパートのオランダ人（奥様）とドイツ人（ご主人）夫妻に聞くと、結婚記念日も12・5年で祝うそうです。『25年も祝うけど、まあ、折り返し点ね！ 25年も一緒にいないかもしれないし、一回余分にパーティーできるでしょ』とニコリ。『……』

オランダ人、不思議です。

### 三、『教会』

江戸時代、幕府がポルトガル人やスペイン人を追放したのにオランダ人だけ出島に残る事を許したのは、オランダ人はカトリックと違い無害だと判断したからでした。約400年後の子孫達も同様でした。この街には古い教会を改造、『世界一美しい本屋』に選ばれた書店と、同じく教会を改造した一階がバー、中二階がレストランのホテルが



書店内部

あります。レストランのコンセプトは『Between Heaven and Earth（天国と地上の間）』。この話をフランス人の社長にすると、絶句して、あり得ないと怒ります。一体、檀家総代は何をしていたのでしょうか……とも思いますが、オランダ人、ヨーロッパの中でも、やっぱり少し違います。

### 四、『低地地方』

フランスの子会社からルクセンブルグ、ベルギーを通じて運転して帰ってくると国境にフランス語圏の看板でオランダを表す『Pays Bas』。ペイバ。PaysはCountry、BasはLow、文字どおりフランス語でオランダはLow Country『低地の国』なのです。

### 五、『王家』

この低地地方は封建制や領主制が根付かず自由農が多く、宗教的にもプロテスタントで、カトリックの保護者の神聖ローマ帝国の跡継ぎスペイン王フェリペ二



風車

世と80年戦争に突入しました。

その後独立し共和国になりましたが、この時私財をなげうって戦ったのが当時の総督オラニエ（オレンジ）公ウイレム一世。現在の国王のご先祖様です。オラニエ家の国王就任は、神から与えられた王権として君臨する（王権神授説）のではなく、全国議会で承認されて国王になったのですから、ヨーロッパの他の国とは成り立ちがずいぶん違います。ちなみに、オランダ人が最も熱狂するスポーツ・サッカーのナシヨナルチームの名前はオラニエ、チームカラーはオレンジ色。国王は自分たちが選んだという、他には無い歴史感覚です。

## 六、『自由・平等の国』

アパートに入った時に小さな男の子が住んでいました。オランダ人のおばさんが、『あの子、お父さん二人と暮らしてるの…』と。最初なんの事かわかりませんでした。しばらくすると似たような光景を多く目にする様になりました。この国は同性婚の天国だっ

たのです。

最近、スピーチをすると、オランダ人の社長が来て、『Ladies and Gentlemenの挨拶はこの国ではタブーになりつつあります。』と言うのです。なんと、中間の方達に対する差別だとして、『Dear Guests』などの方が良いそうで、アムステルダムなどでは男性用、女性用と並んで、二つのマークの半々をくつつけた第三のトイレが出てきています。オランダ、やっぱり変です。

不思議の国に来てすでに7年半が経ちました。ドイツ、ハンガリー、フランスにもよく仕事で行きますが、皆、それぞれに違います。アメリカなども全く違い、それぞれに歴史・文化が違いますのでなかなかまとめる事は難しいと思います。反EUの動きも出てきており、四半世紀前にこの街で結ばれたマーストリヒト条約をもとに創設されたEUもきしんでいます。しかし何とか乗り越えて、日本の良き友人としてのヨーロッパの平和と安定が続くことを切に望んでいます。

令和元年 夏 マーストリヒトにて

（氷上町出身 イーグル工業株式会社勤務）

# 究極の碁——郵便碁

足立 正（豊島区）

「日本郵便碁愛好会」は、一九六六年（昭和四十一年）創会です。

故、井村寿二氏（勤草書房社長）は、自らを、コードNo.一番として順次入会を受入れ、以来五十三年、全国的に入会者が増加、直近の入会者は、二二五三、になつていきます。私はコードNo.一一〇四、です。日本棋院で四段の免状（一九八二年）を頂いたころ入会しました。

入会時は新人戦の対局をしながら、会員中から、昭和八年生れをより出して「昭八会」を作り（北は秋田県から、南は長崎県まで、二十一名）同年生れの対局を楽しみ、更に時には、懇親碁会を催して一泊旅行なども楽しんでいました。多いときには十数名と対局していました。

郵便碁はかなり古くからあつたようです。明治に郵



便制度が出来る、愛棋家の間に郵便碁が現れております。郵便碁の長所として

(1) 「ヨミの訓練、写譜の習慣、述語の習得↓高級碁人への道。これらは郵便碁を対局しますと、打碁の場合と違って、いやでも養われてきます。したがって棋力の向上に効果があがることはいうまでもありません。

(2) 「打碁と違った楽しさ」百聞は一見にしかず、実際にやってみてはじめて分かります。

(3) 「忍耐心と信頼感」郵便碁は終局までに最短一



年半から二年以上かかります。根気、忍耐力が肝要です。フェアプレーと、相互信頼以外のルールは不要です。

(4)「友情の育成」郵便碁を通じての碁友との交流は何物にも代え難い友情を育みます。

今から十四年前、私七十二歳の時、脳梗塞になりました。日大板橋病院に入院。一ヶ月の入院の後、一ケ年半、月一度の通院を余儀なくなりました。その後は近所の医院に月2回通って受薬、加療を受けています。いはば半病人ですが、一時中やめざるを得なかった郵



間と東北旅行を楽しむことが出来、この時は八戦して五勝三敗と先ず先ずの成績で、かなり自信をつけました。思っていたよりも長く生き、又これからも先、何年生きられるかわかりませんが、郵便碁がある限り楽しく生きていられます。これこそ正に「究極の碁」、私にとってはそのように言っているのではと思っております。

(氷上町出身／昭和七年生)

便碁を今は四名と各四局づつ、十六局を対局継続中です。入院中からとに角ハガキが書ける様になることを第一義として一心にリハビリを続け、割合早くに書けるようになって何とか継続にこぎつけました。四年後には仲



# 朝食後の歯磨きはダメ!?

## 正しい歯磨きの方法

形田恒夫（横浜市）

ラジオ番組にて、「間違いだらけの歯磨き習慣！あなたはいくつ間違えている？」と題して、正しい歯磨きの方法が紹介されました。

歯磨きについては、時代とともに種々の方法が案内されています。例えば歯に対して上下に磨く、歯周病を防ぐために3〜8分間歯を磨く、歯垢を残さないために歯間ブラシの使用を習慣化する等々。過去色々な方法を薦められましたが、ここからはラジオで紹介された「歯磨きのテクニク」ではなく、「歯磨きの習慣」について案内させていただきます。

医療などの技術の進歩により、一般的な習慣が間違っていると指摘されることがある。

- (1) 食後には、必ず歯磨きをしている。
- (2) 食後30分以内に歯磨きすることを心がけて

い。

(3) 朝ご飯を食べた後に歯を磨いている。

(4) 歯ブラシは濡らしてから使っている。

(5) 歯磨き後のうがいは何度もしっかり丁寧にやっている。

これらの歯磨きに関する習慣は、すべて間違っており、やってはいけないのだという。

ラジオ番組内では、それぞれの習慣に対する正しい方法が紹介されました。

(1) 「歯磨きは毎食後にするべからず。」

食後は消化を助けるために唾液が大量に分泌されており、口腔内にとつてはもつとも細菌が減っている状態。そのため、歯磨きをしてしまうと唾液の分泌を抑えてしまい、かえって細菌の増殖を手助けする結果になってしまうという。

(2) 「食後30分は歯を磨くべからず。」

食後すぐに歯を磨くことはせつかくの歯を傷つけてしまう危険性がある。よく言う「食後3分以内」という時間制限は誤り。食後すぐの口の中は酸性になっており、それが唾液で徐々に中性に戻っていき、ほぼ30

分後に安定するのだという。

(3)「朝の歯磨きは、朝食のあとにするべからず。」

唾液の分泌が少ないのは就寝中で、口腔内にもっとも細菌が多く、毒素が多いのは起床時であるという。

そのため、朝起きたらすぐに歯磨きをし、口の中にもまった細菌を洗い流さないと不潔で、口臭の原因にもなる。朝食後では、口のなかで増殖した細菌を全部のみこんでしまった後になり、体に良くないとのこと。

(4)「歯ブラシは濡らしてから使うべからず。」

濡らしてから歯磨き粉(？ハミガキ)をつけると泡立ちがよくなり、十分に磨けていないにもかかわらずさっぱりした気分になりやすいといわれる。泡立ちよりも、しっかりとしたブラッシングが大事であり、あまり濡らすのは得策ではないという。

(5)「歯磨き後のうがいは3回以上するべからず。」

初期の虫歯を予防し、進行を抑えるのに有効だといふことで、ハミガキにフッ素が入ったものが販売されている。だが、歯磨き後何度もうがいすると、フッ素が残らないため、うがいは2〜3回にとどめるべきであるという。

1日の歯磨きは起床時と就寝時の2回で十分であり、食後に口の中が気持ち悪かったら軽くうがいするだけで充分であるとのことである。

以上がラジオ番組の内容です。

一方今年二〇一九年五月八日のNHK「ガッテン」(虫歯リスク激減!! 新磨き法)の番組でスウェーデンのイエテボリ大学の50年に及ぶ実証が案内されました。その結果は、70歳代までの虫歯治療がほとんどないと言ふものです。歯科では虫歯治療ではなく、歯のケアがサーピスの中心であります。もしイエテボリ大学の歯磨き方法を日本で実行していた場合、日本の歯科治療は30%以下に、入れ歯は20%以下になるのではないかと思えました。

その歯磨き方法とは、歯ブラシに歯磨きを筒状に2cm程度載せ、通常のブラッシングを行い、最後に口から絞り出すように泡だったハミガキを唾液と共に吐き出し、口のまわりを水で洗っておしまいという方法です。大切なことは、水ですすがないことです。理由は水ですすぐと1回でフッ素が70%流出し、2回で80%が流出し、3回で90%が流出するからです。

まとめると①ハミガキはたっぷり使う。②フッ素

を口の中に残す。③磨いた後は30分以上飲食しない。

④12歳以下の子供は対象外。

虫歯予防には、3ヶ月毎歯のケアが有効とのこと  
です。

実践編 私自身も早速実行してみました。最初は  
少し違和感がありましたが、すぐに慣れました。今後  
の結果が楽しみです。

「皆さん歯のお手入れをお忘れなく。」

(山南町出身/70歳)



撮影・岡田昌子

## 「東京オリンピック」 「2020パリオリンピック」に 夢をかけた二人の女史

足立 敏 晤 (茅ヶ崎市)



1964年アジアで初めて開催さ  
れた東京オリンピックは、戦後の日  
本が世界へ向けて飛躍していく中で  
も、確固たる地位を築いた象徴とさ  
れた。それ以後、名古屋市、大阪市が開催地に立候補  
するも、いずれも落選し日本での夏季オリンピックの  
開催は実現しなかった。2020年の開催地は、四都  
市が立候補し最終的にトルコのイスタンブールと東京  
都の両都市による決選投票となり、東京開催が決定し  
た。この報を受け日本開催を心から祝福し、日本人の  
開催能力を高く評価する著名な二人の女史がいた。ひ  
どりは1964年の東京五輪体操競技で「五輪の名  
花」とうたわれた「ベラ・チャスラフスカ」であり、



もうひとりとは前駐日米国大使「キャロライン・ケネディ」の二人であった。

1 ベラ・チャスラフスカにとって見果てぬ夢になってしまった「東京オリンピック」

2020年の東京五輪開催が決まった時、チャスラフスカは、現役当時を懐かしむかのように、次のように述べている。

「1960年のローマから東京、メキシコシティーの3つの五輪に出場しましたが、環境面でも東京は群を抜いていました。すべてが計画通りに進行し移動や練習、本番でストレスを感じず競技に集中できました。今回は福島第一原発問題が解決しない中で、東京での五輪開催が決まったのは、やはり日本が一番

安心できるからです。目新しさより確実さが求められたのです。五輪は、単なるスポーツの祭典ではなく、開閉会式は技術や知恵の見せどころだし、

施設や交通手段、おもてなしも開催国の力量がためられます。東京がどこまで人間の限界を見せてくれるか楽しみです」

と大きな期待と夢を語っていたのです。ところが運命のいたずらのように、彼女は残念ながら2016年8月30日、楽しみにしていた東京五輪を見ることなく天国へ旅立ってしまった。日本人の心を深く理解し、半世紀近く日本を愛し続けてくれた彼女の期待に、東京五輪はあらゆる困難を克服し成功に導かなければならない。

なお、チャスラフスカが五輪3大会の女子体操競技で獲得したメダル総数は、金7個、銀4個に達し、2010年には日本国の秋の叙勲（外国人叙勲）で「旭日中綬章」を授章している。（享年74歳）

2 キャロライン・ケネディが夢翔ける2020パラリンピック

キャロライン・ケネディは、故・ジョン・F・ケネディ大統領の長女で、2013年11月から2017年1月までの間、駐日アメリカ大使を務め任期中には、



2016年駐日アメリカ大使当時

オバマ前大統領による歴史的な初めての広島市訪問を実現に漕ぎつけ、駐日大使として各界との親善に努めるなど尽力した。東京五輪開催決定の時、その彼女が、日本の力を世界に示す絶好の機会になると、次のように述べている。

「わくわくしています。私が心から愛している日本のあらゆるものに、世界の人々が接することができる機会となるのですから。それは思いやりがあつて、おもてなしの心をもった人々であり、信じられないほどに効率的な公共交通システムであり、清潔で安全な市街地です。そして日本の食事もその一つです」

と高く評価している。ケネディ家は、心身に障害を持つ人々の生活の改善に、何十年も取り組んできた。日本がオリンピックとパラリンピックのホスト国とし準備を進め開催することは、障害を持つ人々の権利をいかに支えているかを、世界に示すよい機会になると、

次のように述べている。

「日本は、技術革新の分野で、国際社会のリーダーであり日本が誇る最新鋭の技術や優れたデザインを利用すれば、障害を持つ人々も日本のすべての良さを十分に楽しむことができるはずだ。日本は、そうした新たな可能性を、オリンピックとパラリンピック開催を通じて、世界に示す最高の舞台になる」と述べ、特にパラリンピックの開催に大きな期待をつないでいる。いよいよ来年夏に迫った両オリンピックには、是非とも元気に来日し平和の祭典を見届けてほしいと願うのは、日本国民にとって大きな夢である。

### 3 おわりに

前回の東京オリンピックは、開催決定段階から、国中挙げての熱気と期待感があつた。日本武道館の新築、故・丹下健三設計にかかる斬新な設計の代々木体育館の新築、あるいは夢の超特急・東海道新幹線の東京〜新大阪間の全面開通等国民が期待を抱く大プロジェクトがオリンピック開催に向けて同時進行し、すべて開催までに姿を現した。

その時に比べ、今回はオリンピック開催決定後、予期せぬ出来事がありにも多く発生した。一旦、決定した新国立競技場の設計取消しとコンテスタのやり直し、エンブレム（象徴）決定後に起きた盗用騒ぎと再募集、さらに東京都知事が二代続けて辞職交代する等開催へのスタート段階で出端をくじかれる出来事がありにも多過ぎた。

国民生活が成熟しその志向も多様化した現在、以前のように国を挙げての熱気はまだ感じられないが、律義な国民性ゆえ、開催までに各施設が完成すると信じている。

第32回オリンピックが日本で開催されることになって、一番安堵しているのが、他ならぬIOC（国際オリンピック委員会）ではないだろうか。世界の主要都市で多発する爆弾テロ、自爆テロも惹起することなく、治安が最も安定している「東京都」を開催地に選んだことに、名状し難い日本への安心感と信頼感があるように思えてならない。その意味からも残り少なくなつた準備期間を最大限有効に生かし、二人の女史が期待してくれたように、平和に満ちた世紀の祭典が無事開

催されることを期待してやまない。

「山ざる誌」は、記念すべき創刊第五〇号を迎えられたが、関東に在住する丹波市出身者にとつては、紅葉する秋が待ち遠しい同人誌であった。これからも「山ざる誌」が故郷・丹波を同じくする者の心の「絆」であつていただけるようお願いつゝ、記念誌第五〇号刊行のお祝いを申し上げます。（文中敬称略）

（昭和17年生 青垣町出身）

## 東海道6日間自転車旅②

平成30年1月25日～1月30日

廣内喜彦（大阪府摂津市、在京時江戸川区東葛西）

6. 最大の難所 箱根越え 1月29日（月） 晴れ

目覚めは午前6時前、そろそろ起きだそうか、と大きく背伸びをした瞬間、昨夜飲み残したお茶の入ったカップを直撃。床が水浸し。眠気も吹っ飛ばす。

午前8時10分 ホテルを出発し、興津宿を通過、海



箱根峠途中の上り坂

岸沿いを走る自動車専用道の静清バイパスを避けて、別に並行して作られている側道を走る。今は、一般道は海沿いを通り薩埵(さつた)峠越えはしないが、昔は箱根、薩埵、鈴鹿峠と三大難所だったとか。由比に入る手前で、初めて富士山が顔を出す。晴れた空にやはり富士山は美しい。細い道と切り立った山肌が昔の情緒を醸し出す由比宿。急な崖の斜面には、八朔か柑橘類の黄色い実が青空に際立って美しい。昼後、沼津のマクドナルドで昼食、普段ではまず行くことがないが、タイミングを外すと昼抜きになりかねない。午後からは、この旅の最難関箱根越えがある、エネルギーも蓄えておかねば。

平坦な道を三島まで走り、いよいよ箱根峠入り口に辿り着く。午後1時過ぎ、車一台が通るくらいの細い山道から始まり、すぐに東海道線の踏切を越える。石畳みの坂道が続く、愛宕坂との案内板が立っている。こんな道が続く

のか、と心配になるが直ぐに整備された国道1号線と合流し上り坂が延々と続く。午後2時、坂の途中の道路案内板に「箱根 12 km」の表示が出る。

一般道なら1時間も掛からずに十分に走り終える距離だがここは上りの峠、気力、体力ともに落ちてきており乗ろう、という気が起きない。殆ど漕げずに押し上がっているが時速で5 km前後。ところどころに「箱根旧街道」の脇道の表示があり石畳もあるがとても入っていく時間の余裕はない。途中に山中城跡と大きく案内が出ている。休憩も含め立ち寄ることにする。「日本百名城」と謳ってあるが殆ど見ることなく自販機で清涼飲料水を買って出発。上るにつれて、残雪が気になってくる。車道の雪は溶けているが、歩道には10 cm以上の雪が誰にも踏まれることなく薄汚れて残っている。仕方なく、車道の端を押し上がるが、ひっきりなしに車が上がってくる。

「箱根 12 km」の道を何時間掛かっているのか、自分の不甲斐なさに苛立つ。もうそろそろ箱根峠に着いてもいいところだ。午後4時30分焦りだしたところ、「神奈川県」「箱根町」「箱根峠 846 m」の縦三枚の道路



案内が目に入った、助かったというのが正直な気持ちだった。しかし、前もって調べたところでは、この後、元箱根まで下ってまた上りそのあと一気に小田原へ下りていく、まだもう一つ上りがあることになる。休むことなく元箱根まで駆け下る、そんなに下るな、その分また上りがきつくなる、と祈る気持ちでハンドルを握る。元箱根も残雪が店の隅や空き地に積み上げられ寒々しい光景だ。暫く平坦な道の後、案の定きつい上りに差し掛かる。とても漕ぐ気力はない、ただただ俯いて押すのみ。思った以上に上りが続く30分は押し上がっただろうか、見えてきた「国道1号線最高地点874m」の看板、ネット上でも見た見覚えのある看板、焦る気持ちを抑えて写真を撮る。午後5時過ぎ、山頂だから、まだ薄つすらと明るさが残るが直ぐに暗闇になるだろう、と急いで下りにかかる。

冷え込みが半端じゃない。道中つけてきた厚手の手袋も、冷たい風を受けて手がかじかんでくる。上り坂は胸を開けて汗かいてきたが、今までかいた汗が、急に冷え込みゾクつとする、胸のファスナーを開けた儘なのに気がついた。道端で「凍結注意」の行灯式のサ

インが点灯する。路面は、所どころ昼間に解けた雪水で濡れて光っているが、水か氷か判別できない。しかし、走りかけてその速度にとっても止める気が起きない。辺りは完全に暗闇になり、時たま行き交う車のライトが瞬時の灯りになるが自転車のライトは、前照灯の役目はほとんどせず、対向車への所在アピール程度だ。下りの勾配が、予想していた以上にきつく感じるの、暗さのせいもあるのかもしれない。瞬間の灯りで見えるサイクルメーターの速度は24〜25km/h。もつと速度がでているように感じる。夜道にこれ以上のスピードは危険だ。正直、正常に運転できているのか自信が持てない。暗闇に吸い込まれるような錯覚に襲われ興奮と恐怖が交錯する。死ぬとはこんな精神状況の先にあるのか、そんな思いが過る。幾度かのカーブをブレーキで減速しながら下るが、冷えて手が痺れブレーキのかけ具合が分からない。しっかり握っているつもりでも加速してくる。箱根の大学駅伝で毎年継続地点になる大平台のヘアピンカーブはすぐに分かった。TVで見ると遥かにキツイ急勾配に、肩と腕に力が入る。とにかく早く下り終わりたいとの思いが強



平塚駅前 コンビニで朝食

まってくる。大平台を過ぎて三つ目か、四つ目の大きな右カーブで、上り下りの車の通行が途絶えたのをみて、自転車を中心ターライン側に寄せ、少しでも距離と時間を稼ぐつもりだったが、これが大誤算になってしまった。

センターラインに埋められていた「くの字」型の金属に乗り上げて制御不能。

バランスを崩して身体が宙に浮いた。左を下にドンと落ちるのが分かった。

身体全体に受けた鈍い大きなショックで、そのまま少しジツとしていたかったが、道路の真ん中、手足は動くので自転車を起こし道端へ移動する。

深呼吸すると左胸に痛みが走る、自転車のハンドルで胸を強打したのだと思うが自転車には乗れる。ホツとする間もなく、早く下山せねば、との思いに駆られ自転車に跨る。またチェーンが外れたが、下りなら漕ぐこともないので惰性で下る。さすがに、スピードは



海比由の峠(さった)薩埵が後方左から富士山を見る

たかと思つたが幸い異常なし。助かった。このまま漕いで行ける。後は今晚の宿、小田原のビジネス旅館へひたすら漕ぐ。

午後5時の到着と伝えていたが、もうとつくに過ぎている。冷えた体には箱根湯本から小田原市街の距離は実際より遠く感じる。小田原城近くの目指す旅館を探し当て遅い到着を詫げる。食事の付かない旅館なので、近所の食堂で新鮮な魚をあてに熱燗を飲みながら、今日あったことをしみじみと思い返す。夜間は走らない、と決めていたが、走らざるを得ない結果になった。さすが天下の嶮、やはり計画が甘かったか。

昨日までは概ね予定通り順調に走れてコースを軽く見始めていたツケが回って来た。好事魔多し。

走行距離 99 km 実乗車時間 7..59

## 7. 胸の痛みと尻のヒリヒリを抱え めざす日本橋へ

1月30日 (火) 晴れ

昨晩は、強打した胸の痛みで、寝返りや咳もままならず、何度も目が覚めた。

だが今日は日本橋に到着する日、気を引き締めて起きます。午前7時30分、この旅で一番早い出発。夕方には、丹波の同級生が日本橋で迎えてくれるとメールがあった、遅れるわけにはいかない。

今まで尻に違和感を覚えたことが無かったが、今朝はサドルの上でヒリヒリと痛む。尻の位置を左に右に変えながら漕いでゆく。酒匂川を越え大磯町駅前のコンビニでパンとミルクで朝食を取る。同じ店にいた自転車好きとみえる30代の男性に、自分の写真を撮ってもらうが、道中で自分が写っている写真は一枚だけ。平塚を過ぎ、藤沢宿へ、詳しく宿場のようすを描いた案内板が整備された傍を通り、遊行寺の坂へ向かう。

坂の途中にお寺さんがあるので参拝、というよりトイレ休憩。ここ遊行寺の坂も箱根駅伝では必ず中継される地点だが、特に特徴のある坂ではない。

戸塚駅で道は自動車専用のアンダーパスになり、人、自転車は陸橋へ迂回。

自転車は陸橋に押し上げた折、普段感じることにない軽いめまいを感じた。

エネルギー切れか、疲れか、それとも歳か。丁度昼時、道沿いにあったラーメン店で昼飯にする。栄養を付けねば、と普段は食べないチャーシュー？ を注文、汁まで啜り冷えた体も温まる。東京まであと40km程。

国道15号線(第一京浜)に入り、午後2時鶴見区生麦の辺りで「東京 24 km 品川 17 km 川崎 5 km」の案内板が出てくる。このまま行けば午後4時までには到着できる、予定の見込みが確信に変わる。到着時間を聞いてきた同郷の友達には午後3時半から4時頃までには着くとメールをする。

川崎を通過し、六郷橋を渡り、いよいよ東京都。何度も通り慣れた道だが、自転車は初めてだ。JRを跨ぐ新八ツ山橋を渡り、品川駅前、泉岳寺、銀座の大通

りに入っていく。さすがの人通りの多さと、場違いな乗り物に身を小さくしながら車の間を縫うように、8丁目から1丁目まで駆け抜け、高速道路の高架下に着くが、日本橋ではないのか橋も川もない。高架下にある交番のおまわりさんに尋ねると、「この先……」と不愛想な応えが返ってきた。ここは京橋や、ボケと馬鹿さ加減を痛感しながら数キロ先の日本橋へ急ぐ。

人通りのまばらな日本橋の袂に、四五人の塊がこつちを見ているのが遠くからでも見えた。ごめん、ありがとう、勝手な我儘に付き合ってもらって。

危険な思いもしたが、どうにか無事、念願の東海道の旅を終えることができた。

走行距離 91 km 実乗車時間 6…30

## 8. 終わりに

「無事到着できて、よかった、よかった」と我がことのように、親身の労いの言葉をかけられ、本当に安着できてよかったと実感する。

同郷の青木君夫妻、吉見君、藤田君には、寒い中を日本橋で、待ってもらい、その上、レイや「祝完走」



郷里の友達に迎えられて日本橋 到着！

も、心より御礼申し上げます。とさせていただきます。

文末になりましたが、小物の防寒具や衣類を買い揃え快く送り出してくれたカミさんと全行程を機嫌よく走ってくれた自転車に、心より感謝し、又の走りを楽しみたいと思っています。

(昭和22年生まれ 市島町出身)

の記念のタオル横断幕を用意して、クラッカーまで鳴らして祝ってもらったこと、また、翌々日には同郷の友で高校時代からの旧友、塚口君、木村さんも交え新年会を兼ね完走祝いをしていただいたこと、また、旅の途中にメールで声援を送っていただいた旧友に

# 私の職場

万年筆と寫眞のある書齋 ユーロボックス

藤井栄蔵



パーカーの創始者の曾孫  
ジェフリー・パーカー氏と店頭で。

## 万年筆の 駆け込み寺

万年筆を日常的に使っている人は意外と少ない。私はその万年筆にどっぷり浸り、万年筆に生かされて生活をしている。さりとて私は物書きでも作家でもない。

私は東京銀座で万年筆を扱う小さな店を営んでいる。万年筆という丸善や伊東屋が頭に浮かぶが、私の店は少々風変わりな店である。ひねくれているようだが、今時の文房具店に並んでいる万年筆は置いていないのだ。中核となっている商品は一九〇〇年代初頭のヴァインテージものや巷では見かけなくなった廃番品が大半である。珍しいものとしてはダンヒル・ナミキなどの時絵万年筆も重要な一角を占めている。言葉を交えて言うなら、コレクター魂をくすぐるこだわりの万年筆とでも言えようか。

銀座に店を構えて今年で十九年になる。出店時には、一・扱いはヴァインテージ万年筆に絞る、二・使

えるように整備をして販売する、三・個人的に万年筆は蒐集しない、という三つの原則を立てた。

仕入が難しいヴァインテージ万年筆が主要商品では店が立ち行かないのではないかと仲間は心配した。なぜなら、世界のどこを探してもそのような店はほとんど存在しないからだ。案の定心配は的中した。しばらく苦労が続いたが、自分としては心の隅に、ヴァインテージ万年筆という小さな世界を引き寄せることはできるのではないかという自信と希望があった。

思いは通じるもので、数年後には文具専門の雑誌に私の店の記事が採り上げられヴァインテージ万年筆が徐々に注目されるようになった。

メーカーや文具店にないものを一体どこから仕入れるのかという疑問があるのは当然だ。大部分の商品は年四〜五回ヨーロッパや北米のペインシヨールに出かけて買付けている。

仕入が肝心要で、店の存続は仕入にかかっていると云っても過言ではない。

いつも、新たな万年筆との出逢いを想像しながら胸をわくわくさせ出かけるのであるが、わくわく気分とは裏腹に思い描いたような買付けができないこともしばしばある。

催しの規模は北米のペンシヨールが最大で、ヨーロッパの場合はこちら



2007年 北米シカゴ ペンシヨールの様子。

まりとしたペンシヨールが多い。ワシントンDCやロサンゼルスなどの大都市でのペンシヨールには世界各国のディーラーが一同に集まる。数万本の万年筆が所狭しと並ぶ景観は圧倒的で実に壯観である。会場ではコレクターやディーラーが入り乱れ、我先にと走り回って万年筆を買い漁る。ちよつとよそ見をしようものなら、たちまち良い物は持つて行かれてしまふ。まさに時は金なりである。

ペンフレンドとの挨拶は手短に済まし、とにかくザッと足早にひと回りするのがコツだ。そして次に、一本一本吟味しながら欲しいものをじっくりと探して回る。

お目当ての万年筆を見つけると、「あの人がこれを見ると目の色を変えて喜ぶだろうなあ」とニンマリするのだが、当てが外れてしまうこともしょつちゅうだ。

仕入と言えば、私にとつて思い出深い出来事が一つある。数年前、一

九六〇年代末にドイツの首相を務めたワイリー・ブランドが日常使いにしていたというパーカーの十八金製ボールペンに出くわし購入したことがある。びっくりして胸の高鳴りを覚えたものだが、このようなことは求めても叶うものではなく、めぐり合わせというしかない。後にそれを知ったドイツの友人が悔しがったことは言うまでもない。

個人的にコレクターの自宅を訪れ直接仕入れることも度々ある。たいていの場合、部屋にはこれでもかというくらいに万年筆や部品と周辺グッズが並び、その様相はさながら筆記具博物館のようでもある。

一口にコレクターといつても百人百様、彼らの興味の的はそれぞれ異なる。モンブランやペリカンひと筋のコレクターもいれば、ある人は名もないマイナーな万年筆をコツコツと蒐集するといった具合で見ている面白い。



ダンヒル・ナミキ万年筆 1932年製

ペンショーの会場とは違い競合相手は誰もいないので、お茶を戴きながらじっくりと品定めができる。気の置けない長年の友人宅でくつろぎながら流れるゆったりとした時間は、普段慌ただしく過ごしている私にとって心が癒されるひと時でもある。こうして新しく仕入れた万年筆を持ち帰ると、次には整備の仕事を待ち構えている。分解洗浄を行い、更

にはペン先を調整してから店頭に並べるのだ。ヴィンテージ万年筆に修理は付き物でこの仕事の宿命である。驚くような話が舞い込むことも稀にある。マリリン・モンローやベーブ・ルースが来日した際、サイン用として使用された万年筆の修理話を持ち込まれたのにはびっくりした。「親の遺品なので修理して使いたい」という話も結構多い。納品が済むとお礼の葉書を戴くことがあるが、この仕事をしていて一番嬉しさを感じるときである。

営業面積五坪半というちっぽけな店だが万年筆の世界では認知されるようになり、今では海外から来店する好事家も珍しくはなくなった。思い返せば、最初に立てた原則を貫いたことが良かったのかもしれない。二十歳で一念発起して東京へ出てきて以来五十年、山あり谷あり、決して平坦な道ではなかったが自分なりに地道に歩んできた。

いつまで続けられるかわからないが、万年筆の駆け込み寺として頼られる限りは続けていきたい。そして、万年筆の素晴らしさを広めることに少しでも役立てればそれ以上嬉しいことはない。

私を支えてくれた家族、父母には心から感謝している。

(山南町出身)

万年筆と寫眞のある書齋

ユーロボックス

〒一〇四一〇〇六一中央区銀座一―九一八

奥野ビル四〇七

TEL: 〇三―三五三八―八三八八

Email: info@euro-box.com

URL: www.euro-box.com

営業日: 月曜・木曜・土曜

営業内容: 万年筆の販売・買取・修理・鑑定



俳壇……………

九十六歳の夏、「寿命は盡きた」と思いつつ、  
数多の支柱による今日にて、息子夫婦や娘と熱海  
峠を越え富士山麓へ行つて参りました。

久呉 道子（熱海市）

皇居へと令和言祝ぐ旗五月

竹林の朝日の透けし竹の秋

湯の町に尼僧の下車や彼岸入り

翡翠の一直線や水しぶき

ぜんまいのの字擡げし麓かな

ゆく春の鷗群れるる有磯海

葉桜の吉野を歩く若き日よ

花辛夷丹波の山に咲く頃か

※

昭和二十年から二十五年まで少年期を過ごした  
丹波である。平成から令和へ代わり、感覚的には  
丹波は、ますます遠くなった。その思い出をたく

り寄せて五句。

故郷たぐり寄せ

金子 徹（富士市）

どの家も雑煮のけむり茅葺の屋根  
征ったきりの兵士の墓地よ蟬の穴

水汲めば夏鶯の声しきり

初恋の彼の日は遠し蚊帳吊草

藤椅子も父も戦後も遠き揺れ

※

有名人や近辺の人達が次々と去つてゆき、自身  
も残る命を如何に処するか、思案に惑うこの頃で  
す。

藤原 保（府中市）

酒無くて 何のこの世か 蟬日暮

遊ぼうよ 遠くて近き 星たちよ

来し方や 悔恨という名の 山多し

いわし喰う 海のとむらい 聞きながら

腰痛も 生きてこそあれ 爛の酒

落葉踏み 落葉踏み踏み 一休み

未知の旅 闇かエデンか 測りかね  
戒名は 無くてよろし 彼岸花

※

御代が替わりました。昭和が遠くも蘇ります。

荻野 哲男 (狭山市)

さみだれに木樹うゑ令わしく和やかに

秋桜が空家の庭に揺れて咲き

茶畑の茶の葉に白く冬の霜

うぐいすの声を聞かずに春は行く

かき氷行列を見る五月かな

※

空き家は全国的な社会問題として取沙汰されて  
いますが、私の住んでいる板橋区も例にもれませ  
ん。

阪上 勝朗 (板橋区)

冬帽子脱ず居並ぶ碁席かな

みずなりし邸の軒の花石榴

豆ご飯茶碗の縁まで薄みどり

※

私たちをとりまく山々の樹々が、材木として活  
躍する日が、再び訪れることを期待して暮らして  
います。

大野 昶 (俳号・沙年) (丹波市)

永らへて自戒込めたる初詣

耕へ駆りたてらるる陽気なる

入船てふ駿よき山よ樟若葉

戦たたかひを知らばこそ生きて八月尽

冬めくや鐘撞堂に時計鳴る

うらら日や化石を捜す子と親に

※

二月の結婚記念日に下田に一泊しました。

藤田 玲子 (入間市)

朝焼けの波に移りて広がりぬ

窓辺に立ちて潮騒を聴く

水仙の群れ咲く浜に二人立ち

二月の旅を幸いと云う

赦されて赦して生きる愛の道  
夜半のめざめにペテロの涙  
白木蓮花のみ揺れいて我は知る  
霊という名の風あることを

※

読み返してみると、夜の情景が多い。会社勤めを辞めてもう十数年になるけれど、夜出かける方が落ち着く。夜遊び婆さん朝寝坊の日々(笑)。

上田 道代(目黒区)

友ひとり切り捨てて 八月の蝉  
あの瞳 あの笑顔 あの声も 今 棺に入る  
骨拾う音カサカサと 霧の朝  
新月や うしろの足音ふと消えて  
夜ひらく花 ほの白く 風初秋



撮影・原谷洋美

詩 座……………

年賀状

上 高子（世田谷区）

子どものころ、毎年母の元に届く年賀状を見るのが楽しみだった。

大抵はパターンの年賀なのに、一人だけ際立って個性的な文面があった。

まだアメリカの統治下にあった沖縄を旅し、基地の多さに驚いたという感想など。

子ども心に「格好いい！」と思ったものだ。

この人は母の初恋の人だった。父は私が小学二年生のとき亡くなったので、

年賀状が届き始めたのは、父の死を伝え聞いて、ということだったろう。

住所は東京。丹波から遠い憧れの都会とこの男性の存在に、少女の夢想は膨らんだ。

苦労の多かった母にとっては、密かな楽しみだったと思う。

私も家庭を持ち、爾来年賀状を書く時はパターンを避け、なにがしかエッセイ風にしてきたのは、その人の影響にちがいない。

五十枚の年賀状を読み返すと、その時々々の心象風景を思い出す。

時には望遠レンズで、あるときは顕微鏡の目で、長く、短い人生を振り返る。

彼の人も母も、遠の昔に鬼籍の人となり、私は当時の母の年齢をはるかに超えた。

母と違い、いかにも密かな交信とは縁遠く、早や終活に心傾ける後期高齢者に。

近頃はとみに、過ぎ去りし丹波での日々を懐かしく思い出す。

枯れた心からはほど遠い、つたないおのれを覚えて悲しんでいる。

歌壇

一年があつと言う間に過ぎて行きます。息子と娘との三人暮しも六年になりました。先の見通したたなくても其の日其の日が無事ならいいと米寿になつて悟りました。

足立 美都子(春日部市)

週一度のリハビリ通い友と会うを楽しみと

して過ごせる老後

十五分自転車漕ぎつつ窓の外眺めておれば棕

鳥の群

気短かになりたる我の苛立ちの捌け口とされ

猫は戸惑う

軽々と三段跳で棚の上へ部屋見下して安らぐ

か猫

猫なれど五年もすめば何となく人の言葉を理

解するらし

※

昨年冬に妻を見送り、心の中にポツカリ穴の空いた日々を短歌や俳句を詠みながら埋めていきます。

荻野 哲男(狭山市)

逝く時の残す言葉を考えて一人せつなく枕を

直す

こと切れし妻の酸素がはずされてベッド枕に

ぬくもり残る

手さぐりに薬箱のふたを締め最終列車の音聞

き眠る

屋根裏に子すずめの待つ親すずめせわしくエ

サをついばみて行く

妻逝きて一人暮らしに慣れたけど夜の食卓せ

つなく思う

※

「ラジオ深夜便」を聴くたび、郷友上野重喜氏の温顔とおだやかな語り口が思い出されます。それでなくても、七回の干支を送った身になりますと、やたら古いことがなつかしく、これではいけ

ないと己を叱咤しているこのごろです。

坂上 勝朗 (板橋区)

灯を消して夜学の当番終えるとき月の光の霜  
かで見ゆる

久々に「深夜便」を聴き居れば来しかたその  
み追っている吾

豆飯のときはせめても白ご飯割烹着の母の美  
しかりし

※

軍医の父は私が生まれて六か月の時に出征。それから二歳の時にも二回目の出征。昭和十七年の四歳の年は、軍医学校の教官で東京に帰って、その後また出征。以降終戦引き揚げ後やっと一緒の生活がこの地で始まりました。

木呂子 恵美子 (清瀬市)

平成の初めに逝きし夫愛でし梅満開す御代の  
終りに

蠟梅に梅木蓮姫りんご花樹木に満ち令和祝う  
や

朝あけて庭の梅の木光りおり小さきつぼみに  
雨粒のせて

激動の時経て御代の終る時来る代の平安沁み  
じみ祈る

幼き日征く父と来た公園は今孫の住む井の頭  
あたり

※

歳を重ねてきたからでしょうね、四季おりおりの郷里のことが蘇ってきます。ほんの一部ですが詠んでみました。

山本 述子 (三浦市)

幼きに菜種がら持て螢追ふ溝に草履を濡らし  
たりして

蚊帳のうちにほたる放ちて夜更けまで団扇な  
どにてたはむれたりき

妹らと桑の木に群れ「ふなめ」食む赤紫に唇  
染めつ

稲刈りや稲扱きなどに汗流し夕餉は新米混ぜ  
御飯なり

その秋に使ひし鎌や稲扱き機供へられをり新米飯を

老父母に谷川駅で見送られ涙溢れり新幹線で

※

父逝きて二十年、母は十年、そして親しい友との別れを体験し後期高齢者のスタートラインに佇み憂う私です。

井出 恭子（川崎市）

目を見張るほどに変われる故郷の道路走りつ

つ亡き父偲ぶ

老いるほどに孫よりも子が恋しいと言いたる

母の思い解りて

残照の朱に染まれる湖の風ゆるやかに時止ま

るがごと

保存せし動画の友は満面の笑顔溢れる在りし

日の旅

病状を知らせるメールは保護のまま友逝きし

後も削除出来ざり

ちよつとした油断で右膝と腰椎を骨折。骨折部分の回復を待つて、二か月のリハビリ入院。退院した今も歩くのに不自由はなくなりましたがリハビリを続けております。

※

田中 一美（八王子市）

金婚を祝ひて間なし骨折のわれの介護にあけくれる夫

むくむ脚、腰の痛みに耐える日々身体の声の

みききて過ぎゆく

主夫業に少し慣れたる夕支度枝豆茹でる匂ひ

してをり

手首には名前年齢つけられて入院患者のひとつ

りとなりぬ

見舞くれし孫の手紙は挿絵つきアニメのキャ

ラとりハビリガンバレ

※

令和元年の風薫る日々。梅雨に入るまでの短い



間が一番良い季節ですね。丹波の山を想います。

福田 治子（横浜市）

戻りくる税金何に使おうか結構楽しい確定申告

作業服着ただけなのに「変装」と言われるあなたにや背広が似合う

救急車も事故処理車もみな立ち去りていつも通りの帰り道かな

し残した親孝行を他人にする川柳のつもりでもないのだが

※

王子動物園で観覧車に乗りました。見上げる長兄に姉と二人で手を振るは夢か現かと思いつつ。

原谷 洋美（杉並区）

ゆつくりとただゆつくりとゴリラ舎へのぼりてゆけり兄姉に付き

ははそはのははの祥月命日に兄姉と見るねむれるコアラ

ひたねむるひとりぼつちのライオンは丹波の夢を見てゐるやうな

驟雨来てとなり同士の檻のなか雌ライオンも浅き夢見む

歳の差はぶんづんちぢむ兄姉と動物園にパンダ見時刻

森森と丹波の日々に戻りゆく姉と話せる兄もさらなり

青葉降りあなたはあなたで良いですよ おつとりしたる兄の声降る



撮影・原谷洋美

**篠山市が市名を「丹波篠山市」に変更!**

平成30年11月に市名を丹波篠山市に変更することについての賛否を問う住民投票が行い、令和元年5月1日、正式に市名が「篠山市」から「丹波篠山市」に変更になった。同じ『丹波』を名乗る両市。お互いに丹波をブランドにすべく切磋琢磨していったほいものだ。

**丹波の地にブームが来るか?**

来年のNHK大河ドラマは「麒麟がくる」。戦国武将・明智光秀を主人公にしたものだ。主人公の光秀には長谷川博己さん、母の牧は石川さゆりさん、濃姫は沢尻エリカさんがそれぞれ演じる。

光秀と言えば丹波。織田信長の命を受けた光秀が、黒井城主・赤井善右衛門直正と激戦を繰り広げた。しかし、直正が「赤井の呼び込み戦法」で光秀軍を

追いやった。現・丹波篠山市の八上城主・波多野秀治が赤井方に寝返ったためだ。そのため、直正と秀治との間にかねてから密約があったと言われている。

今回、丹波市と丹波篠山市は、「丹波」の名称でいろいろあるが、この件では仲良く一緒に丹波をPRで盛り上げていくように非密約を交わしている。

**丹波篠山にキャンプ場、帰省時に利用も!**

丹波篠山市遠方に丹波篠山キャンプ場「やまもりサーキット」がオープンした。芝生広場を再整備。トイレ付きの管理棟や炊事場もある。40区画の広さに、足でこぐペダルゴーカートや木製遊具。そばには温泉ありで、テント、いすやテーブル、寝袋、コンロなど、必要な道具は全て揃い、手ぶらでOK。親子でのキャンプにもってこい。帰省時に一度利用してみてはいかが?

**住まいるバンク成約100件に**

全国的に人口減少による空き家の活用が課題になるなか丹波市では、市内の空き家情報を集め、売りたい・貸したい人と買いたい・借りたい人との橋渡しをする、空き家バンク「住まいるバンク」を運営している。

開設以来、同バンクを通じた成約がこのほど100件に達した。

**柏原赤十字病院、閉院**

丹波市柏原町の柏原赤十字病院が閉院した。前身病院を含め明治時代から地域密着型の医療を提供してきたがついに84年の歴史に終止符を打った。

同病院は、明治30年に開院した水上郡立柏原病院が前身。明治41年に財政上の理由で柏原町に移管され、その後、日本赤十字社兵庫支部柏原診療院となつた歴史を刻む。

**強豪復活か?**

丹波市の水上高校女子バレーボール部が加古川市で開かれた県高校総体で優勝し、4年連続39回目のインターハイ出場権を手にした。インターハイは7月24日に宮崎県で開幕する。

2012年の春高バレーで準優勝、インターハイでは12年のベスト8が最高成績。ここ数年イマイチの成績だが、今大会で古豪復活をめざしている。

**世界遺産の清水寺の屋根の葺き替え工事を丹波の職人が**

国宝で世界遺産でもある清水寺が50年ぶりに檜皮屋根の葺き替え工事をしている。その葺き替え工事に丹波市の20歳代の若手職人4人が従事している。丹波の職人技が全国的に認められたかっこうだ。完成は東京五輪前。

(井徳正吾・横浜市)

# My Gallery

レイアウト・岡 吉明

芦田美代子さん（柏原町出身）



転勤族で50年あまり過ごし、終の住処を川越市に見つけ、絵手紙の素晴らしい先生に巡り合い、旅の思い出や、四季折々の風景等を描いて、楽しみに待っていてくれる親戚や友人に発送しています。



「年賀状」



# My Gallery

酒井典子さん（氷上町出身）



布を染め、鋺を当てて組み立てる「布の花」作りを、子育てが終わった頃から続けています。主人が作るモルタル・スモールハウスと合わせるために、今は小さなお花にこだわり、二人で“大人メルヘン”の世界を目指しています。





# My Gallery

粕谷廸子さん（氷上町出身）



壽



長楽  
万年

篆刻とは？ 印材に篆書を刻するので篆刻といいます。  
篆書とは？ 秦の時代に統一された一番古い書体です。  
篆書から、隸書・草書・行書・楷書に発展しました。

大学時代に篆刻と出会い、いつか専門的に勉強したいと思っていました。漸く専門的に始めた時、老眼鏡の要る齢になっていました。



月



淑



竹杖  
軽



何似  
生



雲中  
白鶴

龍龜



# My Gallery

足立悦男さん（青垣町出身）



柏市アケボノ公園

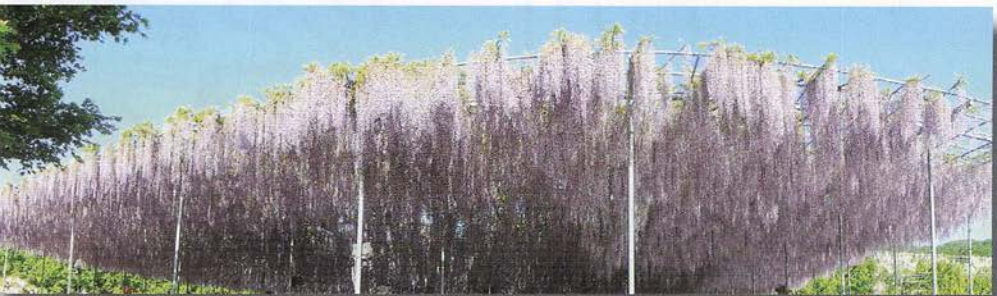


河口湖と富士

茨城 潮来あやめ園



私の趣味は神社仏閣巡りですが、行く先々で素晴らしい景色や美しい光景に出会うと思わずシャッターを押してしまいます！  
そのうちの数枚を掲載させていただきました。



足利フラワーパーク



# 簡単レシピ 女のレシピ

松田けい子



## 胡瓜の香味漬け

材料：

胡瓜 5本  
ネギ 生姜 ニンニク  
醤油大さじ6  
お酢大さじ3  
砂糖大さじ1と少々



胡瓜の香味漬は、  
どこへ持って行っても好評です。  
作り方が簡単で、箸休めに最適！  
材料も手に入りやすく安価なので、  
なおさら喜ばれます。  
半日もすると胡瓜から水が出てきますが、  
友達は全て食べきった後の漬け汁を  
再利用したりして楽しんでいるようです。

### 作り方

- ①胡瓜は塩で板ずりにし、叩いて柔らかくしておく
- ②半分に切って、更に6等分に切って入れ物に
- ③ニンニク、生姜、ネギはミジン切りにして、胡瓜の上に
- ④醤油、砂糖、酢を注ぎ、蓋をして冷蔵庫で冷やす
- ⑤半日ほどで、浅漬けに、約一週間は楽しめます



# 簡単レシピ 男のレシピ

山本喜則

## 貧乏人のキャビア

材料（2～3人分）：

茄子2本

にんにく1片

玉ねぎ1/4個

アンチョビ2枚

オリーブオイル大さじ2

塩・こしょう適量



### 作り方



①茄子を半分に切り、斜めに切れ目を入れる

②オーブンにて10分焼く

③スプーンでかきとり、包丁で細かく刻む

④みじん切りしたにんにく、玉ねぎ、アンチョビをオリーブオイルで炒める（中火にて）

⑤多少色付いたら③を加え弱火でじっくり炒め塩・こしょうで味を整える

⑥クラッカーにのせて食べる

（時間が経つと黒っぽくなるのでこれが命名のゆえん…）

## 2分で出来る酒の肴

材料（2～3人分）：

生姜（新でもヒネでもOK）適量

ゴボウ（ $\ast$ ）適量

白ごま適量



### 作り方

①生姜をせん切り（3～4センチ位）

②ゴボウを乱切りしてからせん切り（3～4センチ位）

③①、②を混ぜて白ごまを振って出来上がり（ゴボウは乱切りすると食感が良い、ヒネのゴボウを生で食べるのに抵抗感ある時はレンジで1分くらいチンする）



# 丹波を撮る

写真と文：徳田八郎衛

## 変わる丹波変わらぬ丹波(1) 神楽の里を往く 1



←暮れの大雪も溶けた新春、青垣町神楽地区を訪れました。まず西芦田の「道の駅あおがき」へ立寄りしましたが、1月4日まで閉店ということで、がっかり。



←だが電気自動車（EV）の充電は可能です。御安心下さい。

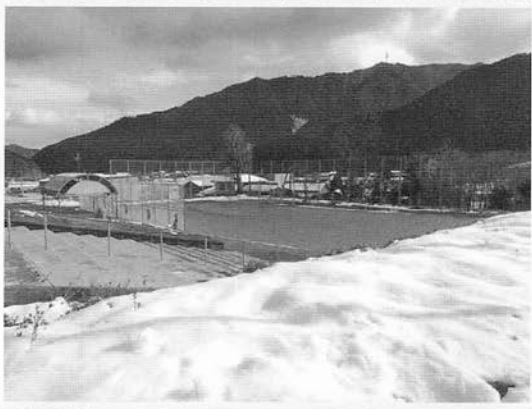


←神楽地区の文室まで来ると、同じ青垣町でも芦田・佐治地区よりは降雪も多くなりました。イタリアからスイスへ向かうような気分です。

## 変わる丹波変わらぬ丹波(2) 神楽の里を往く 2



←遠阪地区と神楽地区を分岐する大箕山(標高626m)を当地の人々は「丹波富士」と呼びます。「長い裾野もないのに富士と言えますか?」と異議を唱えてきましたが、ここ神楽地区から眺めると、確かに富士山に似ています。



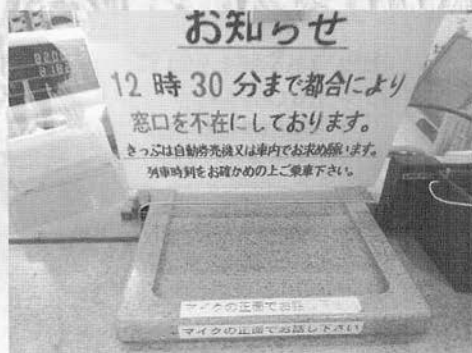
←小学校区が新しい自治会活動の拠点となりましたが、青垣町区域の学校統合により神楽小学校は閉鎖されました。元校庭も寂しそうです。



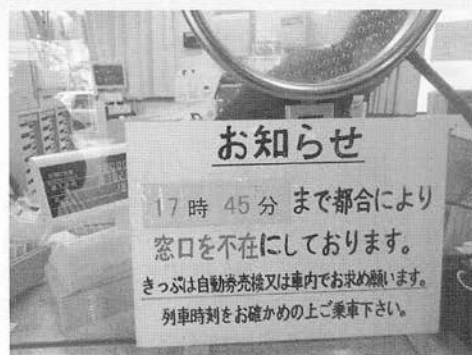
←こども園も統合され、跡地には社会福祉法人南但愛育会が運営する児童養護施設「睦の家」が開設されました。新しい建屋に保育園児から高校生まで約30名が暮らしています。神楽の人々は開園を喜び、続々里親になってくれました。ここ「兵庫県のスイス」が子供たちの第2の故郷になるのです。

# 丹波を撮る

## 変わる丹波変わらぬ丹波(3) 柏原ナウ 1



←福知山線開通以来、柏原駅の駅員は列車運行管理と窓口業務に追われながら交代で休憩してきましたが、今は窓口業務を中断する時間帯も設けられました。「働き方改革」ですね。



←複雑な経路の乗車券を求める方は、この時間帯を避けた方が無難です。また明治時代から定着していた電話番号72-0543も消滅しました。2018年7月豪雨の際、鉄道の運行状況を尋ねたかったのですが、駅に繋がりませんでした。



←運良く列車に乗り込めば、車内では福知山線だけでなく周辺路線についても運行状況を知ることができます。この表示板が各無人駅にも設置されれば素晴らしいのですが…

## 変わる丹波変わらぬ丹波(4) 柏原ナウ 2



←丹波市の観光資源は各地域に分散しているので京阪神からの来訪はマイカーかバスによるのが普通です。だが時には列車で来て、駅前に待機させたバスで周遊するグループもあります。JRにはご同慶の至りですが、口惜しいことに、このバスも丹波市外から来ています。



←国道176号線バイパスで活躍するホームセンターです(柏原町田路)。朝9時30分に開店するや直ぐに満杯になる貴重な駐車場の2両分をつぶしてEVの充電場所としました。EV時代への準備は十分です。



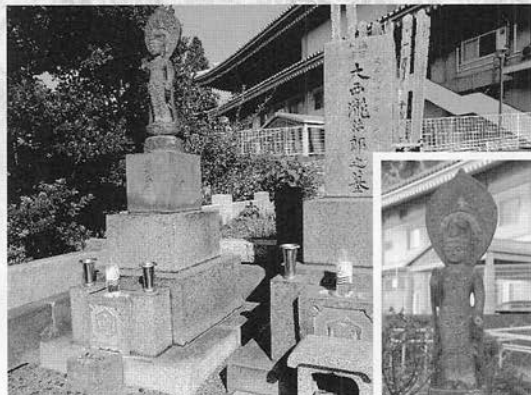
←ところが自転車には冷たい。元々、露天の駐輪場しかないのですが、茄子苗の季節となれば、それからも締め出され、置く場所がありません。店内では自転車も販売しているのですが。



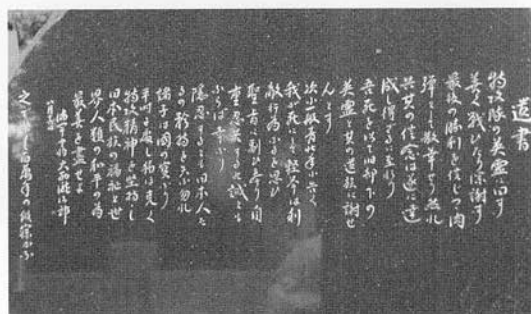
# 丹波を撮る

## 関東で出会った丹波(1) 總持寺墓地 1

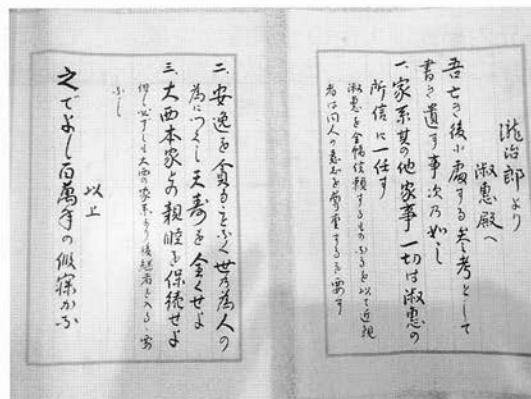
私たちの郷里には昔から曹洞宗徒が多いこともあって、鶴見の曹洞宗大本山總持寺墓地では、意外と多くの「郷党」に出会います。



←終戦の翌日に自決した「海軍中将大西瀧治郎之墓」と海鷲観音。戦後の苦しい生活の中で淑恵夫人が昭和27年に建てました。後方の建物は、境内で最大の伽藍、太祖堂の背面です。



←側面には「吾死を以て元部下の英霊と其の遺族に謝せんとす」と記した遺書の碑が後から建てられました。



←これは淑恵夫人宛の遺書です（水交社保管）。自決の翌月、超満員の列車を乗り継いで芦田村の村葬に参加し納骨した淑恵夫人は我が家に泊られました。筆者はお茶くみを務めたのですが、夫人がこの遺書を携行されていたことを後で知りました。

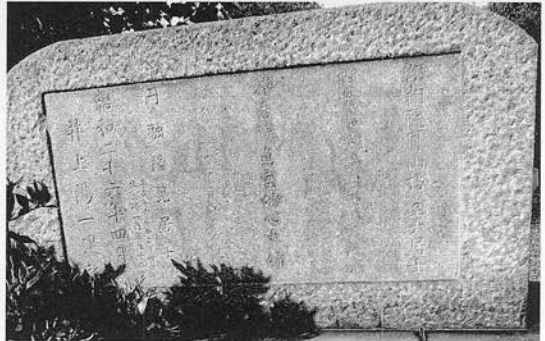
# 丹波を撮る

## 関東で出会った丹波(2) 総持寺墓地 2



←元日本女子大学校長井上秀と元代議士(兵庫5区)雅二が早めに買い求めたので、所在場所を忘れてしまったという「井上家之墓」です。6坪もある広い墓地なのに探せなかったとは！隣に石原裕次郎の、これまた広い墓地があります。

→井上家の墓誌ですが、戒名・俗名・没年・行年等を表のように書き込む一般の墓誌と比較すると、自由奔放な記載です。雅二の他界は昭和22年ですが、直ぐにはではなく同26年になってから長男の陽一が建てたこと、長女の菅支那日本女子大教授(英文学)もここに葬られていることが判ります。秀は同38年に他界しました。



←元内閣総理大臣の「芦田均之墓」です。芦田一族の墓ではなく、均個人の墓となっています。大西(柏原中学9回生)も芦田(同3回生)も戒名ではなく、俗名を石塔に記しているので探すのは楽でした。

昭和34年の没後、速やかに建てられています。揮毫したのは日米開戦時の駐米大使、海軍大将野村吉三郎です。





撮影：徳田八郎衛 犬岡橋から下流を見る

## なぜ今丹波なのか 本当の自分が選んだ丹波暮らし

戸田晴菜（丹波市）

### 自己紹介



私は山と海に囲まれた神戸市垂水区で生まれ育ちました。よく海まで自転車で行き、夜の海岸で波の音を静かに聞いている時間がとても好きでした。丹波市にはひよんなきっかけで3年半前に移住。現在は、夫と3歳の娘の3人で暮らしています。そして、ご縁あって丹波市の移住相談窓口で相談員をさせて頂いています。

丹波市への移住については、実は当初私は大反対でした。都市部でキャリアを積み重ねている最中であり、友達もたくさんいる土地から離れること。そして何より私は虫が大の苦手だったため、虫が多いイメージのある田舎で住むことは考えられなかったのが、正直な

私の移住に関する出発点でした。そんな私がなぜ今丹波を選んだのか。そして、選んだ結果どうなのか。ここで少しお話しさせて頂きたいと思います。

都市部で暮らすことがかっこいいと思っていた

仕事でもプライベートでも活躍している女性がかっこいいと思っていた当時。多くの研修や学会発表の場を経験するには都市部という場所はとても便利でした。元々は医療ソーシャルワーカー（MSW／社会福祉



丹波で行う里山保育「里山ようちえんふえっこ」

士）という職種で急性期病院で働いていました。1人勤務の日は頻回に鳴る院内PHS2本を持ちながら、固定電話が鳴ると同時に救急外来から緊急の呼び出しを受けるという様な目が回る程の忙



移住相談窓口スタッフ

就職し4年が経った頃ステップアップのため更大きな病院へ転職。業界の中でもトップクラスであったその病院では、常に完璧であることを求められ「ここで認められること」だけを考えながら毎日気持ち張りつめて仕事をする必要がありました。

仕事ができる＝かっこいい生き方だと考えていた私は、ひたすら自分を高めることしか考えていませんでした。高められなくなった自分は、誰からも必要とさ

しさの中、がむしゃらに働いてきた20代。夜遅くまで患者さんのカルテを入力することも、病院内のシテム構築に全力を尽くすことも、基本的に仕事をするのが好きな私は疲れを感じながらも楽しんでいた部分は正直あった様に感じます。

れないのではと感じ怖かったです。そのため、できない部分や弱さなどを表に出すことを恐れ、常に背伸びをし緊張。周囲に愛想笑いを振りまいていたような毎日でした。

今考えるとそんなに無理をして生きる必要はなかったのではないかと感じますが、当時はそれがかつこいと思っていたのです。だからこそ冒頭にもあるように、田舎への移住も転職も神戸を離れることも私には考えられませんでした。

## 本当の自分に気付く

そんな中本当の自分の声に気付いたきっかけは、趣味で続けていた吹奏楽でした。

大学卒業と同時に始めた年1回の「演奏会旅行」で、愛媛県今治市岡村島という島に行っていました。

初めは同級生との卒業旅行にと始めたこの演奏会旅行も気付けば10年間活動し、私にとつてなくてはならない存在になった岡村島。人口300人程の小さな島は非日常的な場所でした。道端に座ってネコと知らないおばあちゃんと話している時間が一番心地よかった

のを覚えていきます。そんな年に1回しか来ないよそ者な私たちに、この島の人たちはとても「温かかった」のです。そう、ここで人の温かさを教えてもらったのかもしれない。

毎年、帰りの車には、メンバー25人でも分けきれない程のみかんを頂きました。それは、身内でも何でもない私たちを大切に思ってくれる、島の人たちの想いの詰まったお土産でした。こうして毎年帰る場所がで



岡村島へ演奏会旅行

き、私にとつて岡村島は第二の故郷になりました。

そんな中、27歳になり「できる自分」を求め続けることに疲れを感じ、「背伸びしない等身大の自分」でいることを探し始めていた私は、8年目の演奏会でやつ

とこの空間にいる自分が等身大の小さな自分であることに気付きました。

本当の自分はそれはとても小さかった。けれども、武器や盾を持つこともなく、着飾ることもない。人から何を言われるのかと怯える姿もなかった。「ありのままでもいい。」岡村島の海はそうやって毎年毎年私をリセットして教えていてくれたのかもしれない。

## 丹波との不思議なご縁



移住後の暮らし、家族写真

ありのままの小さな自分に気付いた私は、背伸びをし続けたいとけない都市部で生きるよりも田舎で暮らす方が合っているのではないかと気付き始めました。

そんな時、「田舎暮らしがしたい」と言っていた主人の言葉によ

うやく聞き耳を持つようになり、「考えてみてもいいかも」と思うようになったのです。

田舎暮らしをずっと希望していた主人にこの気持ちを伝え、暮らしたい田舎を探し始めた1週間後、何と偶然にも近隣で移住相談フェアが開催されていました。そこにいた相談員の井口氏と意気投合し翌週には丹波市へ初めて遊びに行きました。

そして訪丹3度目で丹波への移住を決意。仕事も住む場所も決まっていなかったが、気持ちはもう丹波市に行くことを決めていました。

その決め手となったのは「人の温かさ」でした。初めて会うどの誰かも知らない私たちに「車探しているんだったら、知り合いに聞いたるか?」「どの地域が住みやすいだろうか」等と、当事者以上に自分事のように考え寄り添ってくれる丹波の人々。その温かさには心を動かされた。恩送りという言葉がびったりと来たぐらい、人への思いやりのある土地だと感じたのだ。移住に向けて何も不安がなかったと言うと嘘になるが、余計な不安は一切なかった。「丹波に行つて自分で自分を幸せにするんだ」。そんな想いだけが私の中



にんにくの収穫



ツリーハウスの上で遊ぶ娘

にあった。

## 丹波暮らしの中で生まれた変化

現在移住して3年半を迎えた。丹波暮らしにも慣れたもので、相変わらず虫は苦手だが先住民である彼ら(虫)に敬意も生まれるようになった。

3歳になる娘も、草や土にまみれながら大きくなったことで年に1度風邪を引くかどうかというぐらい丈夫に育っている。おもちゃは木の枝とペットボトルとお水があれば1日中ジュース屋さんごっこが楽しめる。先日はじゃがいもとにんにくを手を持ち人形のように会話をしていた。想像力溢れる遊びにくすと笑みがこ

ぼれる。

漠然と「田舎での子育て」に魅力を感じていたが、本当に田舎での子育てはのびのびとした環境で怒ることとも少なく、親である私がラクをさせてもらっている。余談だが、子どもと遊ぶ時の私のモットーは、子ども以上に自分が楽しむことである。子どもと遊ぶというのいい理由に、私があるままの姿に戻る機会を与えてもらっているのかもしれない。

そして丹波暮らしの中でもう一つ大きく変化したことは「足し算の生活」をしなくなったことだ。これまでは、ショッピングや外食等で日々のストレスを解消していたため、家に物が溢れ数回しか使っていない物も多かった。

丹波での生活を始めてからは、自然と足し算をする必要がなくなっただけに感じる。ふと前を見ると山々の緑に癒され、満天の星空に言葉を失う

くらい感動する。小さな花に可愛さを感じ、水路を流れる水にキラキラと輝きを見つけ喜ぶ。そんな生活が私自身を毎日癒してくれているのだろう。

「あなたはあなたそのままでもいいんだよ」そう自然が語りかけてくれているようにも感じる。それが、私がこの丹波という土地で生きていこうと決めた理由である。

◇移住定住に関するご相談

移住相談窓口「たんば 移充」テラス「Turn Wave」  
090-2705-4110

丹波市移住定住ポータルサイト「Turn Wave-丹波」  
<https://teju.info/> (丹波市内のイベント情報、移住者インタビューなど随時更新)

◇空き家に関するご相談

「住まいるバンク」<https://teju.info/smilebank/> (丹波市内の不動産情報、空き家所有者向け情報も掲載)



撮影・岡 吉明

# 丹波ブランド紹介

その10 丹波がいばら雛めぐり

## 女性手作りの「吊るし雛」

古西 純

(丹波新聞社)

天下統一目前まで迫った戦国武将、織田信長、その実弟の織田信包のぶかねが初代藩主となった丹波国柏原藩。丹



江戸時代後期の内裏雛

波市柏原町の市街地は、現在も城下町のたたずまいを残し、多くの観光客らが訪れている。その柏原で、2018年から雅な新しいイベントが始まった。「丹波ブランド」のテーマからはややずれるかもしれないが、今回は、

柏原の女性たちが中心となって運営している「丹波がいばら雛めぐり」を紹介したい。

### チームで吊るし雛

町家のあちこちで雛人形を飾るイベントは、お隣の丹波篠山市で一足早くから開催されており、丹波県民局から「柏原でもやってみては」と打診があったのが始まりだった。

柏原自治協議会、観光まちづくりの会、まちづくり柏原、商工会柏原支部などで実行委員会を組織。とりわけ原動力となったのは、実行委員会副委員長の荻野真知子さん(69)をはじめとする柏原の女性たちだった。

柏原の有志で和歌山県へ視察に行き、そこで飾られていた「吊るし雛」に感動。柏原でも、各家のおひなさまを並べるのに加え、たくさん吊るし雛を自分たちで作って飾ろうと意気投合した。

「吊るし雛がどれぐらいの時間で作れるのか分かりませんが、とにかくがんばろう、と始めました」と荻野さん。石田、新町、古市場の町内自治会有志が





今年の雛めぐりのポスターを手にする荻野さん



来年の雛めぐりに向け、丹波新聞社会場で行われている吊るし雛づくり

に50個ほどの吊るし雛が完成。来年に向けて、今年も6月ごろからすでに吊り雛づくりが始まっており、各グループで制作に励んでいる。

ループ、手芸グループ、丹波新聞社を会場とした一般グループなど、チームごとに製作に励んだ。吊り雛づくりは初めての人ばかり。本を見ながらわいわいと進める手作業は、仲間づくりの場となっていた。

「吊って完成した時のうれしさは忘れられません」と荻野さん。1年目は90個ほど、2年目はさら

### 江戸から平成まで

今年の雛めぐりは、3月21日から31日までの11日間、17会場で行われた。雛人形は、江戸時代から明治、大正、昭和、平成時代のもので60組近くが並んだ。

最も古いものは、江戸時代後期の内裏雛。大正時代のひな人形で、当時御所で飼われていた犬種「チン」を引く官女を表したのもあった。

建物の中に内裏雛を置き、官女や仕丁、隨身などの人形を添えた「御殿飾り雛」も12組展示された。御殿飾りは明治、大正時代を通じて京阪神間で人気があったという。昭和30年

代中ごろには、段飾り雛に押されて姿を消したそうだ。「最初の年は、御殿の組み立て方が分からず苦労しました」と荻野さん。



各会場を華やかに彩った手づくりの吊るし雛

柏原藩陣屋跡会場では、柏原藩6代目

にぎわいに一役

期間中、スタンプリーに参加したのは271人。市内が122人、県内が100人、県外が49人だった。県外は大阪、東京、広島などからも訪れており、イベントはまちのPRにもなっている。

スタッフも女性を中心なら、町を歩く人たちも女性のグループの姿が目立ったように思う。ひな祭りは女の子の成長と幸せを祈る伝統行事であり、女性の方が雛人形にも思い入れが強いのだろう。荻野さんも「おひなさまは不思議と魅力。顔を見たら吸い込まれていく



趣のある御殿飾り雛

藩主織田信古のぶもとの娘で、信長の血を引いていた「鶴姫」が愛用した御所人形と三つ折れ人形も展示された。また、氷上町稲畑に伝わる伝統的な土人形「稲畑人形」も数多く展示された。



ずらりと勢ぞろいした稲畑人形



宮中で飼われていた「チン」を引く官女を表した雛人形

よう」と話す。来年の雛めぐりは、2020年3月14日から22日まで開催される予定だ。補助金は3カ年で、最後の年になるが、荻野さんは「規模は小さくなんでも元気なうちが続けたい」と考えている。「柏原のにぎわいに一役買いつつ、参加している私たちの生きがいにもつながれば。英語で説明をしたりして、国際的にもイベントを広められれば」と夢を語った。

## 織田鶴姫

織田家が代々藩主を務めた丹波国氷上郡柏原藩で、織田信長の血を引く最後の姫君となった「織田鶴姫」。聡明で容姿端麗、非の打ち所のないような武家女性であったと伝わる。一体どのような人物だったのだろうか。

柏原藩は、織田信長の実弟、織田信包のぶかねを初代藩主として始まった。しかし、この血筋は3代で途絶え、信長二男、信雄のぶかつの血を引く信休が大和国宇陀郡から国替えされ、「後期織田藩」が再興された。鶴姫はこの後期織田の6代藩主、織田信古のぶもとの一人娘。7代藩主、信貞の養子に入り、嘉永4年（1851）、15歳の時、信敬のぶかたを婿に迎えた。



織田鶴姫（「柏原町志」より）

8代藩主となった信敬は、若い身ながら、藩政改革にも取り組み、「織田藩中興の名君」とうたわれたが、嘉永6年（1853）にわ

ずか18歳で病死。鶴姫と信敬は仲の良い夫婦だったが、まだ子どもに恵まれておらず、鶴姫はわずか17歳で未亡人となってしまった。

丹波から信長の血筋を絶やしたくないと、周囲は鶴姫に再婚をすすめたが、鶴姫は髪を剃り落として尼になり、再婚をきっぱりと拒んだという。名も「良性院」と改めた。

鶴姫は、信敬の死後も江戸での生活を続けていたが、参勤交代の制度が見直された翌年の文久3年（1863）、養祖母の養徳院や養母の宝鏡院らと一緒に、柏



今年の丹波かいばら雛めぐりで展示された織田信長の血を引いた「鶴姫」愛用と伝わる人形

原藩へ移った。27歳の時だった。

鶴姫の日常生活は、信敬の考え方を受け継いだように質素で、人柄も慎み深く、誰一人として取り乱した姿など見た者はいなかった。養母、



「夫人織田氏碑」=丹波市柏原町に建てられた建勲神社  
柏原で

養祖母によく  
仕え、病気の  
時には帯も解  
かずにつきつ  
きりで看病し  
たという。ま  
た養蚕、裁縫も自ら労をいとわず行った。小柄ながら、  
絵から抜け出したような美人で、その上賢く、誰からも慕われた。

生まれながらの才能に信敬の感化もあつて、田村看山について学問を積み、信敬が重用した儒学者、小島省齋の講義を聴くことを楽しみにしていた。趣味の幅も広く、書画はもちろん、琴や三味線に至るまでたしなんでいたという。和歌も堪能で、たくさんの作が残されている。

織田分家の津田朝蔵さんの子、長敦さん(84) 〓 柏原町柏原〓は、父からよく鶴姫の話を聞いていたという。鶴姫のことは「良性院さん」と呼び、かわいがられていた。氷上町の本郷川へ魚とりのお供について行ったことや、お正月に駄賃をもらいに行っていたこ

とを話していたそう。

今年の「雛めぐり」で、陣屋跡に展示された鶴姫ゆかりの「御所人形」と「三ツ折(みつおれ)人形」は、朝蔵さんが鶴姫からもらい、津田家で大事にしてきたものだ。

鶴姫は、明治29年(1896)、60歳でこの世を去った。遺言により、鶴姫の所有になっていたものはすべて売却され、代金は崇広小学校と旧藩士に全額贈られたそう。鶴姫の位牌は、柏原町柏原の本覚寺にまつられている。また、明治30年(1897)、柏原の建勲神社が建立され、その貞婦ぶりを後世に伝えていく。信長の血を引く最後の姫君として、葛藤をかかえながらも、自分の意思を貫いた鶴姫。当時の婦人のたしなみや心得をすべてというほど体現しつつ、学問や趣味にも通じた姿は、武家の女性としての凛とした強さと清々しさにあふれ、多くの人々をひきつけたのだろう。

(参考文献〓榊賢夫著「歴史物語 丹波柏原」)

## 丹波人物伝

洞穴探検家

### 越智研一郎君追想後日譚

野村 節 三（大船渡市）



越智研一郎君と私は昭和二十一年（一九四六）年、旧制・兵庫県立柏原中学校入学以来、新制・兵庫県立柏原高等学校併設中学校を経て、昭和二十七年（一九五二）年、同柏原高等学校卒業までの六年間、共に生物班に所属した同期生です。

高校卒業後は大学進学で彼は四国・松山へ、私は東京へ出て、お互いの交流はなかったのですが、ある時読んだ岩波新書・吉井良三著『洞穴学ことはじめ』に越智君による目覚ましい洞穴探検の様子がつづさに記述されていることに少なからず驚き、また感銘を受けました。

彼は日本各地の洞穴探検に参加して、多くの実績を挙げましたが、中でも昭和三十七（一九六二）年八月、

日本三大鍾乳洞の一つとされる岩手県岩泉町の「龍泉洞」の地底湖を初めてアクアラングによって潜水調査して、第一、第二地底湖発見という成果を挙げたことは彼の特筆すべき足跡で、当時から個人的で有為な洞穴探検家として、その将来に期待されていました。

ところが、翌・昭和四十三（一九六八）年八月、徳島県阿南市沖合5km、水深50mでの海底ケーブル敷設工事で潜水作業中、不慮の事故に遭ってこの世を去りました。三十四年の短い生涯は惜しまれてなりません。そこで、私は平成二十二（二〇一〇）年、本誌の第



第一地底湖（水深：35m）

41号に、「日本有数の洞穴探検家・越智研一郎君を偲ぶ」と題した一編を寄稿しました。それから既に九年が過ぎましたが、その間、



第二地底湖（水深：38m）

「龍泉洞」と越智君に関わる様々なことがありました。

翌・平成二十三（二

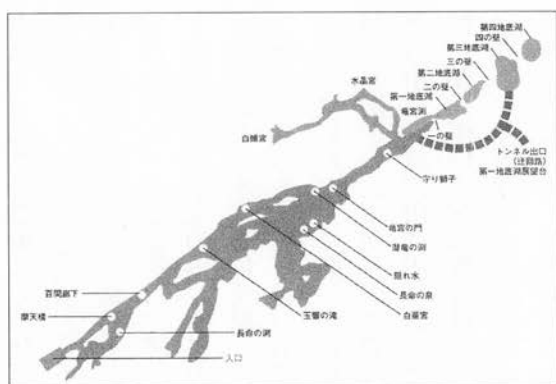
〇一一）年三月十一日、突如、「東日本大震災」が起き、大津波の襲来で岩手県沿岸も甚大な災害を被りました（本誌第42、43、44号に寄稿）。岩泉町も一部沿岸は大津波に遭いましたが、「龍泉洞」は洞内水位が下がり白濁した程度であったことは幸いでした。

そして、この大震災直後から第41号の寄稿文がご縁で知り合った越智君の妹・三浦綾子さん（柏高同窓生）と元・奥様の重川美枝子さん（共に元・学校教諭、神戸市在住）との交流が始まり現在に至っています。

次いで、翌・平成二十四（二〇一二）年には日本洞穴研究所（越智君の提案で「龍泉洞」近くに設立）の理事で洞穴探検家の菊地敏雄氏（一関市在住）と知り合い、越智君の良き理解者として、現在活躍中で龍泉洞関連情報について種々お世話になっています。

そして、同年、龍泉洞温泉ホテルで開催された同研究所総会で越智君顕彰の意向が伝わり、これに賛同された同研究所長・鹿島愛彦先生（愛媛大学名誉教授・理博）と同研究所員でプロ潜水士の久保彰良氏（NPO日本水中科学協会理事、東京都在住）から越智君に関わる話を聞くことができました。

わが国洞穴・洞窟学の進展に貢献された日本洞窟学会元会長・鹿島先生（教育学部）は越智君（文理学部）と愛媛大学時代の同期生で、越智君を畏友として行動を共にされたと聞きました。ところが、平成二十七（二〇一五）年八月、松山にて入院加療中に逝去（享年81歳）されました。ここに謹んでご冥福をお祈り致します。



龍泉洞平面図（出典：龍泉洞事務所、日本洞穴研究所）

一方、久保氏はインターネット・ブログ「龍泉洞潜水奇譚」（平成二十二年二月〜八月）の中で、洞穴

水奇譚」（平成二十二年二月〜八月）の中で、洞穴潜水グループ「ピーバー集団」（越智研一郎、松野正司、高橋孝治各氏）による探検調査や水中撮影（NHK）の話を詳しく記述し、「越智研一郎という稀有の探検家がもつと評価さ

れても良いのではないか」と言及されています。

さて、平成二十五(二〇一三)年九月には岩泉町の「龍泉洞」と「安家洞」が三陸ジオパークに認定されました。そして、十月末に三浦綾子さんと重川美枝子さんの岩手旅行計画に私も加わって岩泉町を訪れ、観光地として見事に整備された「龍泉洞」を見学後、伊達勝身町長を表敬訪問し、懇親会では菊地敏雄氏はじめ龍泉洞事務所長・武田保男氏ほか岩泉町関係者と親交を深めました。

一方、日本洞穴学研究所では平成十七(二〇〇五)から平成二十八(二〇一六)年まで主に菊地氏がリーダーで、「龍泉洞測量・再測量調査」が続けられました。また、この年六月には、丹波新聞社主催の大震災被災地への読者ツアーで、同新聞社の小田晋作会長ほか十八名の一行(丹波市在住者)が陸前高田市と大船渡市を訪問されました。そこで、大船渡市内の被災地と観光地への案内は私が引き受け、三陸町での説明会では大津波の惨状を撮ったパワーポイントの映写と実際は大津波に遭って命拾いした地元被災者二人の体験談も組み入れ、被災当時の状況と現状を見聞して頂いた

次第で、有意義な集いでした。

なお、一行と共に宿泊したホテルでの親睦会では、龍泉洞開発に貢献した越智君の足跡を紹介しました。翌日の帰途、「龍泉洞」へ寄った一行はドラゴンブルの地底湖に息をのみ、暗黒の奈落に挑戦した越智君らの果敢な潜水探査に感銘したと聞きました。

劇的とも言える越智君の足跡については丹波新聞社の小田会長がとくに関心を持たれ、このツアーを含め越智君関連の記事が丹波新聞に数回掲載されましたが、その中で「越智氏は龍泉洞にとつて掛け替えのない人物だが、洞内の案内板には只一カ所名前を見ただけだった」と率直な思いが記されていました。

何れにしても、丹波新聞のお蔭で越智君の足跡がようやく丹波で一般にも知られるようになったのです。

ところが、この年の八月三十日、異常なコースをとった大型台風10号が初めて岩手県大船渡市へ上陸し、そのまま北上し、岩泉町では猛烈な豪雨となり、小本川流域は未曾有の大洪水によって甚大な被害をもたらしました。「龍泉洞」でも洞内の大増水で観光施設が大きく破損し、約二百日間、閉洞となりましたが、翌・



平成二十九（二〇一七）年三月、安倍晋三首相による龍泉洞視察の後、営業が再開されました。

実は約五年前、龍泉洞関係者による話では、岩泉町では現在開館中の「龍泉新洞科学館」を近い将来改築する計画があり、その際に龍泉洞開発に貢献された山内浩先生（昭和五十七年逝去、享年78歳）や吉井良三先生（平成十一年逝去、享年84歳）と共に越智研一郎氏ら洞穴探検家のコーナーを設けるという計画でした。

しかし、あの大震災とそれに次ぐ豪雨による大被害で、岩泉町では当然その復興が最優先課題となり、「龍泉新洞科学館改築の件」は棚上げとなりました。

この件はやむを得ないとしても、平成二十九年は龍泉洞関係者にとつて有意な進展の年となりました。それは、数年前から越智君の龍泉洞探検写真を収集することで、関係者に当たって探していましたが、その行方は全く不明で、もはや入手は困難と半ば諦めかけていました。

そうした中、この年の六月、菊地氏が越智君らによる「龍泉洞地底湖潜水調査」を岩手日報社（盛岡）が取材・掲載していたことを思い出し、同社への問い合

わせで、越智君の貴重な写真四枚が残っていることが判明したのです。奇しくもこの年は越智君の五十回忌の年でした。写真の中の一枚は昭和三十七（一九六二）年八月十一日、「龍泉洞第1次潜水調査」直前の越智君の「JAPAN CAVING」のワッペンを胸に付けた潜水服姿で、彼が「龍泉洞」を潜水調査した証です。

そこで、岩手日報社から借用したそれらの写真と新聞記事を中心に、龍泉洞観光会館の当主・早野貫一氏が発起人で、「龍泉洞探検に尽くした洞穴探検家・越智研一郎展」（同観光会館、七月末〜八月末）が開催されました。因みに、「越智研一郎の生い立ちから探検家を志すまで」を私が、「越智研一郎と龍泉洞潜水史」を菊地敏雄氏が分担・執筆しました。また、早野貫一



昭和37（1962）年8月11日。  
龍泉洞第1次潜水調査直前の越智研一郎氏（愛媛新聞社記者・日本ケイビング協会理事）。岩手日報（1962年8月12日付）  
（出典：（株）岩手日報社）

氏は龍泉洞開発初期の岩泉町議会議長・早野隆三氏の長男で、当時は中学生でした。

この展示会には重川美枝子さんと越智君との長男・重川岳志氏や丹波新聞社・小田晋作会長も来訪され、また、地元ガイド、高校生、岩泉商工会議所青年部の学習の場ともなり盛会裏に終わりました。

また、昨年七月、前記の小田会長がかつて越智君らによつて探検された「龍泉洞」「安家洞<sup>あつか</sup>」（岩泉町）、「内間木洞」（久慈市）を訪問取材されました。

なお、最近、早野隆三氏の次女・山崎文子さん（グラフィック・デザイナー、盛岡市在住）が「龍泉洞」の開発に献身的な努力を惜しまれなかつた父・隆三氏の実績や越智君との深い絆のほか、長女・本橋始<sup>もと</sup>子さんについて物語風に執筆された『龍を魅<sup>み</sup>た人々 早野隆三と龍泉洞誕生秘話』を今秋出版される予定です。私も依頼されて本書に「日本有数の洞穴探検家・越智研一郎君の足跡」を寄稿しました。また、三浦綾子さんも「兄・越智研一郎へ」と題した文章を寄稿されました。一方、昨年三月、『日本洞穴研究所報告』第35号が発行されました。これは「日本洞穴研究所創立50

周年特別号」で、この中で同研究所の桑原英了所長は「越智研一郎氏の存在は龍泉洞を通して、岩泉町の名を全国に広めた立役者の一人であり、研究所創立の祖ともいえる人物である。」と述べられています。

また、今年三月に同誌第36号として、『日本洞穴研究所の50年史』（作成担当：菊地敏雄代表理事）が発行されました。その副題は「龍泉洞・龍泉新洞と共に歩んだ探検と調査の記録」で、両誌は後世に伝える価値がある最も正確かつ詳細な半世紀に亘る龍泉洞の歴史的・学術的記録であります。

因みに、龍泉洞見学者は年間平均十七万人、一昨年七月で累計千五百万人となり、東北地方屈指の観光地として現在に至っています。

このように、越智君は半世紀前に「龍泉洞探検」を通して、現・兵庫県丹波市と遠く離れた岩手県岩泉町との架け橋になったと言つても過言ではありません。

結びに、岩泉町の一日も早い復興と「龍泉洞」の益々のご発展を祈念して、越智研一郎君追想後日譚を終わります。

（昭和9年、山南町岡本生まれ／北里大学名誉教授・理博）



丹波人物伝

女子高等教育の先駆者

井上 秀

その4

徳田 八郎衛 (浦安市)

1 同郷の夫は海外志向

今や丹波の郷党だけでなく教育史研究者でも知る人の少なくなった井上秀について、まだまだ伝えたい活動やエピソードは多いが、秀のよき理解者・支援者であった夫・雅二についても記さねばならない。彼が、山田の素封家、井上家の婿に「永久就職」するだけで満足する人物であったならば、その後の秀の活躍は、違ったものになったであろう。

本誌37号の本稿(その1)で記した経緯で井上家に迎えられ入籍するや、直ちに京都で中国語を学び、その秋には日清戦争の勝利で割譲された台湾へ陸軍通訳として赴き、翌95年6月、東京専門学校(後の早大)へ進学する。99年の卒業時に簡単な挙式を済ませた翌年、雅二は日清両国の文化交流と青年教育を目指す紳

田の東亜同文会(学生時代に雅二は会の結成に参加)を移転するため上海へ飛ぶ。その翌年、ウィーン大学で植民政策学を学んだ後、1902年にバクー、サマルカンド、タシケントなど、南下するロシアがトルコから奪って間もない中央アジアを探訪する。

未だユーラシア大陸の奥地へ踏み込んだ日本人がない時代だ。参謀本部の命で単騎シベリア横断を果たした福島安正陸軍中佐の旅と比較しても遜色はない。それを25歳の丹波人が成し遂げたのだ。日露戦争の前年に刊行した『中央亜細亜旅行記』は、今も『明治シルクロード探検紀行文集成』第17巻で読むことができ。団体ツアー等で当地を満喫する郷友は増えたが、これを知る人が皆無に近いのは残念だ。雅二の同行者はオーストリア参謀本部付将校やロシア人画家であり、日本人ばかりで群れるのとは違う旅であった。

2 関心は大陸から南洋へ

日露戦争を機として雅二は韓国の政治体制近代化を支援するため、韓国の財務省、次に宮内府(宮内庁)に出仕するが、何年たつても進まぬ清国や韓国の国家

改造に失望して1910年に退職する。左の写真には「韓国統監府井上雅二氏」と筆者の祖父の字で記されているが撮影場所は福知山市の写真館であり、同席者は歩兵第20連隊で勤務する身内の青年士官かと思われる。退職して帰国直後に立ち寄ったのであろうか。そのころ、すでに彼の関心は大陸から南方へ切り替わっていた。「南亜公司」をシンガポールに設立し、常務となつてジョホール州でゴム園経営を始める。実業家に変身するのだ。

多忙な日々の中を著述家としても活躍し、日露戦争勝利の翌年1906年に『韓国経営資料 埃及に於ける英国』を、1910年に『巨人荒尾精』、1911年に『四大陸游记』を上梓した。荒尾精は、日清戦争



朝鮮宮内府勤務時代の井上雅二

前に中国で情報活動に携わった陸軍将校であるが、開戦後は「日清提携してア

ジアを復興」「過大な賠償金請求は東亜の安定に悪影響」と説いたアジア主義者であり、雅二も私淑していた。

大正4年に南洋協会を設立して9年に専務理事となり、同年に名著「南洋」を上梓する。明治期のロマン的南進論は短命だったが、第一次世界大戦後の南洋諸島統治を契機として大正末期に現実的南進論が興る。それを10年も先取りしている。南進論は昭和期の大東亜共栄圏と混同されがちだが、説くのは経済的、人的進出であり、まさに現在の日本の姿を予言するものだ。これに関与した文筆家や実業家は多いが兼業したのは雅二だけであり、関連著書は30冊に及ぶ。次は南洋や中南米への開拓移住に邁進する。

### 3 弱かったコミュニケーション力

日本を海外へ導く先駆者であり、国会図書館の憲政資料室にも東大の近代日本法制史料センターにも井上雅二関連文書がまとめられている稀な丹波人なのに、戦前の「現代氷上郡人物史」等にはさっぱり紹介されない。それは一般人より半世紀も先を歩んでいた人物



大正時代の井上雅二

の宿命である。しかし上海ととも郷里との縁を切るタイプではなかった。1924年5月の総選挙では郷里で立候補して当選する。同年10月には柏原中学校で「南洋の現状と国民の覚悟」と題し、政治の話題には触れないまま「海外雄飛」を生徒に呼びかけた。だが不幸なことに郷党との出会いではネガティブな評価を受けていることが多い。

どうしても「尊大だ」と見られてしまうのだ。実は筆者も雅二と遠縁に当たる。筆者の祖母の妹が嫁いだ稲土の足立家は、雅二の足立家と株内である。筆者が父の「いとこ会」に参加し、若き日の秀と雅二について尋ねた際も一族の古老からこれを示唆された。

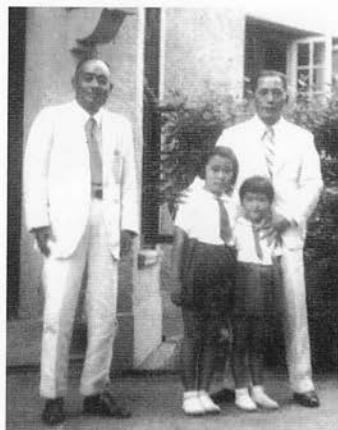
柏原中学12回生（1913年卒業）の近藤憲二が晩年に記した「無政府主義者の回想」によると、192

0年の東京校友会（同窓会）へ雅二が出席し、誰彼なく話しかけて選挙の事前運動するのを見た9回生の大西瀧治郎が、「入船山の想い出ある者だけが集まっているのに、卒業生でもないのが来て選挙運動やるとは何事だ」と立ち上がって糾弾している。飛行機乗りの先駆者として何度も死線を越えてきた純情な大西海軍大尉には、黙認できない不潔な行為なのだ。近藤をはじめ多くの後輩がそれに同調したのも、雅二のコミュニケーション力の弱さといえよう。右の写真は、雅二が柏原町の岡林写真館で撮影したもので我が家のアルバムに挟まれていた。旅装のままでも写るのも、世界を周遊してきた雅二らしさといえる。

もっと厳しい反発を文字で残した後輩もいる。大西と同期の徳田富二（筆者の父）である。史上初の軍縮会議となるワシントン会議が終ろうとする1922年2月、米国各地を周ってきた雅二が後発の秀と紐育で合流し、約1か月、妻の米国視察に同行する。これは日本女子大での職務には無関係のようだ。秀は前年5月、婦人国際平和自由連盟の日本支部として設立された婦人平和協会の初代会長に就任し、同年11月にワシ

ントンで開催される「世界婦人軍縮会議」への出席も予定していたから、平和運動家としての事前視察である。ところが、井上夫妻の迎えや面会希望相手との事前調整が「ボランティア活動」として三菱商事紐育支店の青年社員、徳田に降りかかるのだ。

彼の紐育日誌にも、郷里の両親へ送った私信にも「こんな威張り腐ったのが代表では、日本はまだまだ二流国」という嘆きが記されている。注意深く読むと、この「便宜供与」依頼は、遠縁である徳田青年宛でもなく、三菱商事紐育支店宛でもなく、紐育日本人会宛でもある。現在のように何千人も在留邦人がいないから、当時の日本人会は単なる親睦団体ではなく訪来者への



1941年1月シンガポール徳田家に宿泊した井上雅二

ボランティ  
ア団体でも  
あった。歌  
手の三浦環  
が「日本人  
として初め  
て」メトロ  
ポリタン歌

劇場で歌った際も、入場券販売に全員が奔走したとい  
う。

会長から特命で奉仕を依頼されるのは一般に商社や銀行の若手駐在員であるが、今回の調整相手は企業や官庁でなく国際政治学者やシンクタンクだ。依頼するのも経済学部卒や高等商業卒ではなく、法学部の政治学科卒、それも普段から学会誌を買い込み勉強している奴、ということだ。徳田に白羽の矢が立ったらしい。政治学専攻の留学生なら実績になるが、商社員にはとんだ奉仕作業となる。日誌には細字で記した膨大な交通費や電話代の請求控えも残されていた。ファックスやメールが発達した現在とは比較にならない労苦であるが、満足感でなく憤慨が残されたのだから、ここにも雅二のコミュニケーション力の弱さがみられる。

だが豆を挽いて淹れたコーヒーを秀の客に運ぶ姿に誰もが称賛し感謝している。明治大正時代には、妻の来客をもてなす夫など日本では希少価値であった。

#### 4 シンガポールで我が家に宿泊

その雅二が19年後にシンガポールの徳田家で一泊す

る。恩師井上秀の夫君がご来駕とあつて母は緊張したという。立ち去る際の雅二を母が撮った写真が残っているが、明らかに賓客扱いだ。日曜日なのに見送る家族は正装し、雅二とは少し離れて直立している。親族との混じりあつた写真とは大違いだ。まだ2歳半の私など「列外」に置き去りであつた。

時は、日本への米英蘭の経済制裁が日に日に厳しくなる1941年1月。表向けは商用だつた雅二の外遊は、インドネシア、マレー、タイ、仏印、海南島と3カ月に及んだ。そして彼の帰国後に日本とビシー政権の下に有る仏印との間で居住航海条約と関税・貿易等に関する協定が調印されている。米英に包囲された日本の僅かな反撃であつた。民間人であつた雅二も、その経歴と人脈を活用して何らかの貢献を試みた大旅行と見てよいであろう。またマレー半島やシンガポール島、スマトラ島において、英国官憲とオランダ官憲の執拗な尾行と通信検索（電話傍受と郵便物検閲）に悩まされてきた三菱商事シンガポール支店長との情報交換は有益だつたに違いない、

ここで興味があるのは、徳田の客人評価である。家

族に示した感想は、「変わった人だね」であつた。外地生活が長く「変わった人だ」とか「海外の人の方が合うのでは？」と評されてきた徳田がこう漏らすのだから、かなり日本人離れしていたのだろう。事実、雅二の志や行動は当時の日本では正しく評価されなかつた。しかしコミュニケーション力が郷党に対して弱かつたのと同様に、各界の指導者に対しても弱かつたのであれば、惜しいことであつた。終戦間際に成立した鈴木貫太郎内閣の顧問に就任したが、南方との交通が途絶した後では雅二の出番はなかつた。

## 5 エピローグ

若くして東京に活躍の場を見出した井上夫妻は、横浜市鶴見の曹洞宗総本山總持寺墓地に墓を求めた。鎌倉時代末期から600年近く石川県能登に在つた總持寺が、大火を機に1911年に鶴見へ移転し、背後の丘陵を墓地に変えて売り出したのである。秀は教授となり、雅二は南亜公司を設立し、ある程度のステイタスを獲得して落ち着いた時期であつた。

ところが墓地入手が早かつたので多忙な夫妻は区画



を忘れてしまう。そこで同寺と親しい卒業生の母堂に伴われ、「恥ずかしながら」と秀は墓探しに行く。応対したのは、「永平大清通解」などの禅研究書を著し、総持寺監院も務めた高僧、安藤文英師であったが、著名な井上女史の来訪と知り、急遽、特別室へ案内したといわれる。だが墓地の入手は決して早過ぎなかった。終戦の翌々年、1947年6月23日払暁に熱海の別荘で雅二は急逝する。当時は数え年から満年齢へ移行する過渡期であったので各紙は71歳と報じている。

秀が追加公職追放者となるのは、この翌年2月であるが、前年1月の教職追放者146名の中の大学教職員70名のうち唯一の女性として指定され、念願の女子総合大学への昇格を見ないまま11月に日本女子大学校校長を辞任していた。そして夫も喪うのである。

この雅二がなぜ公職追放を免れたのかと筆者は問われることが多い。該当項目は7項目からなり、そのE項は「日本の膨張に関与した金融機関ならびに開発機関の役員」と記す。彼が創設から熱を入れてきた南洋協会や東亜同文会、ゴム栽培会社などがこれに当てはまり、また彼は時節柄、雨後の筍のように誕生した東

亜振興会、大日本興亜同盟委員会等の評議員でもあった。

だが彼のコミュニケーション力の弱さもあって、実質的な影響はなかったのをGHQは見抜いていたのではなからうか。理想的な半官半民組織であった南洋協会も、1939年に外務省の外郭団体（財団法人）化するや、雅二等の民間人は役員から排除されてしまう。司政官として占領地へ赴任する外務官僚や内務官僚が、雅二から「イスラム社会とどう共存するか」の薰陶を受ける場など無かったのである。

日英開戦により英国官憲に拘束された徳田はマレー半島、ビルマ、印度の在留邦人と共にニューデリーで抑留されるが、外交官交換船への便乗を許されて翌年夏に帰国し、外国通の政治家・実業家・文化人が構成する「敵国在留同胞対策委員会」で抑留同胞の過酷な環境について証言する。雅二もその評議員を務めていたが、華麗な経歴には役不足であるのは否めない。

満州奉天市生まれ／柏原町出身／元防衛省勤務／（財）平和・安全保障研究所客員研究員

『芋銭泊雲来往書簡集』を読んで

## 泊雲さんのこと

芦尾芳司（横浜市）



平成29年10月13日、14日に、私たちが東京兵庫県人会の俳句同好会（ふるさとひょうご俳句サロン「道草」）が、丹波吟行を実施した。計画に当

たっては、私たちの仲間であり、丹波ご出身の坂上勝郎（前関東氷上郷友会会長）さんに、すべてを立案していただき、吟行当日には、県人会幹事で関東氷上郷友会会長であられる岸本勲さんにもご同道いただいた。当日の午前11時過ぎにJR柏原駅に到着、丹波市俳句協会の方々の温かいお出迎えを受けた。駅前の広場に出て周囲を見回したとき、四方を山に囲まれた盆地である柏原は、屋並、櫓、道、木の根橋、屋敷跡、句碑など、これまでの歴史を大事にして来られた、伝統を重んじる格調ある町との印象を受けた。



泊雲が経営する西山酒造場及び居宅

泊雲さん——関係の書に触れる回数が多くなるにつれ、ごく身近な人であるような錯覚に陥った。厚顔無恥ながら、そのまま錯覚し続けさせてもらって、「さん付け」で書かせていただく。ご寛容の程を——のことは、先ずは、丹波吟行が決まった後、関東氷上郷友会会報『山ざる』の45号と48号に掲載されている文書の「西山泊雲と小川芋銭」と「泊雲と泊月」（いずれも西山裕三さんが執筆されている）を拝読し、吟行の当日は、見学コースであった株式会社西山酒造場にも訪問、西山泊雲さんのお孫さんであり、西山酒造場会長の西山裕三さんご本人から、西山家の俳句の歴史を、西山家の静かな和室で、吟行参加者全員で拝聴し、丹波の俳句歴史の重要な位置を占められていることを改めて認識した。

西山泊雲（本名は亮三）さんは、弟の野村泊月（本

名は勇、早稲田大学卒業と同時に野村家に養子縁組をされる。泊雲さんは明治35年頃、病床の病重き正岡子規の絶筆の句「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」、「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」、「をととひのへちまの水も取らざりき」を読まれて、子規の死を前にしての「客観写生」の迫力に、いたく魅了されたようである。泊雲さんは「子規の後継者を探して欲しい」と、泊月さんに依頼し、高浜虚子を紹介された。弟の泊月さんも一緒に、虚子に俳句を学ぶことになり、ホトトギス派の俳人を目指されることになった。めきめきと上達をして、大正期には何度も会報「ホトトギス」の巻頭を飾られた方であることも伺った。



昨春秋、準備を進めておられた『芋銭泊雲来往書簡集』が、ようやく発刊されて、西山会長さんからご惠贈いただいた。

総頁数547頁、芋銭泊雲来往書簡对照表付のご労作である。会長さんのご挨拶の便箋には、短く「長月御問候」と書かれ、ご尊父（謙三さん、俳号小鼓子）さんの一句「泊雲忌これより霧の丹波かな」が、添えられていた。この句を拝読して、会長さんご母堂である桑子さんが、茨城から嫁いで来られたとき、四方を山に囲まれた氷上郡竹田のような地形の処に、お住まいになられたことは初めてだったので、その霧の深さをとても珍しがられたということを知っていた。そのことを思い出した。書簡集の巻頭には多くの絵や写真も掲載され、整然と纏められているので、繰り返し必要はないと思われるが、印象に残ることを書簡集に副つて、二つほど挙げたい。

大正五年頃、泊雲さんの酒造場で銘酒「小鼓」が醸造されて間もない頃の話である（ここでは、銘酒「小鼓」誕生についてのエピソードは、省略させていただきます）。泊雲さんは、丹波に來られた平福百穂さんに、「現在画壇の中で、最も優れた画家は何方ですか」を尋ねられた。百穂さんは即座に「小川芋銭ですよ」と芋銭さんを推挙された。泊雲さんは、芋銭さんに短冊



丹波の泊雲居における芋銭（左）と泊雲

集の最初に記録されている。何とそこには「音に聞こえし小鼓にて御芳名は承知致居候」と、この先々の芋銭さんと丹波銘酒のご縁を示す一書が遺る。いずれにしても、これが泊雲さんと芋銭さんのお付き合い始まりとなつて、泊雲さんは「芋銭さんの絵で、自らの審美眼を磨こう」と念願され、一方、芋銭さんは「絵の知己とは、絵の出来不出来を知る人でなく、絵と人とを一体に知る人である」と云われていて、無論のこと、泊雲さんがその一人と考へての一言でもあろう。

市販されている俳句本や句会で配布される資料の中に、泊雲さんの句を見つけては、まるで親しい知己に

15枚を送付して、俳画を描いて下さるようお願いする。泊雲さんのこの書簡は残っていないが、芋銭さんが、描かれた俳画を送付する書簡は残っており、書簡

出会つたような嬉しさを覚え、マークを付けたりにしている。あるとき、辞典の「鳶」の欄で、例句として泊雲さんの句が記載されている「落月に鵝尾すさまじや山の寺」の句を見つけ、吟行の日、見学が遅くなつて訪れた夕刻深まる達身寺を思い出した。鳶の聲はなかつたが、まさしくこの晩秋の夕刻の景であつた。また、ある時は「冴え返り冴え返りては春なかば」という句を見つけた。春は三寒四温、寒い日が何日か続くと「寒い寒いと思つているうちに、もう春も半ばになつてしまつて……」という、日々の暮らしの中まで透けて見えそうな句を見つけ、また喜んでしまつた。

書簡集を読み進むに連れて、泊雲さんと芋銭さんがお互いに魅かれて来る様子が書簡の文面から明確になつて来る。泊雲さんも上京の機会を捉えて、茨城の方にも足を延ばしていることが解る。また、季節季節の機会を捉えては、丹波の松茸や野菜など、時には大坂の昆布なども芋銭さんに送付している。芋銭さんはご好意を素直に頂戴した後は、御礼の文を、近況を添えて認めている。病の多いことの辛さ、これを克服して絵に精進される様子が文面から伝わってくる。親しく



なるにつれ、芋銭さんは「瓶5本ほど所望したし」とか、「もし大阪へお使いの機会があれば、板昆布を少々送って欲しい、ついでに造られているお酒も3本ほど」という書き方のときもある。泊雲さんは、泊雲さんで、茸の季節には、必ずと言っていいほど、丹波の松茸を添えて芋銭さんに送られている。芋銭さんは嬉しかったに違いない。

昭和2年6月、日本の経済恐慌の折りは、泊雲さんも資金のやりくりで困られたのであろう。この時期の芋銭さんの泊雲さんを励ます書簡の文面には次のようなものがある。

「是は確固たる精神が心身の中、心を取ることを申候  
出ぬ化物を未だ恐るべからず もし出たらば獅子奮迅



泊雲句集（芋銭 装幀 跋）

の勢を以て之に當り 我力及ばざるを知らば争戦中より超脱して静かに考慮し 大なる佛神力にすぐること 専要に候（以下中

略）

人間の争戦場は時々戦場より飛超へ我戦場を鳥瞰的に打ながめ候丈の餘地を作るべきものに候（以下略）」  
ここは幸いにも書簡が揃ったのだけど、泊雲さんは、これに対して次のような返書を出している。

「御高論拜誦幾度も幾度も繰り返しくりかへしかみしめかみしめ申候 御芳情感銘仕候 御承知の通りの無学不識に候へ共 當って砕けるといふ事は常に心にかけ居り 或る信念は持ち居るつもりに御座候 しかしながらたやすく砕ける積りにも無之又かぢりつく所存も御座候 兎に角捨て身でかかる決心は深く考え居り申候（以下略）」



牛久崎市指定文化財 小川芋銭記念館 雲魚亭

この後、子どもたちも元気で遊んでいること、安定を待って、また身辺に余裕を得次第、ちよつともお伺い申し上げると、心情を吐露されている。この時期には頻繁に書簡が往来し、お二方の絆は一層深まった

ように思われる。泊雲さんの書簡は、この昭和2年を境に、芋銭さんの宛名は、小川様から小川先生に変わっていった。

お二方の友情といつて良いのか、関係は素晴らしく、だからこそのお子様同志の二組のご婚姻が成り立たれたのだと思う。この来往書簡集は、読者に温かい豊かな気持ちを読後に持たせてくれ、訪問した丹波の情景を甦らせてくれる。末尾に一昨年のお吟行のときに、竹田の方から青垣方面に向かうときだったろうか。高速道路から詠んだ拙句をご披露して擲筆としたい。

豊の秋村に千余の暮らしあり 白然

(神戸市出身／東京兵庫県人会 顧問、県人会俳句同好会、ふるさとひょうご俳句サロン「道草」代表)



撮影・井上 巖

## 丹波市は女子高校球児の聖地

荻野祐一

(丹波新聞社社長)

真夏の太陽が容赦なく肌を焼く炎天下、たくましく日焼けした女子高校生たちが硬球を追う。グラウンドに女子高校生の若さあふれる声が響き渡る。丹波市の夏の風物詩の一つになった「全国高校女子硬式野球選手権大会」が今年も、市島町中竹田のスポーツピアいちじまで開催された。23回目を数えた今大会には、北海道から鹿児島県まで全国各地から史上最多の32チームが出場。7月26日に開幕し、8日間にわたる熱戦の末、栃木県の作新学院が優勝を果たした。

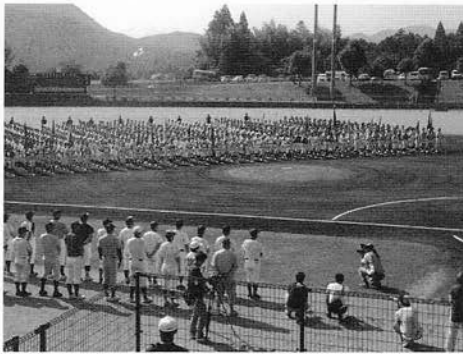
女子のプロ野球チームができるなど、野球に親しむ女子はもはや珍しい存在ではないが、市島町で初めて大会が開催された当時は、まだまだ選手が少なく、社会的認知度も低かった。そんな黎明期から市島町では大会が開催され、女子硬式野球を支えてき

た。

なぜ、市島町で大会が開かれるようになったのか。その誕生から稿を起こしたい。

### 一本の新聞記事から始まった

氷上郡6町合併前の2000年春、スポーツピアいちじまが完成した。両翼（レフト、ライト）が105メートル、中央（センター）が122メートル。収容人員は約2600人。ナイター設備を有し、電



今年7月26日に開幕した全国高校女子硬式野球選手権大会の開会式

光掲式式のスコアボード（スコア表示のみ）も整えていた。大会は、スポーツピアいちじまのオープンゲイベントとして同年4月、開催された。全国高校女子硬式野球の



第1回選抜大会だった。

話はさかのぼる。スポーツピアいちじまの工事が進んでいた1998年、地元の草野球チーム「市島シニアクラブ」の監督を務めていた堀秀政さんが、一本の新聞記事に目を止めた。前年の夏に初めての全国高校女子硬式野球大会が東京で開催されたことを伝えた記事だった。興味を持った堀さんは、大会の創設者で、全国高校女子硬式野球連盟を立ち上げた四津浩平事務局長に連絡を取り、出会いに行った。



開会式での選手宣誓

四津氏は古美術

店を営みながら、日本の女子硬式野球の礎づくりに奔走した人物だった。そのために私財を惜しみなく投じていた。その額は、家が2軒建つほどだったらしい。

堀さんは、四津

氏の情熱に感銘を受けるとともに、「市島で女子の野球大会をしてはどうか」と考えた。ちょうどスポーツピアいちじまのオープンイベントを模索していた頃のことだった。堀さんのアイデアに市島町内の関係者たちは「それは、おもしろい」と、がぜん乗り気になった。先述の市島シニアクラブ、市島町体育協会など、町内の関係団体で「市島町スポーツ交流活性化協議会」を結成。四津氏に出会い、選抜大会の開催を持ちかけた。

「夏には東京都福生市で大会が開かれているが、男子と同じように、春の選抜大会を開催してはどうか。その選抜大会を、わが市島町で開きたい」。この申し出に四津氏は「春と夏と年2回、大会があれば、生徒たちにも張り合いが出る」と喜び、市島町の選抜大会開催を歓迎した。

ただ開催には、一つの難問があった。それは費用の捻出だ。当時の選抜大会は、市島町が女子硬式野球チームを町に招待するという形をとっていた。出場チームからすれば、どうして山奥の丹波まで行かなければならないのか、という抵抗感があったとし



決勝戦で熱い戦いを見せる選手たち

ても当然のことであり、各チームの交通費や宿泊費などの費用を補助しなければいけなかった。その費用は400万円から500万円とみられた。市島町スポーツ交流活性化協議会の会員らは、町長に直談判。幸いにして理解が得られ、町議会でも大会開催にかかる予算案が可決された。

2000年4月1日、第1回選抜大会を開催。主催者として市島町スポーツ交流活性化協議会も、高校女子野球連盟とともに名を連ねた。出場チームは8チーム。部活動として正式に取り組んでいる学校

は5校に過ぎず、ソフトボール部が出場した急ごしらえのチームもあった。開会式には、元プロ野球選手で高校女子野球連盟の顧問を務めていた江本孟紀氏が来賓として出席した。

江本氏は、第1回選抜大会の記念誌にあいさつ文を寄せ、「硬式野球に取り組んでいる女子高はまだまだ少数であり、世間の認知度も決して高いとは言えません。しかし、確実に拡大の方向に向かっていきます」と書いた。この文章の通り、女子の硬式野球はその後、着実にすそ野を広げていった。

### 聖地の惨状に駆けつけた女子球児

2004年から春の選抜大会に加えて、夏の大会も市島町で開催するようになった。四津氏から「春も夏も市島町でお願いできないか」との申し出があったのである。同年、無事に夏の大会を市島町で開催。高校女子硬式野球の大会が軌道に乗ったのを見届けた四津氏は、この年の秋、63歳で他界された。

春と夏の年2回、市島町で大会を開催し、丹波市はまさに「女子高校野球の聖地」となった。しかし、



優勝し、胴上げをして喜ぶ作新学院の球児たち

2014年から埼玉県に春の選抜大会を移管した。これは、北海道や東北にも女子硬式野球を広めたいとの判断からだった。

この年の8月、夏の大会を終えてまもなく、丹波市は未曾有の災害に見舞われた。「8・16丹波市豪雨災害」である。高校女子硬式野球大会が開かれている市島町の被害がとりわけ大きく、大会の開催球場であるスポーツピアいちじまの外野部分は、被災地から運び込まれた大量の土砂や流木で埋め尽くされた。

各地から多くのボランティアが被災地に駆けつけたが、その中には女子球児もいた。関西圏の女子高校野球部を中心に現役の部員たち、さらには高校時代に大会に出場し女子プロ野球で活躍している

選手もいた。被災家屋の床下にたまっていた土砂を泥だらけになりながらスコップでかき出すなど、普段、野球で鍛えている体力を生かし、献身的に作業に励んだ。その姿は、被災者や大会関係者を感動させた。第1回選抜大会の開催から14年が過ぎ、丹波市は、女子球児にとってまぎれもなく聖地になったことを実感させた。

大会が始まった初期の頃は、出場チームを集めることにも関係者たちは苦労した。9人のメンバーがそろわないというチームに「何とかしますから」と出場を依頼し、他の出場校からメンバーを借りて9人を確保したことがあった。「1日分の宿泊代しか捻出できないから、大会1日目に出場させてほしい」という願いも受け入れた。しかし、こんなエピソードも今では昔話になった。

選手の実力も格段にレベルアップした。パワーが増し、スピードもアップした。しかし、「負けても泣き、勝っても泣く」という女子球児の純真な姿は昔も今も変わらないという。

# 山ざる研究

## 丹波史研究

### 阪鶴鉄道唱歌を知っていますか

徳田 八郎衛（浦安市）

#### 1 柏原中学校で教えられた

新井小学校から柏原中学校へ入学して間もなく、面識のない、ある三年生に声をかけられた。「生意気だ」といじめられるのかと思ったら、やさしい声で「君は本校の図書室の本を全部読んでしもたそうだが、鉄道唱歌知ってるか」と尋ねられた。「イエスサー」と第一節と第二節を一気に歌ったら「エライ、流石だ。だが、この福知山線にも鉄道唱歌があるのを知ってるか」と聞いてくる。へー、そんな歌があったのか。流石は柏原の町に住む上級生だ。エライ！ ムラムラと尊敬の念が沸き上がり、「存じません」と、校長先生ぐらいにしか使わない最上級？ 敬語で応えた。

「入学記念に覚えとけ。こんなの知ってるのは年寄だけだよ」と伝授されたが、この先輩も谷川駅と柏原駅の節しか歌えないし、やがて私も忘れた。だが谷川駅の後半と柏原駅の前半が繋がっているの、この個所だけは以後も忘れることはなかった。

「♪♪鐘が坂下くぐりぬけ 出づれば見ゆる柏原の」  
「三重の塔は空をつき、八幡の宮、神さびつ♪♪」

#### 2 図書館にも福知山線の歌が無い

大型書店も図書館もないのが悲しかった郷里を離れ、「都会」に住んだお陰で文献調査には困らなくなった。調べてみると山陰線にも関西線にも鉄道唱歌がある。だが福知山線の歌を記載した書籍は無い！ それもそのはず、明治33年5月に東海道線の鉄道唱歌を発表した大和建樹（作詞）おのおのうめわかと多梅若（作曲）のコンビは、11月までに次々と第二集「山陽―九州」、第三集「奥州―いわき」、第四集「北陸」、第五集「関西―参宮―南海」を刊行したが当地は見捨てられている。私は無知だったが、鉄道ファンには周知のことだった。

60年後のテレビが「兼高かおる世界の旅」や「NHKシルロード」で未知の土地を視聴者に知らしめたように、七五調のリズミカルな鉄道唱歌は、名もなき駅名を通じ各地の名所を全国民に伝えていた。当然、爆発的な唱歌ブームを巻き起こす。気の毒なのは鉄道開通が遅れた地域である。飛騨高山などは大正中期になっても高山線が完成しないので、県庁のある岐阜市へ赴くにも先ず富山へ出て北陸線に乗り、石川・福井・滋賀と四県を経ないと行けなかった。不便でもあるし鉄道唱歌にも歌われないから悔しかったに違いない。

一方、阪鶴鉄道（後の福知山線）の方は、ローカルな作詞家が制作しているので、図書館に巡回程の歌集には成らなかつたらしい。せつかく明治32年に開通しているのに、これでは昭和9年に全線開通となる高山線と同じだ、と嘆いていたら、郷土史研究に熱心な級友、田中長典君（宝塚市在住）が、尼崎郷土史研究会の田中敦氏が「地域史研究（尼崎市地域研究史料館紀要）」110号、2010年9月に「『阪鶴鉄道唱歌』紹介」と題する史料紹介を寄稿されているのを知らせてくれた。

### 3 作詞・作曲者は成松育ち

同氏の解説は、尼崎市地域研究史料館が所蔵する「阪鶴鉄道唱歌」と、それも含んだ「阪鶴鉄道唱歌関係史料」に関するものであるが、鉄道事業に関する数々の法令や時代背景を紹介した立派な論文である。ここではすべてを紹介する紙数がないが、作詞・作曲者の荻野哲太郎について記そう。

大正6年刊行の「有馬郡人物史」によると、荻野は慶応2年に日野嘉助二男として大阪で生まれ、母の死後、成松の荻野六兵衛の養子となり、明治16年神戸師範（後の御影師範）を出て郷里で小学校訓導となり、同23年に有馬高等小学校へ移る。同36年に新設の三輪小学校校長となり、大正13年に58歳で亡くなった。教育行政で多忙な中、有馬郡と氷上郡の二正面で大活躍する。明治17年頃に東京で結成された有馬会の雑誌発行人となり、貴重な出版経験を得た。詩歌、茶、篆刻と趣味は豊富で、「攝丹子」の雅号は鉄道唱歌でも用いられている。ほかに「丹波愚里」というユーモラスな雅号も使っている。日野は氷上郡に見当たらない姓であるが、父方が母方が成松に縁があったとみてよい

であろう。

#### 4 阪鶴鉄道唱歌の概要

本唱歌は、早くも明治35年に大阪で二千部が印刷出版された。単価は6銭。25部が学校関係へ配布されているが、すべて有馬郡の小学校だ。作詞・作曲者は本名で明示され、すべての歌詞に曲1と曲2がある。曲2は荻野によるもので、曲1は、作曲を依頼した多梅若の曲のようであるが、その作曲者として公表することを多が辞退した書簡が残されている。

なお、上級生が歌ったのは曲1でも2でもなく、全国版鉄道唱歌のメロディだった。初めからこれを用いていたら、もつと広がったかもしれないが、それでは替え歌だということになり、明治32年制定の著作権法にも違反する。出版業務に通じた荻野は、ここにも細心の注意を払い、面識のない多梅若（東京音楽学校教授）に作曲と作詞部分の点検を依頼している。

「はしがき」には「攝丹子」の筆名で「各地の鉄道唱歌が次々と発表される中、未だに阪鶴鉄道の唱歌が生まれぬ。それなら摂津に生まれ丹波に育ち、いささ

か沿線を知っている自分が作ってみよう」と決意を披露している。また「児童への地理教育の一助に」という抱負も記す。

そこで本唱歌の内容であるが、節と駅は必ずしも対応していない。また梅田・神崎間はすでに開通し、阪鶴鉄道の実質的な起点は神崎であるため、大阪とは1だけで淡白に別れた後、神崎川や支線の駅まで取り上げて尼崎紹介に2から6まで充てている。そして福知山・舞鶴間が未完成であるため、実質的な終点である福知山の賛歌に38から41まで充てた後、人力車で大江山、元伊勢神宮へ立ち寄り、由良川まで戻る。天津から汽船「由良川丸」で河口の由良まで下り、さらに宮津・天橋立へ向かう。最後に舞鶴軍港へ到着し、54の「思えばうれしい今の旅 かかる景色のあるぞ」とは、知らで過ごせる友だちを、誘ふて又も見に来なん」で終りとなる。

丹波市の有人駅は柏原だけになった。売店も閉鎖された。せめてもの景気づけに、銀座駅や新橋駅に倣って本唱歌を列車到着時に流してはどうか。駅員に提案したが、誰も本唱歌を知らなかった。

5 篠山から福知山まで

27 篠山駅より尚ほ一里 町に入りなば西の方

高きは城の跡なるぞ 上りて見よや土地のさま

28 書読む声は鳳鳴か 遊べる稚児は王地園

弁天瀧も見たけれど 路遠ければ又来なん

29 後小松帝の賜はりし 勅岳掲ぐる文保寺

大山駅より小半里 拝めや序の道なれば

30 ここより又も分けて入る 山は三笠か青芝に

包まる様のうつくしき 塵一つだに見え分かじ

31 岩間をうねり行く水は 底の小石も数ふべく

心地もいつか清らかに 下瀧までぞ下りける

32 又逢ふものは川ならぬ 谷川越えて音高き

鐘が坂下くぐりぬけ 出づれば見ゆる柏原の

33 三重の塔は空をつき、 八幡の宮、神さびつ

中学校に来て学ぶ 故郷の友の顔見たや

34 石生よりおる人々は 出石、豊岡、城の崎の

温泉に通ふ旅なるか 其道すがら、ある名所

35 香良の瀧に夏はなく 春は雲ぬふ糸桜

高源寺には秋早く にしき色どる紅葉あり

36 黒井の駅の前面に 立つ城山は赤井氏の

明智のために陥されし水ぜめ火ぜめの跡とかや

37 市島 竹田行く人の からき目見しも夢なるか

塩津峠も底くぐり 今はまたたく汽車の旅

38 弓手に閃く稲妻は 国の守りの軍隊が

剣のさえか勇ましき 汽笛の声にふりむけば

39 はや本道の終点の 迎へて笑ふ福知山

汽車より下りて一休み 昼の食事をしたためん

40 ここは丹波の一都会 山陰道の要地にて

水陸共に便利よく 商業いとも盛なり

41 町は白目に集りて 其真中は広小路

祇園の宮の御前より 俤に乗りて小手かざす

最後に、各地の地方自治体がハコモノに走り出すより10年も早い1975年に立派な地域研究史料館を設立し、2001年には史料館ウェブサイトも開設した尼崎市に敬意を表すとともに、田中敦会員を始め、尼崎郷土史研究会のご発展を祈念するものである。

(満州奉天市生まれ／柏原町出身／元防衛省勤務／(財)平和・安全保障研究所客員研究員)





■会員が書いた本

原谷洋美 詠

藤原ひさ子 書・英訳

## 挽歌集『冬の衣袴』

2500円

くく想いをかたちにくく

〈夏袴冬の衣袴折々の息子の笑顔顔  
たせし母は〉の歌より名付けられた挽  
歌集を手にした時、その装丁の美しさ  
にしばし見とれてしまった。書家藤原  
ひさ子さんは、従兄弟伯父にあたる橋  
間直治さんの戦地から母きぬさんに宛  
てた便り、戦死についての書類一式が  
古びた箱に入れられ、仏壇の奥に眠っ  
ているのを見つけた。それらが放つ、  
声なき声を何とかしたいと、友人であ  
る歌人原谷洋美さんに短歌にして欲し  
いと依頼された。白縮緬に包まれたそ  
れらが発している声を聞きとめ、二か  
月後、六十五首の短歌が生まれた。

その作業は想像を超えるエネルギー

を要したであろう。会ったこともない

人の魂に寄り添わなくては歌は詠めな  
い。直治さんから送った母への感謝が  
書かれた葉書や戦死公報などの書類を  
もとに原谷さんが詠まれた歌の数々。

母が送った干し柿を手にしたときの

直治さんの心に寄り添えば

〈母の系まひ匂ふ干し柿朱に映ゆる

ふるさとの冬つかまへたかる〉

〈干し柿を作る手先をまほら（真秀）

とぞ君は喰めるか春野に居るか〉

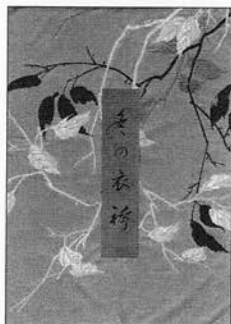
と歌う。

物の不自由な中でようやく手に入っ

た氷砂糖。

〈氷砂糖ふふめば丹波の底冷えは

溶けてゆきたり母は笑まひぬ〉



と直治さんの思いを。

「冬の衣袴」「和田村の六月」「白珠  
となり」の三章の表紙それぞれに、気  
品のある和服の生地が使われている。  
原谷さんの歌は、藤原さんの手によつ  
て、様々な素材に、流麗でたおやかな  
文字がしたためられた。あるときは優  
しい筆遣い、ある時は

〈まる秘判が押さるる戦死広報よ

何を秘密にせよと言ふのか〉

の歌に見られる怒りのこもった筆遣い  
で。

歌と書が気合を一つにして、直治さ  
んときぬさんの想いを伝えることで見  
事に『冬の衣袴』は完成した。さらに  
行き届いた編集と構成、素晴らしいカ  
メラワークが、この本をさらに格調高  
くしている。昭和の反省をこめて平成  
は戦のない時代であった。令和の時代  
にもそれが受け継がれてゆくようにと  
の願いも伝わってきた。

（各務原市 清水雅子）



■郷土について書かれた本

山本一生著

「水を石油に換える人」

——山本五十六、不覚の一瞬——

文芸春秋 定価1770円（税別）

昭和14年1月7日（土）、霞が関の海軍省の狭い地下室で水を石油に変える実証実験が「街の科学者」たちの手で行われた。この珍案に肩入れしてきた山本五十六次官が先ず挨拶し「実験の目的は、これがインチキか否かを究めることだ」と述べる。航空本部教育部長の大西瀧治郎大佐を委員長とする9名の委員が立ち会うが、大半が兵科士官、特に航空関係者で、軍需局第2課から参加した中佐だけが化学者だった。商工省燃料局や軍需局へ出向中の将官や佐官が「物笑いとなる実験は止めよ。」と続々抗議するので彼らを締め出したのだ。

先生と呼ばれる詐欺師の親玉が「暴

漢に襲われた」と称して姿を隠し、元東北帝大助教授の東洋化成工業社長が代行する。霞ヶ浦航空隊時代の上司、山本から詐欺師集団を後援するよう命じられた大西は、最初はインチキと疑うが、この社長のような科学者も仲間なので次第に期待するようになる。事前実験でも連日付き合ひ、事件後の報告書にも「尊敬すべき科学者」と記している。社運の傾いた同社は本気で「水から石油」に取り組んでいた。

だが実験3日目となっても石油は生じない。大西が化学者中佐に相談すると「監視が厳しいので得意の手法がでないのだ。監視を緩めてすり替えさ



せ、実験成功の後で追及しましょう。」この献策により実験は「成功」し、追及も可能となった。大西が書いた「顛末報告書」は陸海軍関係部局、商工省、警視庁等へ送られたが、陸軍省宛のものだけが戦後の焼却を免れた。

詐欺師集団は警視庁に逮捕されるが、社長だけは大西の自宅で静養し警視庁の承認を得て帰宅する。自分自身が規格外れの「大西」は、このような科学者が日本に必要と庇護したのかもしれない。戦後、化学工業会の重鎮となった技術士官たちは化学雑誌や「丸」に寄稿して「聖将山本」を糾弾した。「科学素養がない」と山本や大西を嘲笑するのは簡単だが、日米戦争を避けるためにも必死で石油を追い求めた彼らを、怪しげな代替エネルギーや地震予知にする我々が非難できるだろうか。

（徳田八郎衛）



■郷土について書かれた本

大西比呂志著

「伊沢多喜男

—知られざる官僚政治家—」

朝北社出版 定価3200円（税別）

我が郷土出身の著名人に関する著作は、一部を本欄でも紹介してきたが枚挙に暇がない。困るのは、それらの多くが「偉人」「先生」として扱い、畏敬の対象としていることだ。正座して読むことになる。ところが他の人物の伝記等に彼らが登場すると、奉らずに描かれているから読むのも楽である。本書の紹介もそのためだ。高遠藩出身の伊沢多喜男（1869—1949）は、第三高等学校、帝国大学法科大学を経て内務官僚となり、各県知事、警視總監、貴族院議員、台湾総督、東京市長、枢密顧問官を歴任し、官僚政治家の大御所と呼ばれながら数々の内閣交代劇に関わった。当然自分も大臣就

任を要請されたが、応じることなく「キング・メーカー」に徹する。臍員役者の加藤高明、浜口雄幸、近衛文麿、幣原喜重郎等を宰相の座につけて背後から動かした。

1916年、勅選の貴族院議員となつた伊沢は、野党再編成に伴う憲政会結成に尽力したが入党せず、官僚派議員を中心とする「幸倶楽部」に入会し、ここで柏原藩出身の田健治郎と親しくなる。藩閥政治を近代的な官僚が支える議政政治へ転換する熱情で二人は結ばれていた。通信大臣を務めた後、初の文官出身台湾総督となった田と、初代の川路利良大警視以来、殆どの警視

總監が特別任用制による藩閥系、特に鹿兒島出身である警視庁を、初の高文合格者の總監として大改革した伊沢は、年代を超えた同志だった。

官僚時代から政友会が大嫌いな伊沢は、それを脱会した田だけでなく、常に立憲国民党・立憲同志会・憲政党・立憲民政党と非政友会系の政党に所属してきた齋藤隆夫（兵庫5区）代議士とも親交を深める。齋藤も小さい出石藩出身だ。1940年、いわゆる「反軍演説」により政友会だけでなく所属する政友会からも齋藤が辞職勧告を受けた際、伊沢は援護に奔走したが、多勢に無勢で齋藤除名動議は採択された。その3か月後には各政党も解党して大政翼賛会体制に向かうのである。

（徳田八郎衛）



◆芦田 重秋さん

元氣にしておりますが今後は高齢の為失礼させていただきます。ご盛会をお祈り申し上げます。最近子供達の家近くに夫婦で転居いたしました。

◆足立 明子さん

大変お世話になります、どうぞよろしくお願いたします。

◆足立 かをるさん

いつも「山ざる」お送りいただき有難うございます。病氣もせず健やかに歳を重ねてきました。来年の1月に92歳を迎えます。皆様に「お若いね」「笑顔が素敵」とか「元氣を頂きます」など言ってお下さって本当に素晴らしい年月を過ごしております。最高の人生と感謝と有難うの日々です。皆様によるしくお伝えください。マンシヨンのケア便りにも元氣な私を掲載していただきます。

◆足立 謙悟さん

いつもお世話になっております。寄る年波に日々老化を実感しております。守備範囲を少しづつ狭めております。ご自愛の程を。

◆足立 敏晤さん

いつも大変お世話になっております。日程の都合がつかず大変失礼いたします。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆足立 美都子さん

シルバーカーを頼りに出掛けておりますが、電車で1時間は無理になってしまいました。年には勝てません。「山ざる」は毎年楽しみにしております。

◆足立 洋子さん

今年こそは参加しようと思つていましたが、体調を崩してしまいました。年を過ごすにつれ体調管理がなかなか難しいです。会の成功と皆様の御健康を祈念いたします。

◆荒木 輝雄さん

郷里を離れて64年になります。何年たつても故郷の小中学時代の事が忘れられません。郷友会楽しみにしております。少し腰が痛いです、年のせいですがね、よろしく。

◆安達 博子さん

夫(安達 陽一)は29年7月に他界いたしました。長い間お世話になり有難うございました。郷友会の皆様の益々のご発展をお祈りしております。

◆飯田 光雄さん

「山ざる」有難うございました。今年には皆さまにお会い出来るのを楽しみにしております。

◆石倉 良介さん

盛会を祈っております。

◆石橋 昭彦さん

「山ざる」49号インタビューコーナーの記事中58ページ、会長は石橋次郎

八と記載していただき有難うございました。但し次郎八は間違いで治郎八が正しいので訂正させていただきます。石橋治郎八は私の祖父です（昭和46年没）。「山ざる」が長く続いて喜んでいいることと思います。

◆植木 十和子さん

「山ざる」ご送付とふるさとの会のご案内いただき有難うございました。外出することも少なくなってきました。昨今ですが、元気でいる間は出席して同じ故郷を持つ皆様にお逢いできますことを楽しみにしております。お世話いただけます皆様に感謝いたします。

◆上野 忠明さん

この8月、早期胃ガンが判明し、即入院手術、約2週間で退院できりハビリ中です。今回残念ながら参加できません。いつも「山ざる」を懐かしく拝読、丹波出身の素晴らしい人がなんと多いことか、感心！感謝です。

◆浮田 信子さん

秋が深まってまいりました。幹事の皆様、関係者の皆様いつもご案内ありがとうございます。郷友会の皆様にお逢いしたく懐かしんでいるのですが、年齢を重ね、膝関節に痛みを覚え外出を控えざるを得ない現状です。草花を育てることを楽しみながら元気に生活しております。ご盛会を、皆様のご健康ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

◆内堀 祥司さん

いつもご案内ありがとうございます。都合がつかず欠席いたします。皆様によろしくお伝えください。

◆梅田 節二さん

丹波での松茸ご飯の美味が（昨年青垣中同窓会）忘れ難く、今年も「ユーピア篠山」泊りにて今月帰省いたします。毎回有難うございます。

◆大石 佐代子さん

読みごたえのある「山ざる」有難う

ございました。立派なゲストのお話も聞きたいのですが、都心に出向くのがだんだん苦手になってきました、欠席させていただきます。

◆大島 信子さん

いつも「山ざる」有難うございます。懐かしい地名が出てくると子供の頃の事が浮かんできます。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆大塚 秀式さん

「山ざる」楽しみにしています。氷上町を出て63年になります。先日小学校の同窓会京都に参加しました。6年振りに見る同級生の顔と名前を全然覚えていませんでした。男5人女5人の出席でしたが76人中26人が亡くなっております。人生残り少なくなりました。

◆大坪 眞子さん

いつもありがとうございます。皆様にお会いできるのを楽しみにしていま

す。

◆粕谷 迪子さん  
篆刻をやっております。

◆岸本 里子さん

何時も色々お世話になっていています。講演も興味があり出席したいと思っておりますが、腰の調子が思わしくなく残念ながら欠席いたします。「山ざる」いつも楽しく読ませて頂いています。

◆北村 貞子さん

パッチワークキルトの掲載有難うございました。これからもキルトを楽しみながら元気で過ごせるよう願っております。残念ながら今回は欠席ですがご盛会をお祈りしています。

◆久呉 道子さん

「山ざる」拝受。お若い皆様の御活躍振りを嬉しく拝読しつつ、編集下さいます皆様方に衷心より感謝申し上げます。ふるさとの会のご盛会を念じ上

げています。ありがとうございました。

◆河本 幸子さん  
皆様とお出合い出来る事を楽しみに致しております。

◆小竹 政孝さん

欠席させていただきますが、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

◆近藤 利春さん

お世話になっております。かねてから尊敬していますコンピュータービジネスの研究の金出さんが講演されるとのことでは是非とも参加させていただきます。宜しく願ひします。

◆齋藤 陽子さん

何時も連絡ありがとうございます。今回も予定があり欠席となります。元気にしています。郷友会の発展をお祈りいたします。

◆坂上 登さん

いつもご案内を頂き誠にありがとうございます。参加できませんがご盛会をご祈念申し上げます。

◆坂本 徹二さん

ご盛会をお祈りしております。

◆笹倉 鉄平さん

当日は関西出張の為出席がかなわず残念です。ご盛会を祈っております。

◆正呂地 悟さん

平成最後のふるさとの会ご盛会を祈念いたします。私も夫婦は変わらず元気に過ごさせていただいています。只、猫の方は老いて来ており、内2匹はこの夏亡くなりました。通院の負担は無くなりましたが、残った猫達と仲良くすることで悲しみが少しずつ癒されていきます。皆様の御健勝を祈ります。

◆杉岡 明美さん

「山ざる」有難うございました。充

実した内容で毎回楽しみに読ませていただいております。今回のふるさとの会は趣味の合唱の定期演奏会と重なり欠席いたします。ご盛会をお祈りしています。

◆勢川 雅弘さん

87歳になっていきますので、寝たきりにならないようにと思い、何年か前より自転車をもめて毎日2時間ほど、ゆっくりですが杖をもつて外を歩いています。

◆高見 尚志さん

連絡有難うございます。

◆田中 一美さん

7月中旬、右膝骨折、腰椎骨折、転院して2か月リハビリ入院、11月28日退院しました。いつも欠席ばかりですが今回も欠席で宜しくお願いいたします。

◆千葉 淳子さん

楽しみの「山ざる」有難うございました。皆々様のご健康をお祈りしています。

◆塚口 恭一さん

いつもお世話になり有難うございます。夫婦其後期高齢者の仲間入りをしました。夫が、大病なく元気に暮らしています。盛会をお祈りします。

◆辻 英子さん

何時も連絡有難うございます。なかなか出席が出来なくて申し訳ありません。当日予定が入っており欠席させて頂きたく思っております。

◆土井 崇司さん

当日のご盛会祈念いたしております。

◆西ヶ谷 厚子さん

郷友会の事務局の方々には維持するのにあたり大変お世話をかけています。私は高齢になり「山ざる」に目を通す

ことも困難になりました。退会を願っています。色々とお世話になりました。

◆西川 宣孝さん

終活作業をきっかけに既刊(20年前から)の「山ざる」の随想、エッセイ、丹波史等を反芻しながら故郷を偲んでいます。歴代編集委員の皆様の御尽力に感謝申し上げます。

◆西村 昇さん

いつもお誘いを受け有難うございます。家庭菜園で野菜を育て元気に過しております。会のご盛会をお祈りしています。

◆野垣 有さん

当日は宇都宮に出掛ける用があり、残念ながら参加することが出来ません。役員を引き受けておりながら申し訳ありません。

◆野村 節三さん

昨年来より体調不良で、月数回は地



元の県立病院（循環器、泌尿器、消化器の各科）へ行き検査を受けています。今回は欠席いたしますが盛会を祈っております。

◆灰野 悦昭さん

ご苦労様です。元気にやっています。寄る年波、病弱にならないように気を付けて生活しております。

◆細川 倫夫さん

毎号の事ですが、「山ざる」の表紙に見入っています。80歳になり健康寿命を継続したいと思います。

◆三原 恭二さん

三原は今年3月逝去いたしました。生前賜りましたご厚情に心から御礼申し上げます（奥様より返信）。

◆森田 栄子さん

お世話様です。今回は都合がつかず欠席させていただきます。ご盛会をお祈りしています。

◆八木 信行さん

ご案内ありがとうございます。残念ですが、出張中に付欠席いたします。

◆山口 艶子さん

12年間仕事の為赴任した焼津市から横浜に戻ってきました。「山ざる」編集に携わって頂いている皆様いつもありがとうございます。

◆山口 敏之さん

オランダ単身赴任中に付き欠席とさせていただきます。長くなりました、もう7年になります。ご盛会をお祈りしております。

◆横谷 喜代孝さん

「山ざる」有難うございます。ふるさととの会に出席できなくとも、書面で望郷の念を適えて呉れる冊子は有難く誇りに思っています。今後とも宜しく願いました。

◆吉見 益輔さん

いつもお世話になつております。残念ながら欠席させていただきます。皆様によりしく、ありがとうございます。ありがとうございました。

◆余田 幸夫さん

種々の企画に感謝いたします。残念ですが先約があり欠席いたします。

◆米澤 紀成さん

業務の都合上出席できません。大竹棋聖との面談機会を残念ながらあきらめざるを得ません。益々の御盛況をお祈りいたします。



撮影・岡 吉明

## 令和元年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

時代も改まりました令和元年の東京支部総会が、7月13日(土)学士会館にて開催されました。今年の幹事学年は、昭和48年卒25回生の皆さんです。

東京支部の会員に加え、昨年は集中豪雨などの影響により丹波からのご出



総会風景



支部長 谷 いたしました。ソプラノ歌手足

席が叶いませんでした、竹内柏陵同窓会会長、井上柏原高等学校校長、谷口丹波市長、本部副会長ほかの皆さまが揃いました。他支部よりは仁藤阪神支部長・山名京滋支部長・畑東海支部長・奥山篠山副支部長、兵庫県からも竹村東京事務所長・大西東京兵庫県人会常任幹事など、180名の誉てないほどの皆さまが集い盛会に催すことが出来ました。

総会では会務報告、会計報告が行われ、承認されました。

多くのご来賓を代表し、総会と懇親会に竹内同窓会長、井上校長、谷口丹波市長、竹村事務所長からご挨拶をい

ただき、母校とふるさとの現況に思いを新たに



に夢を乗せました。山名京滋支部長の乾杯のご発声で始まった懇親会では、各テーブルで学年や出身地を越え思いきり丹波弁

立さつきさまには華あるスピーチをいただき、丹波市の歌制定に伴う秘話として、歌詞に丹波の地名を織り込まないことで未永く親しまれる愛唱歌を目指したことを伺いました。また、今年も有難く日本酒の差し入れをお預りした(株)西山酒造場さまが紹介されました。

恒例の柏陵セミナーは、幹事学年の考古学研究者村上泰樹さんによる講演『考古学から見た丹波の歴史。3万年前から奈良時代まで』をいただきました。村上さまは長年にわたり県の埋蔵文化などの調査活動に従事されており、出席者は、ナウマンゾウが生息していた古代の丹波と丹波各地の地名の由来



幹事代表・野垣有

の山口敏之君  
(オランダ)、企  
業トップの山名  
昌衛君(東京)  
と野垣(東京)

の会話を楽しみました。懇親会の最後は、名残が尽きないまま恒例の母校校歌と応援歌の大合唱。幹事学年で応援団出身の太下さんのエールと仁藤阪神支部長の万歳三唱により来年の再会を約し、お開きとなりました。

今年の幹事学年は、本部や各支部から多くのご参加があり35名の同期の皆さんが揃うなど、熱意溢れた運営をいただきました。

## 幹事学年を終えて

総会に向けた取り組みは、始めに名簿を頼りに連絡を取り合い、学年同窓会をひらき結びつきを広げることでした。

幹事学年の支部理事は、海外赴任中

の3名という心許ない状況からの出発でした。足立由美子さん(東京)、関多加子さん(諏訪)、松永則子さん(松本)、高見美智子さん(北杜)など女性陣の絶大な協力で何とか二回目の同窓会を開催し体制を整えていくことができました。

昨年8月、講師依頼の村上泰樹さんを訪ねて姫路の県立歴史博物館に出向きました。これは故郷丹波への新たな認識と思いを深めることになりました。

水上郡を南北に走る低地帯、中央分岐の山地に挟まれた回廊地形の「氷上回廊」。太古から南北の生き物が交流するルートとして「狩場」の存在や、人間にも便利な交流路となる地形として、旧石器時代後期から古代・近世以降の遺跡の存在が多く認められる。

“水別れ”の認識が飛躍していきました。

故郷丹波の稀な地理・風土・歴史の一端にふれたことは新鮮で興味深いこ

とでした。

総会当日には、25回生35名が各地から駆けつけ援助激励を頂きました。前泊組は熱海と学士会館で前夜祭を楽しみました。

準備にあたっては、24回生から丁寧な引継と援助を受けました。

幹事学年としての経験は、同郷・同窓・同学年の絆を深めることができ貴重な財産となりました。

参加された来賓や会員の方々、支えて頂いたすべての皆さんへ感謝の気持ちでいっぱいです。こうした思いできりくめたことに、終始「幹事学年を楽しんで下さい」と激励して頂いた谷支部長へは、「厳しい時もありましたがしっかりと楽しめました」と報告したいと思います。

これからは肩の荷を下ろして気軽に柏陵同窓会にかかわっていききたいと思えます。

(幹事学年代表 野垣 有)

インフォメーション

展覧会

笹倉鉄平「原画」展

令和元年6月25日～30日セントラルミュージアム銀座において「優しい気持ちになる風景」をタイトルに、光の情景画家鉄平さんの個展が開催されました。最新作を含む原画70点と80点の版画を展示即売、土日にはサイン会がありました。レストラン内の絵画



に、「ペットが入れるレストラン? エッ? 犬猫ちゃんが居ない」慌てました。大丈夫! 居ました、上の方に。何と店内の額の中に、わんちゃんたちが

おすまし顔で鎮座ましまして。何という安堵感! 優しさに包まれた一時でした。

(岡田)

◎酒井典子さんとご夫妻の

「初めての二人展」

平成30年12月5日～11日まで所沢市民ギャラリーで開催されました。奥様の典子さんの布の花の見事さは以前に見せて頂いたこ



ともあり、娘と一緒にワクワクと伺いました。会場は多くの人で賑わい、寒さもどこへやらという雰囲気。染めから作成される花は本物と見

紛うばかり、真っ白なすすみ草のお花畑、華やかに咲くバラ、清々しい鉄線等々。幸せの香りがするケーキもありました。ご主人の建物(200)の精巧な出来映えには圧倒されました。マリーアントワネットのトリアノンの別荘(写真から設計されたとの事)ミッキーが踊り出て来るようなディズニーの家、自分達の理想の別荘緑溢れるお庭等々。お二人の夢の世界へと誘われた一時でした。

(\*マイギャラリー参照)

(大城戸しず代 台東区)

◎ハワイアン音楽の調べと優雅なフラダンスでハワイの文化の香りをお届けします!!

—2016年11月12日の「ふるさとの会」から演奏とフラダンスを披露して下さいます皆様は、岸本会長のご縁で今年もお願い出来る予定です。皆様についてのご紹介を星野様にお願ひしました—

## ◆インフォメーション



えず高齢者施設を専門に活動を開始した。ゆったりと優しいハワイアン音楽のリズムが、お年寄りの癒しにつながるような気がした。出前・出張バンドとして新聞やTVで紹介されるようになり、現在では年間に20回以上のお

1977年の夏、50代の仲間達が昔を思い出して楽器を奏でている時、誰からともなく「折角集まったので何か世の中に役立つことをやりたい」ということでほとんど拍子にバンド結成へと話が進んだ。お年寄りの福祉問題が他人ごととは感じられない世代。とりあ

座敷がかかるようにもなった。

〈コンセプト〉生きがい・友情・感動  
そして感謝……アロハの心です

〈制作CD〉2010年・日頃演奏する曲から14曲「The Stage Collections」  
2016年・フラダンス用11曲「日本語で踊ろう」

〈メンバープロフィール〉

西澤史郎（ウクレレ・ボーカル）慶應義塾S39年卒、甘いマスクに似合わずレッキとした体育会テニス部の出身。  
夏はダイビング、冬はスキー（指導員）とスポーツ万能。

落合克彦（ビブラフォン・パーカッション）慶應義塾S39年卒、長い外国生活で鍛えた英語は本格的。ただしカラオケはド演歌、歌はファルセット、腰には腰痛防止コルセット。

弓桁昌克（ベース・司会）慶應義塾S42年卒、茅ヶ崎の住人。文字通り湘南ボーイ。（今は湘南オジン）チェロも弾きこなし毎年のホームコンサートにはファンも多い。

星野慎一郎（ギター）慶應義塾S42年卒、昔加山雄三、今西田敏行、50年前の譜面を引つ張り出して青春の思い出にふけている。

山本圀治（ペダル・スティールギター）慶應義塾S44年卒、学生時代から注目されたペダルスティールギターの奏法は、益々円熟味を増し日本でも数少ないテクニクスの持ち主。

石原ひな子（フラ）東京都出身。幼少の頃よりハワイの文化に親しみながら育つ。1996年本格的にフラを学び始め2002年ハワイに渡米。帰国後はフリーのフラダンサーとしての活動を中心に、シスターズアイナフラスタジオを主催し、各地でフラの指導にもあたっている。フラだけでなくハワイの文化・言語などにも造詣が深く、現在も毎年1〜2ヶ月ほどハワイに滞在しハワイの文化を学ぶように努めている。

（星野慎一郎）

◎寄附者芳名(平成30年度)

兵庫県東京事務所所長

入江 武信殿(ふるさと会御祝儀)

二〇、〇〇〇円

柏原高等学校校長

井上千早彦殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

柏陵同窓会会長

竹内 牧人殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

柏陵同窓会阪神支部支部長

仁藤 欽嗣殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

丹波新聞社会長

小田 晋作殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

織田家一九代当主

織田 信孝殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

岸本 勳殿

安達 博子殿

中居 篤子殿

藤井 栄藏殿

山口 敏之殿

頼澤 豊殿

内田めぐみ殿

大野 義昭殿

藤原 昌殿

山名 昌衛殿

八、〇〇〇円

吉見 弘文殿  
蘆田あつ子殿

八、〇〇〇円  
五、〇〇〇円

石橋 昭彦殿

五、〇〇〇円

荻野 武殿

五、〇〇〇円

梶原やす子殿

五、〇〇〇円

金出 一郎殿

五、〇〇〇円

谷口 捷殿

五、〇〇〇円

谷口 浩章殿

五、〇〇〇円

田村 公平殿

五、〇〇〇円

堀井 隆川殿

五、〇〇〇円

足立 敏昭殿

四、〇〇〇円

三浦 宏殿

四、〇〇〇円

赤井 正洋殿

三、〇〇〇円

足立 義雄殿

三、〇〇〇円

木寺 昭三殿

三、〇〇〇円

絹川 正殿

三、〇〇〇円

坂上 豊殿

三、〇〇〇円

笹倉 鉄平殿

三、〇〇〇円

高見 秀史殿

三、〇〇〇円

谷垣 浩樹殿

三、〇〇〇円

千葉 淳子殿

三、〇〇〇円

鶴田宏・ゆき子殿

三、〇〇〇円

橋本 真二殿

三、〇〇〇円

原 利充殿

三、〇〇〇円

廣瀬 安伸殿

三、〇〇〇円

藤田 純殿

三、〇〇〇円

藤田 千治殿

三、〇〇〇円

藤田 玲子殿

三、〇〇〇円

細見 充彦殿

三、〇〇〇円

前田 武彦殿

三、〇〇〇円

渡辺 昌彦殿

三、〇〇〇円

足立 啓介殿

二、〇〇〇円

足立 美都子殿

二、〇〇〇円

北村 貞子殿

二、〇〇〇円

小林 和子殿

二、〇〇〇円

近藤 利春殿

二、〇〇〇円

徳舛 雅孝殿

二、〇〇〇円

足立 武夫殿

一、〇〇〇円

足立 東一郎殿

一、〇〇〇円

稲岡 俊一殿

一、〇〇〇円

大坪 則夫殿

一、〇〇〇円

大野 均殿

一、〇〇〇円

柿木 妙子殿

一、〇〇〇円

久呉 道子殿

一、〇〇〇円

野垣 有殿

一、〇〇〇円

山本 述子殿

一、〇〇〇円

余田 幸夫殿

一、〇〇〇円

米澤 紀成殿

一、〇〇〇円

❖ 本誌にご協力有難うございます



SOMPO  
ホールディングス

保険の先へ、挑む。

損保ジャパン日本興亜

# 保険の 先へ、挑む。

変化の時代にも、揺らぐことのない確かな明日をお届けしたい。  
その想いをカタチにするために、私たちは進化します。お客さまの  
「安心・安全・健康」な暮らしをひとつなぎで支えるグループへ。  
保険の先へ、挑む。

日本の「損保」から、世界で伍していく「SOMPO」へ。



損保ジャパン日本興亜はSOMPOホールディングスの一員です。

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

南東京支店 品川支社

〒108-0075 東京都港区港南 1-6-31

Tel:03-5781-8041 <https://www.sjnk.co.jp/>



すべての  
働く人のために、  
タイヤは強く  
進化した。

優れたロングライフ、より確かな耐摩耗性能、  
さらに向上した性能が働く人たちをサポート。

よりタフになった、ヨコハマのライトトラック用タイヤ、LT151R。

イテコーイテワール

このタイヤには、プロに選ばれる理由があります。

**LT151R**

New High Performance Radial Tire for LIGHT TRUCK



**YOKOHAMA**

❖ 本誌にご協力有難うございます



## ひょうご出会いサポート 東京センター

行政が真剣にマッチング！  
リーズナブルで安心・安全

恋活・婚活のお相手さがしを兵庫県がサポートします

- ・登録手数料 5,000円/年（20歳代の方は3,000円/年）  
（※登録手数料以外はかかりません）
- ・結婚を希望し、20歳以上の独身の方
- ・インターネットに接続できる環境にあり、  
E-mailアドレスをご登録いただける方



東京都千代田区大手町2-6-2 パソナグループ本部ビル3F  
開館日：火・水・金・土10:15～18:30



公益財団法人 兵庫県青少年本部 / 兵庫県

お気軽にお問合せください！

TEL (03) 6262-3035

認定NPO法人アジアの新しい風 理事  
<http://www.npo-asia.org>

上 高 子（氷上町出身）

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414  
TEL / FAX 03-5426-6714  
e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援するNPOです。

交流大学は中国・清華大学、タイ・タマサート大学、ベトナム・貿易大学、インドネシア・パジャジャラン大学。

東京都によって認定NPOに認定され、当NPOへの寄附金は、確定申告をすることで、税額控除の対象になります。すなわち、寄付総額から2000円を差し引いた金額の40%が税額より差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。

地元兵庫県産の酒米と神地寺山伏流水を用い、古式和釜、三段仕込み、槽搾りの創業以来、ほとんどスタイルを変えない伝統的な仕込み方法と、江戸時代より続く寒仕込みにこだわる

丹州氷上之地酒

# 奥丹波

時代を経ても変わらない深い味わいと穏やかな香りの純米酒  
そして、現代の酒造りの粋を極めた純米吟醸酒・純米大吟醸酒を中心に仕込んでいます



創業江戸享保元年

山名酒造株式会社

TEL 0795-85-0015

<http://www.okutamba.co.jp>

関東氷上郷友会の益々のご発展を  
祈念いたします。



RESONA

埼玉りそな銀行

❖ 本誌にご協力有難うございます

# 丹波新聞

変わる時代 変わらない思い

230人の人文字で  
「令和」!

青垣町大名草自治会の運動会で、0歳～90歳の参加した住民230人が新元号にちなんで人文字で「令和」を作り、上空から記念撮影。

(5月23日号より)

無料お試し購読受付中!!

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

丹波新聞

検索

tel.0795-72-0530

fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,255円(郵送料205円)

あなたの町の「石屋さん」  
そんな石屋をめざしています!!

墓石・霊園・建築石材・造園石材

## (株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和 36年卒

いしやは ここよ

☎ 0120-1480-54



工場・事務所 〒669-3311 丹波市柏原町母坪425

TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>

## 今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送  
データ入力等の情報処理、コールセンター、  
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

————— いつでもよりよいサービスを —————

# BSS

## 株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉県花見川区宇那谷町 1501-2  
TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865  
<http://www.betterservice.co.jp>  
e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

### 関西丹波市郷友会会報

# たんば

 第4号

(10月発行予定)

郵送料のみご負担にて配布致します。

[申し込み先] 関西丹波市郷友会  
[事務局] 大阪市西区新町2-15-27  
サンキン内(tel.06-6539-3201)

#### 令和元年度総会

12月8日(日) 午前10時50分より  
ポップアップホール  
(丹波市氷上町本郷)

当会は創設120周年を迎えました。  
これを記念して本総会では、「輝こう  
丹波っ子 丹波すくすく大賞」を募集  
した中から、受賞者の表彰を行う予定  
です。

## 丹波と東京を繋ぐ丹波のコンセプトショップ



春日局様の生誕の地「丹波市春日町」と、眠る地「東京都文京区」を繋ぐ丹波のコンセプトショップとして平成30年9月に

「丹波風土 東京春日店」を開業いたしました。弊社は丹波市春日町で丹波の栗・黒豆・大納言小豆を中心にした加工品を製造し、更にその加工品と丹波産の卵、牛乳、米、酒、フルーツ等を使った和洋菓子を製造販売しています。今後丹波ブランドを守り広げる為に、田舎の生産地と東京の消費地を結ぶ役割が担えたらと思っています。関東氷上郷友会の皆様にも是非ご利用くださいますようお願い申し上げます。

株式会社 **やながわ** 兵庫県丹波市春日町野上野209-1



風丹  
土波  
東京春日店

〒113-0033  
東京都文京区本郷1丁目35-26  
ラレーブ文京本郷ビル1階  
TEL 03-3868-5610

都営地下鉄 大江戸線 三田線 東京メトロ 丸ノ内線 南北線  
「春日」A1, A2出口より徒歩 「後樂園」4B出口より徒歩5

### 郷友の皆様へお願い

- ▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て快よく、その気がねのない交りは、互いに清新なげびを呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。
- ▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。
- ▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。
- ▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。
- ▼年会費の二〇〇〇円は会の運営を支える重要な資源です。同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願いいたします。
- ▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましげられるたびに、「丹波のきずな」の強さを思います。

(山ざる編集部)

医療法人社団 順孝会 理事長／医学博士  
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015

埼玉県加須市南大桑一六二〇一

TEL 〇四八〇一六五二五九八八  
FAX 〇四八〇一六五二六〇九七  
E-mail: kazu358@paste.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク  
足立国際会計事務所

代表取締役  
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足立知佳子

〒152-0035

東京都目黒区自由が丘二一三四UW自由が丘ビル六〇二

TEL 〇三三七二八一八〇四七 FAX 〇三三七二八一八一四七  
E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足立静雄

石橋順子

PCC大洋

岡吉明

〒351-0014

朝霞市膝折町四一四一三〇

TEL 〇四八一四六〇一六〇一  
FAX 〇四八一四六〇一三九七  
http://www.pcc-taiyo.co.jp

岡田昌子



岸  
田  
勇

上  
武  
正  
次

金  
出  
一  
郎

くすの木 14 (14 回生部会)  
にれの木 20 (20 回生部会)

栗  
田  
功

木  
呂  
子  
惠  
美  
子

坂  
上  
勝  
朗

坂  
上  
豊

坂  
山  
口  
一  
泰  
登  
男

仙台市在住

合唱指揮者

笹  
倉  
強

〒 352 | 0014 新座市栄四 | 五 | 二五  
TEL・FAX 〇四八 | 四七七 | 五六四〇

高  
見  
秀  
史

谷 社会保険労務士・CFP事務所  
年金・保険・労務・ライフプランの談話室

谷  
敬  
三

東京都 豊島区池袋本町四 | 二二 | 十七  
TEL 〇三 | 三九七 | 一七八二六  
E-mail: rani\_finance@a.toshima.ne.jp

谷口浩章

鶴田宏

エネクスフリート株式会社  
西日本支店 支店長

土井聖司

〒813-0018 福岡県福岡市東区香椎浜ふ頭三一―一四  
電話 ○九二一六八一―六八〇二

日本舞踊  
西崎祥  
端唄  
根岸妙

〒224-0032 横浜市都筑区茅ヶ崎中央五六―九―七二二  
電話 ○九〇―九九七七―七七九三

西山裕三

〒669-4302 兵庫県丹波市市島町  
中竹田一七―一

かおりよし農園  
こしひかり・紫黒米・雑穀米・生産販売

田中忍

〒669-3642 丹波市氷上町香良三二三  
電話 ○九〇―二五九四―〇七四六

原  
谷  
洋  
美

株式会社  
メイク

代表取締役  
広  
瀬  
寿  
和

〒160-0003

東京都新宿区本塩町二十三第二田中ビル  
電話 〇三―三三五四―〇二二一  
FAX 〇三―三三五四―二二二一

藤  
原  
ひ  
さ  
子

エネクスフリート株式会社  
関東支店 支店長

細  
川  
貴  
志

〒347-0046 埼玉県加須市大字平永五三七  
電話 〇四八〇―六二―二四〇〇

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り  
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中  
和合廟(永代供養墓)受付中

住職  
堀  
井  
隆  
川

〒193-0821

東京都八王子市川町四九三―二  
電話 〇四二―六五二―二〇一一  
FAX 〇四二―六五二―二〇三三

Gemba Lab 株式会社

代  
表  
安  
井  
孝  
之

〒101-0026 東京都千代田区神田佐久間河岸七〇  
第二田中ビル三八号室

❖ 本誌にご協力有難うございます



附録DVD：コンピュータ上で全頁閲覧可能！

B5判変型(260×190mm)・上製布貼表紙・函入・総3056頁

本体価格：**48,000円**+税

●書体字典の最高峰。未曾有の二十一万字収録！

# 大書源

二玄社創立五十周年記念出版  
全三巻十索引冊  
〔附録：DVD・書道史年表〕

漢字の姿は、一つではありません。  
三千年の歴史の中で、数多くのスタイルが生まれました。

●魚の例……

鍾繇	顏真卿	歐陽詢	米芾	空海	王羲之	小野道風
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰	𩺰
甲骨文	金文	石鼓文	說文篆文	居延漢簡	張遷碑	吳讓之

殷の甲骨・金文から清末の斉白石まで、あらゆる時代の様々な書体を収集し、二十一万を超える史上最多の字例を取載しました。二玄社の半世紀に亘る出版活動で蓄えた膨大な資料を基礎に作り上げた、書体字典の決定版です。

株式会社二玄社 代表取締役 渡邊也寸美

二玄社

〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 http://nigensha.co.jp

集	編
記	後

★今年の夏休みは忙しい。一つには、県が主催する英語教師のためのＩＴを使った授業作りという研修への参加。１日目は「パワーポイントを活用した授業」。文法や単語でさえイラストや写真をネットから拾ってきて動かしたり色を付けたりあの手で魅力的になるよう工夫する。最後は自分でもスライドを作りクラウド「Freemove」に保存し家でダウンロードというスマートさ。次は学校の情報の先生が主催するパソコン講座への参加。ここでもあんな事もこんな事も出来ることを知り目から鱗。次回は「タブレットを活用した授業」と「エクセル関係」が待っている。犬かきでＩＴの大海原を泳いでいる感じだが結構楽しい。

★柏原駅周辺で唯一の有人店「山の駅」へ入ったが紫煙で見通せない。「もう五輪前なのにどうして?」「ここは老人に優しい店ですから」。私も後期高齢者ですが。(徳田)

★俳壇へ寄稿して下さる金子徹様が余白に「郷里の会誌『山ざる』五十年の歴史を刻みますます充実。慶賀の至りです。これほどの継続充実ぶり、ほかではあまり聞きません」

と記して下さい、その通りと拍手喝采しました。令和を経て次の御代まで、書き継がれ読み継がれることを願っています。(原谷)

★今年6月に亡くなられた渡邊隆男名誉会長に「ふるさと会」に参加した時、文章上達法を尋ねたことがあります。渡邊名誉会長は身振り手振りを交えて「達人と呼ばれる人でも汗をかきながら一生懸命に書いているのですよ。一生懸命に書く。それに尽きますよ。」と答えて下さいました。貴重な言葉なので大切にしています。(本城)

★最近、渡辺さんにお会い出来てなかったのでお体の心配をし、奥様の友達にお訊ねしたら「元氣そうですよ」と聞いて安心。その数日後の訃報に、なんとも残念で数日は気持ちの整理が出来ず暗い気持ちが続きました。出版業界でも重職を担われている凄いが、同郷というだけで若輩の自分達に何時も友人感覚で親しく接して頂き感謝ばかりのお付き合いでした。水上ゴルフ会でも会長として引つ張って頂き、プレー後のパーティで出版業界の近況の報告をして頂くのがプレー以上に楽しみでした。懐かしい思い出が色々あり、もう一度お会いしたかったと本当に残念です。(岡)

★皆様のご支援で「山ざる」50年記念号を迎えられたことに感謝。郷友会は123年の歴史を刻み、その会誌「山ざる」は先輩たちの手弁当で引き継がれて来ました。丹波への思いと連帯感の強さに今更ながら感激。そのような素晴らしい「山ざる」を名誉顧問である渡辺さんが発行当時から今日まで陰になり日向になって支え、教えて下さいました。渡辺さんあつての「山ざる」でした。残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。(岡田)

山ざる 第50号 定価500円  
令和元年十一月一日発行

- 委員 井徳正吾 石橋順子 上高子  
大野義昭 岡吉明 岡田昌子  
坂上勝昭 徳田八郎衛 原谷洋美  
藤原ひさ子 本城英明 安井孝之

発行者 関東水上郷友会会長岸本 勲  
〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30  
関東水上郷友会事務局(岡吉明)

振替〇〇四八(四六〇)一六〇一  
振替〇〇一〇一三二一三三三〇  
製 作 株式会社三女社  
編集協力 ダイワコムズ



**HINO**  
**RANGER**

社長、こいつに乗せてくれ！



**HINO**  
**PROFIA**

**東京日野自動車株式会社**

本社：東京都港区新橋5丁目18-1  
TEL 03-3578-3955 (代表)



書写教育の第一人者による手本。

# 美しい毛筆の 書きかた

宮澤正明 著

B5判・208頁

●2200円+税



きれいに整った文字を書く  
毛筆を基礎から学ぶ  
楷書・行書・仮名・漢字仮名交じり

- 家庭で子どもに教えられるよう、「基本点画の書き方」を徹底解説。
- 日常に即した例文で、はがき・手紙などの書き方をマスター。
- 全ての常用漢字(2136字)を楷書の毛筆文字で一覧表化。



## 大人が学ぶ小学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・160頁 ●1500円+税

教育漢字1006字について楷・行・草書の三書体をマスター。小学校レベルの漢字を練習するだけで、キレイなくずし字が気軽に身に付く練習帳。



## 大人が学ぶ中学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・178頁 ●1800円+税

中学校で学ぶ漢字1130字について、楷・行・草書の三書体を網羅。ポイントを学びながら、キレイなくずし字が実用レベルで使えるようになる練習帳。



## きれいな文字の書きかた [書き込み式練習帳]

宮澤正明 著

B5判・160頁 ●1500円+税

なぞり書きを交えながら実際に鉛筆やペンで反復練習。ひらがな・漢字の練習から、ハガキ・手紙の書き方まで、きれいな文字が身につく練習帳。

株式会社二玄社 代表取締役 渡邊也寸美



二玄社

〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 <http://nigensha.co.jp>